

仙台市文化財調査報告書第 387 集

藥師堂東遺跡

—— 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書VII ——

2011年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会



1. 調査区全景（北から）



2. 平成 21 年度調査区基本土層 C 断面（北から）



3. S M 3 遺物出土状況（北から）



4. S M 5 遺物出土状況（南西から）



5. S M 8 遺物出土状況（西から）



1.SM5 出土
五鉢杵



2.SM8 出土
独鉢杵



3.SM3 出土 柄鏡（柄文と鳳凰文）



4.SM5 出土 柄鏡（蓮葉文）



5.SM5 出土 色紙箱蓋（表）



6.SM5 出土 色紙箱蓋（裏）

序 文

仙台市の文化財保護行政につきまして、日ごろから多大なご協力を賜り、感謝申し上げます。

さて、当市では、高速鉄道東西線事業を進め、地下鉄南北線やJR、バスなどと連携して公共交通ネットワークを形成することにより、さらに暮らしやすく環境にやさしい新しい都市づくりを目指しております。

この計画路線内には、仙台城跡やそれに関連する遺跡があり、また、未発見の遺跡も予想されることから、仙台市教育委員会では、施工主体者である仙台市交通局との協議を重ね、平成16年度より確認・試掘調査を行ってまいりました。このうち、薬師堂東遺跡は、これまで遺跡として登録はされておりませんでしたが、史跡陸奥国分寺跡の東に隣接していることから、試掘調査を実施した結果、古代の遺構や遺物が発見され、遺跡として登録しました。

平成21年度の本発掘調査の結果、古代の竪穴住居跡のほかに、江戸時代の墓跡が多数発見されました。墓跡の副葬品には、鏡や銭貨などのほかに、密教法具や蒔絵の色紙箱という珍しい品も発見されております。これらのことから、古代から近世にかけての国分寺周辺の生活を物語る、貴重な資料が発見されたものと考えております。

本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様にも広く活用され、地域の歴史と文化財に関心を抱く契機になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

仙台市教育委員会

教育長 青沼一民

例 言

1. 本書は高速鉄道東西線建設事業に伴い実施された、薬師堂東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の監理のもとに、国際文化財株式会社（平成19年度まで国際航業株式会社）が行った。
3. 本書の作成・編集・執筆は仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 渡部紀 菊地貴博の監理のもとに、国際文化財株式会社 野神伸 安達通夫が担当した。
執筆の分担は次のとおりである。
第1章第1節…渡部 第1章第2・3節、第2章～4章…野神 第6章…渡部、野神の協議による
4. 人骨及び歯については、鈴木敏彦氏（東北大学大学院歯学研究科）に鑑定を依頼した。
5. 自然科学分析は、吉川昌伸・吉川純子（古代の森研究会）両氏が行った。
6. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、次の諸氏・機関よりご指導、ご教示、さまざまな協力を賜った（敬称略）。
有賀祥隆（東北大学名誉教授）泉武夫（東北大学）高橋あけみ（仙台市博物館）松本秀明（東北学院大学）仙台市交通局 仙台市建設局 記して謝意を表す次第である。
7. 発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書の土色は、「新版標準土色図」（農林水産省農林水産技術会議事務局 1998年版）に準拠している。
2. 本書中の第2図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「仙台東北部」を、第3図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「仙台東北部」及び「仙台東南部」と1万分の1地形図「仙台駅」を使用した。
3. 図中の座標値は世界測地系座標を使用した。本文図版等で使用した方位は真北を基準としている。
4. 標高値は、海拔高度（T.P.）を示している。
5. 遺構図の縮尺は1/60縮尺を基本とし、近世墓については1/40縮尺とした。
6. 「メートル」を「尺」に換算する際は、1尺 = 30.303cmとして計算した。
7. 基本層の表記は、表土層からローマ数字を用い、遺構堆積土についてはアラビア数字で表記した。
8. 遺構図において、■（トーン）は礫及び被熱範囲、柱痕跡を示している。
9. 遺構・遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。
SA:柱跡、SB:掘立柱跡、SD:溝跡、SK:土坑、SI:堅穴住居跡、SM:墓跡、P:ピット、SX:性格不明遺構
D:土師器・赤焼土器、E:須恵器、F:丸瓦、G:平瓦、H:その他の瓦、I:陶器・瓦質土器・土師質土器
J:磁器、K:石器・石製品、L:木製品、N:金属製品、P:土製品、Q:骨角器、X:その他の遺物
なお、石列には略号は用いていない。
10. 遺物実測図は原則として縮尺1/3としたが、瓦は1/5、一部の金属製品・石製品・古銭は2/3、一部の金属製品と木製品・自然遺物は1/2で表示した。その他については各図のスケールを参照されたい。
11. 遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線、推定線は破線で表した。中心線が一点鎖線のものは、展開し図上復元したものである。また、■（トーン）は土師器の黒色処理を示している。
12. 銭貨の初鑄年は「日本出土銭貨総覧」（兵庫埋蔵銭貨研究会 1996年版）によった。
13. 遺物観察表の法量の記載で（ ）書きの数字は残存値を示している。



本文目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査要項	2
第3節 調査概要	2
1 現地調査	2
2 整理作業	3
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査方法	6
1 調査方法	6
2 調査区グリッドの設定	6
3 遺構名称について	6
第4章 検出遺構と遺物	8
第1節 平成 19 年度調査区	8
1 調査概要	8
2 基本層序	9
3 検出遺構	9
第2節 平成 21 年度調査区	12
1 調査概要	12
2 基本層序	12
3 検出遺構と出土遺物	15
(1) 積穴住居跡	15
(2) 掘立柱建物跡	25
(3) 溝跡	26
(4) 上坑	29
(5) 墓跡	37
(6) 性格不明遺構	70
(7) その他の遺構	72
第5章 自然科学分析	77
第6章 出土遺物と検出遺構について	82
1 古代の出土遺物と遺構について	82
2 近世の墓跡について	83
3 その他の遺構について	87
4 まとめ	87
引用・参考文献	87
写真図版	89

挿 図 目 次

第 1 図 調査対象地配置図.....	1	第 44 図 SK24 土坑平面図・断面図.....	35
第 2 図 道路周辺地形図.....	4	第 45 図 SK25 土坑平面図・断面図.....	35
第 3 図 薬師堂東遺跡と 陸奥国分寺跡・陸奥國分尼寺跡位置図.....	4	第 46 図 SK26 土坑平面図・断面図.....	35
第 4 図 周辺遺跡分布図.....	5	第 47 図 SK27 土坑平面図・断面図.....	36
第 5 図 平成 19・21 年度 調査区配置図・グリッド設定図.....	7	第 48 図 SK28 土坑平面図・断面図.....	36
第 6 図 平成 19 年度調査区全体図.....	8	第 49 図 SK29・30 土坑平面図・断面図.....	36
第 7 図 平成 19 年度調査区基本土層.....	9	第 50 図 SK32 土坑平面図・断面図.....	37
第 8 図 SA1 柱列跡平面図・断面図.....	9	第 51 図 SM1 茅跡平面図・断面図.....	37
第 9 図 SD1 溝跡平面図・断面図.....	10	第 52 図 SM1 茅跡出土遺物.....	38
第 10 図 SD2 溝跡平面図・断面図.....	10	第 53 図 SM2 茅跡平面図・断面図.....	38
第 11 図 SX1 性格不明構溝平面図・断面図.....	11	第 54 図 SM2 茅跡出土遺物.....	39
第 12 図 平成 21 年度調査区基本土層.....	12	第 55 図 SM3 茅跡平面図・断面図・出土遺物(1).....	40
第 13 図 平成 21 年度調査区全体図.....	13-14	第 56 国 SM3 茅跡出土遺物(2).....	41
第 14 図 SI1・2・3 穴式住居跡断面図.....	15	第 57 国 SM4 茅跡平面図・断面図.....	41
第 15 国 SI1・2・3 穴式住居跡断面図.....	16	第 58 国 SM4 茅跡出土遺物.....	42
第 16 国 SI1 穴式住居跡平面図・ビット断面図.....	17	第 59 国 SM5 茅跡平面図・断面図.....	42
第 17 国 SD2 穴式住居跡平面図.....	19	第 60 国 SM5 茅跡断面図・出土遺物(1).....	43
第 18 国 SD2 穴式住居跡換出構断面図.....	20	第 61 国 SM5 茅跡出土遺物(2).....	44
第 19 国 SD2 穴式住居跡出土遺物(1).....	21	第 62 国 SM5 茅跡出土遺物(3).....	45
第 20 国 SD2 穴式住居跡出土遺物(2).....	22	第 63 国 SM6 茅跡平面図・断面図・出土遺物.....	46
第 21 国 SD2 穴式住居跡出土遺物(3).....	23	第 64 国 SM7 茅跡平面図・断面図・出土遺物.....	47
第 22 国 SI3 穴式住居跡平面図・出土遺物.....	24	第 65 国 SM8 茅跡平面図・断面図.....	48
第 23 国 SB1 挖立柱建物平面図・断面図.....	25	第 66 国 SM8 茅跡出土遺物.....	49
第 24 国 SB1 挖立柱建物土坑断面図.....	26	第 67 国 SM9 茅跡平面図・断面図・出土遺物.....	50
第 25 国 SD1 溝跡平面図・断面図.....	26	第 68 国 SM10 茅跡平面図・断面図・出土遺物.....	51
第 26 国 SD2・3 溝跡平面図・断面図.....	27	第 69 国 SM11・12・13 茅跡平面図・断面図.....	52
第 27 国 SD4 溝跡平面図・断面図.....	27	第 70 国 SM11 茅跡出土遺物.....	52
第 28 国 SD5 溝跡平面図・断面図・出土遺物.....	28	第 71 国 SM12 茅跡出土遺物.....	53
第 29 国 SD6 溝跡平面図・断面図.....	28	第 72 国 SM13・14 茅跡平面図・断面図.....	54
第 30 国 SK1 土坑平面図・断面図.....	29	第 73 国 SM13 茅跡出土遺物.....	54
第 31 国 SK2 土坑平面図・断面図.....	29	第 74 国 SM14 茅跡出土遺物(1).....	54
第 32 国 SK3 土坑平面図・断面図.....	29	第 75 国 SM14 茅跡出土遺物(2).....	55
第 33 国 SK4 土坑平面図・断面図.....	30	第 76 国 SM15 茅跡平面図・断面図.....	55
第 34 国 SK6 土坑平面図・断面図.....	30	第 77 国 SM16 茅跡平面図・断面図・出土遺物(1).....	56
第 35 国 SK7 土坑平面図・断面図・出土遺物.....	31	第 78 国 SM16 茅跡出土遺物(2).....	57
第 36 国 SK8 土坑平面図・断面図.....	31	第 79 国 SM17 茅跡平面図・断面図.....	57
第 37 国 SK10 土坑 平面図・断面図・骨片出土状況.....	32	第 80 国 SM17 茅跡出土遺物.....	58
第 38 国 SK11 土坑平面図・断面図・出土遺物.....	33	第 81 国 SM18 茅跡平面図・断面図.....	58
第 39 国 SK15 土坑平面図・断面図.....	33	第 82 国 SM18 茅跡出土遺物.....	59
第 40 国 SK16 土坑平面図・断面図.....	33	第 83 国 SM19・20・21 茅跡平面図・断面図.....	60
第 41 国 SK21 土坑平面図・断面図.....	34	第 84 国 SM19 茅跡出土遺物.....	61
第 42 国 SK22 土坑平面図・断面図.....	34	第 85 国 SM20 茅跡出土遺物.....	61
第 43 国 SK23 土坑平面図・断面図.....	34	第 86 国 SM21 茅跡出土遺物.....	62

第 90 図 SM24 草跡平面図・断面図	64
第 91 図 SM24 草跡出土遺物	65
第 92 図 SM25 草跡平面図・断面図	65
第 93 図 SM25 草跡出土遺物	66
第 94 図 SM27 草跡平面図・断面図・出土遺物	67
第 95 図 SM26・28 草跡平面図・断面図	68
第 96 図 SM26 草跡出土遺物	68
第 97 図 SM28 草跡出土遺物 (1)	68
第 98 図 SM28 草跡出土遺物 (2)	69
第 99 図 SM29 草跡平面図・断面図	69
第100図 SX1 性格不明遺構 平面図・断面図・出土遺物	70
第101図 SX2 性格不明遺構 平面図・断面図・出土遺物	71
第102図 SX9 性格不明遺構平面図・断面図	72
第 103 図 石列平面図・断面図・見通図	72
第 104 図 SA1・2 柱列跡平面図・断面図	73
第 105 図 SA3 柱列跡平面図・断面図	74
第 106 図 SA4 柱列跡平面図・断面図	74
第 107 図 SA5 柱列跡平面図・断面図	75
第 108 図 葵師堂東遺跡出土 木材の顯微鏡写真 (1)	80
第 109 図 葵師堂東遺跡出土 木材の顯微鏡写真 (2)	81
第 110 図 草跡の時期別分布状況	86
第 111 図 現在の葵師堂東遺跡の位置	87
第 112 図 「安政補正改革仙府絵図」 安政 3 ~ 6 年 (1855 ~ 1859)	87

表 目 次

第 1 表 遺跡地名表	5
第 2 表 平成 19 年度ビット集計表	11
第 3 表 平成 21 年度ビット集計表 (1)	75
第 4 表 平成 21 年度ビット集計表 (2)	76
第 5 表 葵師堂東遺跡出土 木製品・木棺底板の樹種	78

写真図版目次

図 版 1 平成 19 年度調査区 (1)	90
図 版 2 平成 19 年度調査区 (2)	91
図 版 3 平成 21 年度調査区 (1)	92
図 版 4 平成 21 年度調査区 (2)	93
図 版 5 平成 21 年度調査区 (3)	94
図 版 6 平成 21 年度調査区 (4)	95
図 版 7 平成 21 年度調査区 (5)	96
図 版 8 平成 21 年度調査区 (6)	97
図 版 9 平成 21 年度調査区 (7)	98
図 版 10 平成 21 年度調査区 (8)	99
図 版 11 平成 21 年度調査区 (9)	100
図 版 12 平成 21 年度調査区 (10)	101
図 版 1 3 平成 21 年度調査区 (11)	102
図 版 1 4 平成 21 年度調査区 (12)	103
図 版 1 5 出土遺物 (1)	104
図 版 1 6 出土遺物 (2)	105
図 版 1 7 出土遺物 (3)	106
図 版 1 8 出土遺物 (4)	107
図 版 1 9 出土遺物 (5)	108
図 版 2 0 出土遺物 (6)	109
図 版 2 1 出土遺物 (7)	110
図 版 2 2 出土遺物 (8)	111
図 版 2 3 出土遺物 (9)	112
図 版 2 4 出土遺物 (10)	113

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成11年5月、仙台市教育委員会と、当時事業主管局であった仙台市都市整備局との間で、高速鉄道東西線建設事業に伴う遺跡の取り扱いについて、第1回目の協議が持たれた。その後、事業主管局が仙台市交通局に移され、平成15年度より仙台市教育委員会との本格的な協議が行なわれた。その結果、高速鉄道東西事業計画予定路線内における周知の遺跡及び遺跡範囲外の状況把握のため、まず確認調査及び試掘調査を実施し、その結果を踏まえて本調査を実施する箇所を決定し、これを基に発掘調査を順次、事業計画に沿いながら進めていくことが両者間で確認された。以上の協議事項に基づき、平成16年度より確認調査及び試掘調査を開始した。

(仮称)薬師堂駅建設予定地については、周知の埋蔵文化財匂藏地ではなかったが、史跡陸奥国分寺跡に隣接することから、埋蔵文化財の存在が予想されたため、事前に試掘調査を行うこととした。工事の計画では、都市計画道路孤小路尼寺線の地下を中心に高速鉄道東西線の本線及び駅舎が位置し、孤小路尼寺線の北側に北側駅出入口と駅前広場が位置し、南側に南側駅出入口が位置する。また、高速鉄道の工事に伴い、道路を拡幅することが計画されていた。

平成18年度に「薬師堂駅北側出入口部」の一部で試掘調査を行い、ピットや溝跡などを検出している（仙台市教委2007）。平成19年度には、孤小路尼寺線の南側で「薬師堂駅南側出入口部」とび「薬師堂駅南側拡幅部（支障物移設範囲）」を対象に試掘調査を行った。平成21年度には、「薬師堂駅北側出入口部」、「駅前広場」、「孤小路尼寺線拡幅部」を対象に試掘調査を行った。道路北側の試掘調査では、古代の竖穴住居跡や溝跡などが多数検出されたため、「薬師堂東遺跡」（宮城県遺跡登録番号01567）として遺跡登録を行い、「北側出入口部」を中心とした範囲を対象に本発掘調査を実施した。「孤小路尼寺線拡幅部」を対象とした試掘調査では、時期不明の土坑やピットなどがわずかに発見されたのみで、本発掘調査対象とはしていない。

本書では、平成19年度の試掘調査と平成21年度の本発掘調査の結果について掲載している。平成21年度の「孤小路尼寺線拡幅部」の試掘調査結果は、駅前広場部分の発掘調査（平成22・23年度調査）の報告書に掲載する予定である。



第1図 調査対象地配置図

第2節 調査要項

第2節 調査要項

遺跡名：薬師堂東遺跡（宮城県遺跡登録番号 01567）

所在地：宮城県仙台市若林区木ノ下3丁目16・17番地・木ノ下5丁目2・3番地・大和町1丁目1番地

調査原因：高速鉄道東西線（仮称）薬師堂駅建設及び都市計画道路孤小路尼寺線拡幅工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当 平成19年度（野外調査）文化財課調査係主査 原河英二 佐藤洋 主事 広瀬真理子

平成21年度（野外調査）文化財課調査係主任 渡部紀 主事 加藤隆則 文化財教諭 志賀雄一

平成22年度（整理作業）文化財課調査指導係主任 渡部紀 文化財教諭 菊地貴博

調査組織 平成19年度（野外調査）国際航業株式会社文化事業部

主任調査員 園村雅敏 調査員 土橋尚起 計測員 佐藤和巳 計測補助員 大西孝之

平成21年度（野外調査）国際文化財株式会社東北支店

調査員 野神伸 調査補助員 西野順二 稲垣森太 計測員 浅野好治 計測補助員 佐々木亨

平成22年度（整理作業）国際文化財株式会社東北支店

調査員 野神伸 計測員 安達通夫

調査期間 平成19年5月7日～7月31日（整理作業 平成20年1月8日～3月6日）

平成21年8月18日～12月25日（整理作業 平成22年1月8日～1月29日）

調査面積 平成19年度 薬師堂駅南側出入口部 206m²（対象300m²）

薬師堂駅南側拡幅部（支障物移設範囲） 211m²（対象260m²）

平成21年度 薬師堂駅北側出入口部ほか 試掘調査 702m²（対象6,074m²）

本発掘調査 880m²

整理期間 平成22年5月10日～平成23年3月11日

第3節 調査概要

1 現地調査

平成19年度の試掘調査は、薬師堂駅南側出入口部（I区）及び薬師堂駅南側拡幅部（II区）を対象に、5月7日から7月31日まで行った。調査は、II区→I区の順で進めた。II区の調査は5月7日に開始した。住宅に近接した場所であるため、住宅の通路を確保し、切り回しながら調査を行い、7月10日に埋め戻しを完了した。I区は7月9日に調査を開始したが、全域が削平されていたため、遺構は確認されず、7月31日に埋め戻しを完了した。

平成21年度の調査は、まず北側出入口部を含めた駅前広場全体を対象とした試掘調査と、都市計画道路孤小路尼寺線の拡幅部分を対象とした試掘調査を行い、その結果により、北側出入口部を中心とした工事範囲を対象に本発掘調査を行うという予定であった。駅前広場全体を対象とした試掘調査は8月18日に開始し、12月2日までに14箇所のトレンチ調査を行った。試掘調査の結果、古代の竪穴住居跡などの遺構が確認され、本発掘調査が必要と判断されたため、北側出入口部を中心に本発掘調査を行った。本発掘調査は9月14日に開始した。調査の結果、古代の竪穴住居跡のほか、近世の墓跡が多数発見されたため、12月5日に市民を対象とした遺跡見学会を実施した。12月8日には、「薬師堂手づくり市」にあわせて調査現場を開いた。本発掘調査は12月25日に埋め戻しを完了した。道路拡幅部分を対象とした試掘調査は、9月14日に開始した。住宅に近接した場所であるため、住宅の

通路を確保し、切り回しながら5箇所のトレンチ調査を行い、10月23日に埋め戻しを完了した。

2 整理作業

出土した遺物の数量は、内法54.5cm×33.6cm×15cmの平箱に30箱である。遺物の内容は、土師器、須恵器、瓦、金属製品、木製品などである。出土遺物は水洗の後、脆弱な遺物はバインダー17による強化を行い、注記・接合を行った。土器類の欠損部の補充には、プライトン、モビニール、エレホンなどを用いた。金属製品は土とサビを除去した後、シリカゲル乾燥剤とともに収納した。遺構の時期決定資料などは抽出、登録し、実測図と遺物観察表を作成した。

遺物実測図のデジタルトレース及び編集にはAdobe社製のIllustratorを、画像処理には同社のPhotoShopを使用した。遺物写真は1000万画素級のデジタル一眼レフを用いて撮影した。

遺構平面図・断面図は、現場で計測及び手実測した図面データを、Adobe社製Illustratorで編集・調整を行い作成した。また、遺構・遺物の図版、写真図版のレイアウト及び報告書の編集作業は、Adobe社製InDesignを使用した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

薬師堂東遺跡は、仙台駅の東南東約2.3kmの仙台市若林区木ノ下3丁目に所在する。遺跡の北西約1.0kmには、北東から南西方向に段丘と沖積地の地形境界があり、この境界は「長町一利府断層」と呼ばれている。この断層の西側の段丘は、上位から青葉山段丘・台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘の順に5面に区分される（松本2001）。断層の東側には、七北田川・広瀬川・名取川・阿武隈川によって形成された沖積平野である「宮城野海岸平野」が、海岸線まで幅約10kmほど広がっている。この沖積平野には、自然堤防や後背湿地などが形成され、松本（2005）によると、本遺跡は、標高13.5～14mの砂礫地に立地している。

第2節 歴史的環境

遺跡の西には史跡陸奥国分寺跡、東には史跡陸奥国分尼寺跡が位置する。陸奥国分寺跡は、発掘調査の結果、東西800尺（242m）、南北はそれ以上の規模であり、南大門、中門、金堂、講堂、僧房が南北に配されている（陸奥国分寺発掘調査委員会1961）。陸奥国分寺と陸奥国分尼寺は、8世紀中頃に建立されたとみられており、奈良時代中頃から平安時代にかけての遺物の出土がみられるが、中世期の姿については不明な点が多い。寺伝などには、文治5年（1189年）の奥州合戦の際に陸奥国分寺の建物が焼け、以後衰退したと伝わるが、鎌倉期に造られた仏像が多く伝わること（政次1996）から、今後検討していく必要がある。江戸時代になると、陸奥国分寺は伊達家による庇護を受け、慶長12年（1607年）には伊達政宗により陸奥国分寺薬師堂が建立され、寺領も与えられ、薬師堂を中心多く坊が立ち並び、隆盛をきわめていた。明治時代になると、寺禄を失い衰微して、江戸時代の「別当坊」の位置に現在の寺が存続している。

薬師堂東遺跡は、近世陸奥国分寺の「院主坊」及び「馬場本坊」の位置にあたる。遺跡の北側には、国分寺東遺跡が位置する。国分寺東遺跡は、平成13年（2001年）に調査が行われ、平安時代の堅穴住居跡、中世の土坑などが発見されている（仙台市教委2003）。

第2節 歴史的環境



第2図 遺跡周辺地形図（国土地理院 1998）



第3図 薬師堂東遺跡と陸奥國分寺跡・陸奥國分尼寺跡位置図



第4図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名称	時代	所在地	種別	番号	遺跡名称	時代	所在地	種別
1.	要町空堀遺跡	奈良・平安・近世	若林区木ノ下3丁目地	集落・墓	12.	桜深古墳	古墳	若林区南小泉1丁目	古墳
2.	阿彌原分寺跡	奈良・平安	若林区木ノ下3丁目地	寺院	13.	御宿古墳	古墳	若林区南小泉1丁目	古墳
3.	阿彌原分尼寺跡	奈良・平安	若林区白萩町ほか	寺院	14.	保院院前遺跡	奈良・平安・中世	若林区六十人町	集落
4.	国分寺東遺跡	平安・中世	若林区木ノ下3丁目	集落	15.	志道遺跡	奈良・平安	若林区宮子2丁目	散布地
5.	阿彌原分寺五輪塔	中世	若林区木ノ下2丁目	五輪塔	16.	南船越跡	中世	宮城野区穴門1丁目	城館
6.	和歌忠親主居の屋	中世	若林区白萩町	墓	17.	南1城跡	中世	宮城野区油日1丁目	城館
7.	南小泉遺跡	弥生・古墳・奈良 平安・中世・近世	若林区南小泉	集落・聚散	18.	南1船坂古墳	中世	宮城野区油日1丁目	古墳
8.	義種園遺跡	中世・近世	若林区南小泉1丁目	聚落・堤防	19.	南1船越跡	中世	宮城野区江戸崎1丁目	城館
9.	若林城跡	古墳・奈良・平安 中世・近世	若林区古城2丁目	城郭	20.	近村子の堀など	近世	宮城野区船ヶ岡5丁目	墓
10.	通見塚古墳	古墳	若林区通見1丁目地	古墳	21.	正寺寺遺跡	平安	宮城野区新寺5丁目	散布地
11.	法頭塚古墳	古墳	若林区一本町	古墳	22.	寺崎寺境内古墳	古墳	宮城野区寺崎4丁目	古墳
					23.	成田寺古墳	中世	宮城野区寺崎3丁目	古墳
					24.	二室熊神社社址跡群	中世	若林区市郷河1丁目	古墳

第1表 遺跡地名表

第3章 調査方法

1 調査方法

平成19年度の駅南側出入口部及び拡幅部調査は、アスファルトや砂利・盛土（I層）の除去と、盛土以前の耕作土層（II層）と黒褐色シルト層（III層）を、遺構確認面のIV層上面まで重機で除去し、以下は人力掘削にて調査を実施した。

平成21年度は、北側駅前広場部の試掘調査については、聖和学園のグラウンドの盛土層（I層）と遺物包含層（II層・III層）を、遺構確認面のIV層上面まで重機で除去し、以下は人力掘削にて調査を実施した。駅北側出入口部については、本体工事によって、既にI層とII層・III層及びIV層の一部が削平を受けており、表面に敷設されていた砂利と、一部残存していた遺物包含層（III層）を、遺構確認面であるIV層上面まで重機で除去し、以下は人力掘削にて調査を実施した。南側道路拡幅部でも同様に、アスファルトや砂利・盛土（I層）と、遺物包含層（II層）を遺構確認面のIII層上面まで重機で除去し、以下は人力掘削にて調査を実施した。調査区は、調査を行った年度と作業工程上、5区に分け、それぞれの調査区を、南側出入口部、南側拡幅部、南側道路拡幅部、駅前広場部、北側出入口部と呼称した（第1図）。

計測作業は、平成18年度調査を踏襲し、世界測地系座標に基づいて設置された基準点から、今回調査に使用可能な位置に新点を設置し、遺構の計測・遺物出土地点の計測を行った。使用機材は、トータルステーション：TOPCON社GPT7000、電子平板：福井コンピュータ社BlueTrend Vを使用し図面の作成を実施した。

写真撮影は、作業開始前、遺構検出状況、土層断面、遺物出土状況、遺構完掘状況、完掘全景写真を、35mm一眼レフカメラを使用し、カラーリバーサル及びモノクロの2種類のフィルムで撮影した。補助として500万画素以上のデジタルカメラで、調査写真と同一カットのほか、作業状況等を撮影し、調査日誌に添付するなどして日々変化する遺跡の状況を記録した。調査区の全景撮影は、遺構の完掘状況を27mの高所作業車を使用して行った。

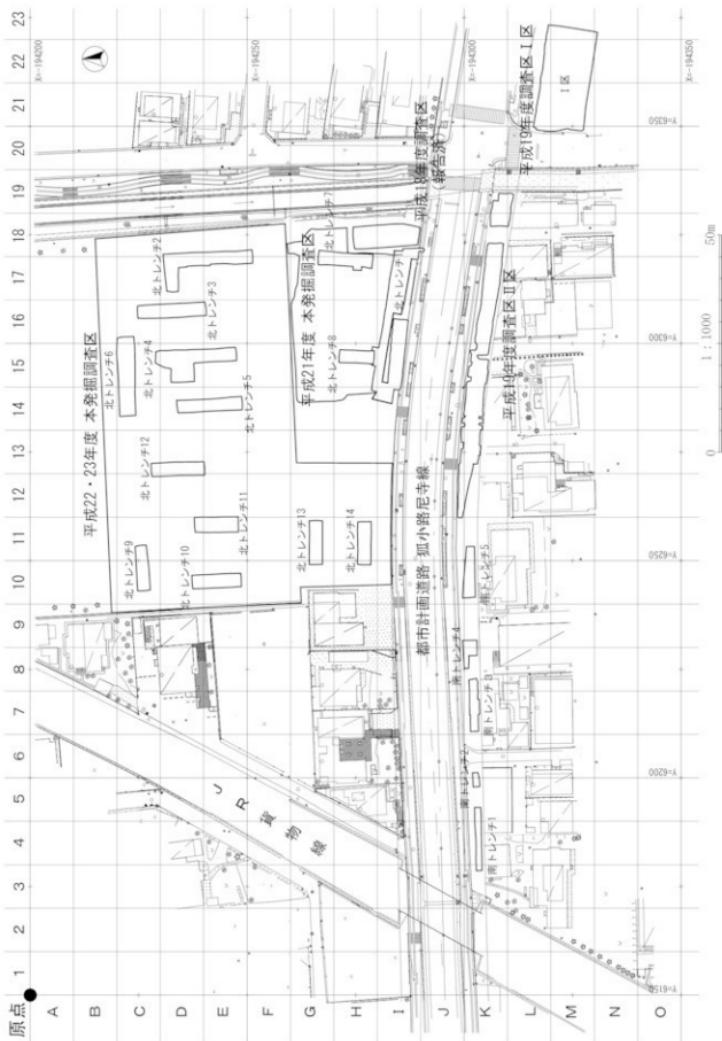
出土遺物は、1番から取り上げ番号を付し、遺物カードに調査区・出土地点（遺構No.）・層位・内容・出土年月日等の情報を記載した。

2 調査区グリッドの設定

薬師堂東遺跡の調査は、調査対象地区の北東に仮に求めた原点（世界測地系・X=-194200m、Y=6150m、日本測地系・X=-194508.7902m、Y=6449.9851m）から10m×10mのグリッドを設定した（第5図）。グリッドの名前は原点から、X軸は北から南へ向かってAからO、Y軸は西から東へ向かって1から23とし、表記した。

3 遺構名称について

遺構番号は調査区毎・遺構種別毎に検出順に1番から通し番号を付した。遺構の種類を表す略号は、凡例に示したとおりである。記号を設定していない遺構として、石列は漢字表記を行った。



第5図 平成19・21年度 調査区配置図・グリッド設定図

第4章 検出遺構と遺物

第1節 平成19年度調査区

1 調査概要（第6図 図版1-3・4・2-6・7）

平成19年度調査区は、南側駅出入口部（I区）と南側拡幅部（II区）の2つの調査区がある。調査区の規模は、I区は南北約11m、東西約24m、面積206m²、II区は南北1~4.5m、東西約75m、面積211m²である。

I区は、調査区全面においてIV層まで削平を受けており、遺構は検出されなかった。

II区も部分的に削平を受けていた。遺構は、東側よりも西側にまとまって分布している。検出された遺構は、柱跡1条、溝跡2条、性格不明遺構1基、ピット66基である。ピットは、S A 1のほかに柱跡跡として明確に組むものが確認されなかった。規模等を第1表に示した。

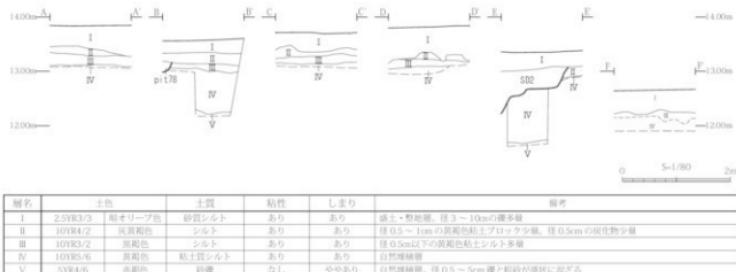
遺物は、II層中から近現代の陶磁器と瓦、SA1とSD1及び数基のピットから土師器と須恵器、瓦の破片が出土している。



第6図 平成19年度調査区全体図

2 基本層序（第7図 図版1-1・2・5・6）

平成19年度調査区の基本層は、大別5層である。I層は現代の盛土・整地層、II層は盛土以前の耕作土層である。I区では、II層の分布は確認されなかった。III層は黒褐色のシルト層で、I区・II区とともに、部分的に確認された。IV層は黄褐色粘土質シルトの自然堆積層で、調査区の全域に分布している。下層の土層確認のために、深掘りを2箇所の地点で行い、その断面観察から、IV層の層厚は西側で70cm、東側で100cmを測る。V層は、深掘り区で確認された赤褐色砂礫層の自然堆積層である。



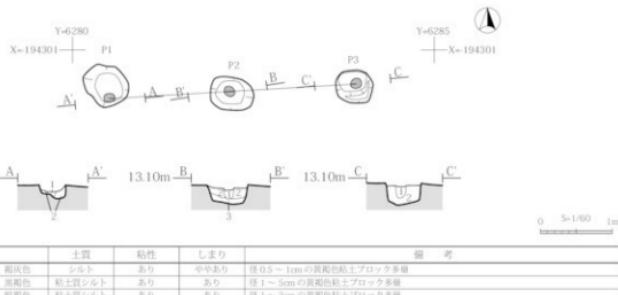
第7図 平成19年度調査区 基本土層

3 検出遺構

(1) SA1柱列跡（第8図 図版1-7・8）

K-14グリッドに位置する3基の柱穴からなる柱列跡である。規模は、P1が長軸62cm、短軸52cm、深さ24cm、P2が長軸60cm、短軸45cm、深さ28cm、P3が長軸52cm、短軸45cm、深さ30cmを測る。各柱間寸法は、柱痕跡間でP1からP2は165cm、P2からP3は175cmを測る。軸方向はN-87°Eである。各柱穴の平面形は梢円形で、柱痕跡は径16cmほどである。堆積土は、P1とP3が2層、P2が3層である。

遺物は、P1から須恵器の甕の胴部片1点と赤焼土器の破片4点、P2から赤焼土器の破片1点が出土している。



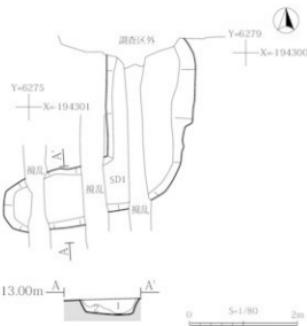
第8図 SA1柱列跡平面図・断面図

第1節 平成19年度調査区

(2) SD1溝跡 (第9図 図版2-1・2)

K-13グリッドに位置する逆L字形の溝跡で、北側は調査区の外側へ延びる。確認された規模は、検出長約4.8mを測り、幅は104cm~164cmで、深さは30cmを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。主軸方向はN-0°で、北側から2.1mの箇所で西方向へ折れ曲がっている。堆積土は2層で、2層の下層部の一部がグライ化している。

遺物は、繩叩きと布目痕がある平瓦片が2点出土している。



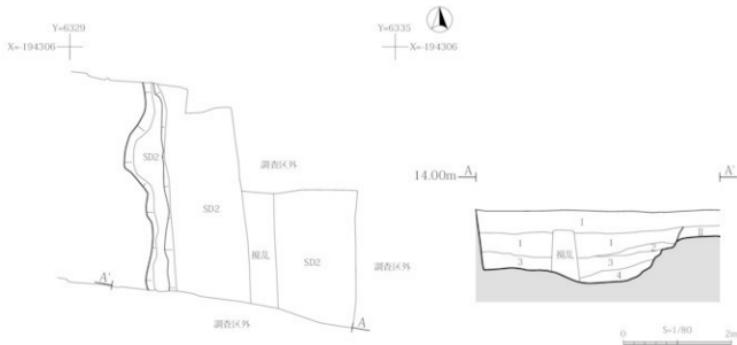
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	H0YR0/4	褐褐色	粘土質シルト	ややあり	0.5~1cmの塊状物と黄褐色粘土ブロック少額
2	H0YR0/3	褐褐色	粘土質シルト	ややあり	0.1~5cmの黄褐色粘土ブロック多額、下層部一部グライ化

第9図 SD1溝跡平面図・断面図

(3) SD2溝跡 (第10図 図版2-3)

K-19・L-19グリッドに位置し、南北及び東側は調査区外へ延びる。確認された規模は、検出長約3.9m、幅3.7m、深さは94cmを測る。底面は若干の起伏があり、壁面は緩やかに立ち上がる。主軸方向は、N-5°-Wである。堆積土は4層を確認した。基本層II層を掘り込んでいることと、現在の高砂壠に隣接し平行していることから、高砂壠に関係する溝跡の可能性がある。

遺物は、1~3層より近現代の陶磁器片と瓦片が出土している。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	I0YR0/4	褐褐色	砂質シルト	なし	0.5~5cmの黄褐色粘土ブロック多額、径0.5cm以下の塊状物微量
2	I0YR0/2	褐褐色	砂質シルト	なし	0.5cm以下の塊状物少額、径0.5~1cmの塊少額
3	I0YR0/9	褐褐色	粘土質シルト	なし	0.5cm~1cm 黄褐色粘土ブロック少額
4	I0YR4/1	褐褐色	粘土質シルト	あり	0.05cm以下の塊状物少額、径0.5~1cmの塊少額

第10図 SD2溝跡平面図・断面図

(4) SX1性格不明遺構 (第11図 図版2-4・5)

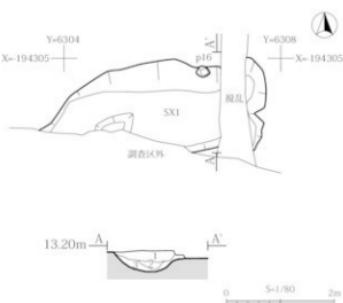
K-16 グリッドに位置し、南側は調査区外に延びる。

規模は、長軸 4.06 m、短軸 1.56 m、深さは 40cm を測る。

平面形は不整橢円形で、底面は若干の起伏があり、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は 3 層を確認した。

断面の観察より、黄褐色土の下に暗褐色土と黒褐色土が入り込んでいることから、風倒木跡の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。



第11図 SX1性格不明遺構平面図・断面図

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	H0YR/6	黄褐色	粘土質シルト	あり	あり 0.5 ~ 1cm の黒褐色シルトブロック層
2	H0YR/4	暗褐色	粘土質シルト	あり	あり 0.5 ~ 3cm の黒褐色シルトと黒褐色砂土のブロックが隙材に入ら
3	H0YR/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	あり 1 ~ 2cm の黄褐色粘土ブロック少層

遺構名	層位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	備考
P 1	1	32	30	16	
P 2	1	24	20	21	
P 3	1	17	12	21	
P 4	1	23	20	14	
P 5	1	23	23	18	
P 6	1	18	16	8	
P 7	1	27	22	14	
P 8	1	27	22	15	
P 9	1	30	25	29	
P 10	1	20	18	7	
P 11	1	20	17	13	
P 12	1	17	16	22	
P 13	1	20	18	14	
P 14	1	22	18	16	
P 15	1	22	20	25	
P 16	1	25	20	12	
P 17	1	42	30	12	
P 18	1	24	20	9	
P 19	1	42	26	24	
P 20	1	35	28	19	
P 21	1	22	20	21	
P 22	1	18	17	8	
P 23	1	21	20	21	
P 24	1	21	20	12	
P 25	1	14	13	8	
P 26	1	22	16	10	
P 27	1	31	30	29	
P 28	1	22	15	8	
P 29	1	30	37	18	
P 30	1	22	15	8	
P 31	1	35	32	20	
P 32	1	31	30	20	
P 33	1	39	37	18	
P 34	1	28	27	19	
P 35	1	20	15	16	
P 36	1	50	23	22	

遺構名	層位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	備考
P 41	1	48	41	21	
P 42	1	29	23	12	
P 43	1	29	(20)	16	
P 45	2	24	24	10	柱洞有
P 46	2	32	32	18	柱洞有
P 47	1	26	22	14	
P 48	1	62	37	15	
P 49	1	23	20	10	
P 50	3	22	22	11	
P 51	3	23	19	14	
P 52	3	25	20	9	
P 53	3	30	25	18	
P 54	1	(46)	(20)	18	
P 55	1	20	(14)	—	
P 56	1	19	16	9	
P 57	1	18	(11)	—	
P 58	1	22	20	13	
P 60	1	28	26	23	
P 61	1	35	25	11	クリヤ化
P 62	1	27	20	11	柱洞有
P 63	1	37	33	21	柱洞有
P 64	1	34	(27)	17	
P 65	1	30	24	21	
P 66	1	74	32	35	
P 68	1	24	24	16	
P 69	1	26	23	18	
P 70	1	30	(25)	17	
P 75	1	19	17	12	
P 76	1	14	15	15	
P 78	1	(56)	49	10	
P 79	1	(38)	36	—	
P 80	1	50	27	5	

第2表 平成19年度ピット集計表

集計表に記載の無いピット番号は、調査及び整理時に、自然の落ち込みと判断し欠番とした

第2節 平成21年度調査区

1 調査概要（第13図 卷頭1-1）

平成21年度調査区は、駅北側出入口部と北側駅前広場部の一部である。調査区の規模は、南北約22～27m、東西約32～40m、面積880m²である。

検出された遺構は、竪穴住居跡（S1）3軒、掘立柱建物跡（S B）1棟、溝跡（S D）6条、土坑（S K）23基、墓跡（SM）29基、性格不明遺構（SX）8基、ピット404基である。ピットのうち25基は、現場の調査とその後の整理作業で、5列の柱列跡（S A）と確認したが、それ以外にも柱列跡となる可能性が考えられる。

2 基本層序（第12図 卷頭1-2）

平成21年度調査区の基本層は、大別4層である。

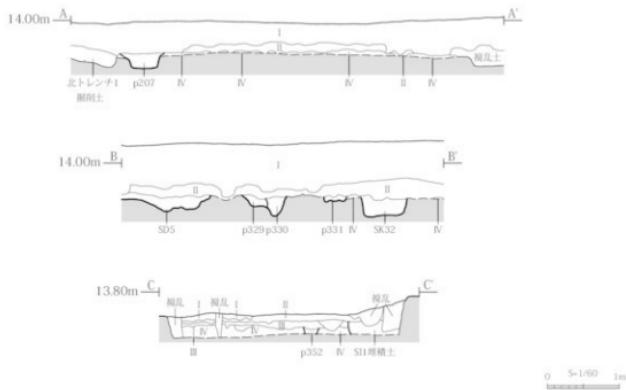
I層は、現代の擾乱土や盛土層である。

II層は、褐色の砂質シルト層で、炭化物と礫を含む盛土以前の耕作層である。

III層は、炭化物と黄褐色粘土を含む暗褐色の粘土質シルト層である。II層とIII層は、調査区のほぼ全面が削平されていたため、部分的に確認された。

IV層は、黄褐色粘土質シルトの自然堆積層である。

調査区のほぼ全面が削平されていたため、多くの遺構はIV層上面で検出したが、一部の遺構はIII層を掘り込んでいることを確認した。



第12図 平成21年度調査区 基本土層

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I	10YR5/2 淡黄褐色	砂質シルト	なし	ややあり	径1cmの炭化物、径0.5～5cmの礫、径0.1cm以下の砂利多量
II	10YR4/4 褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径0.5cm以下の炭化物少微量、径0.5～3cmの礫少量
III	10YR5/2 和褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.5cm以下の炭化物少微量と炭化物少量
IV	10Y10/8 明黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	自然堆積層



第13図 平成21年度調査区全体図

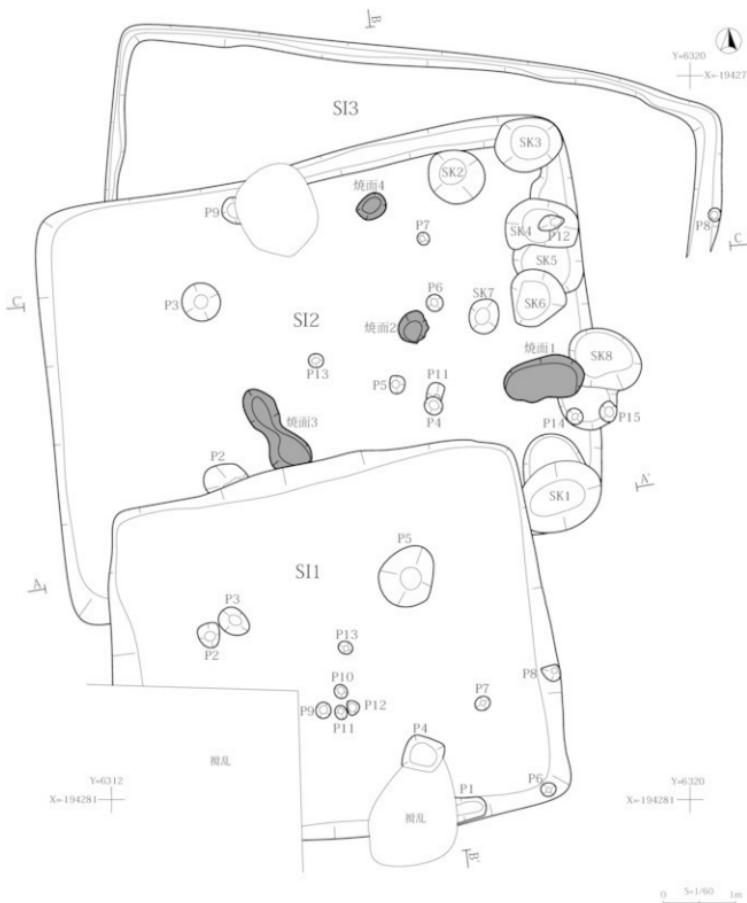
平成18年度調査区の遺構表示については、既刊報告書（仙台市教委2007）中の遺構番号を（ ）内で示した

S A 1周辺のピット番号については第104図を参照

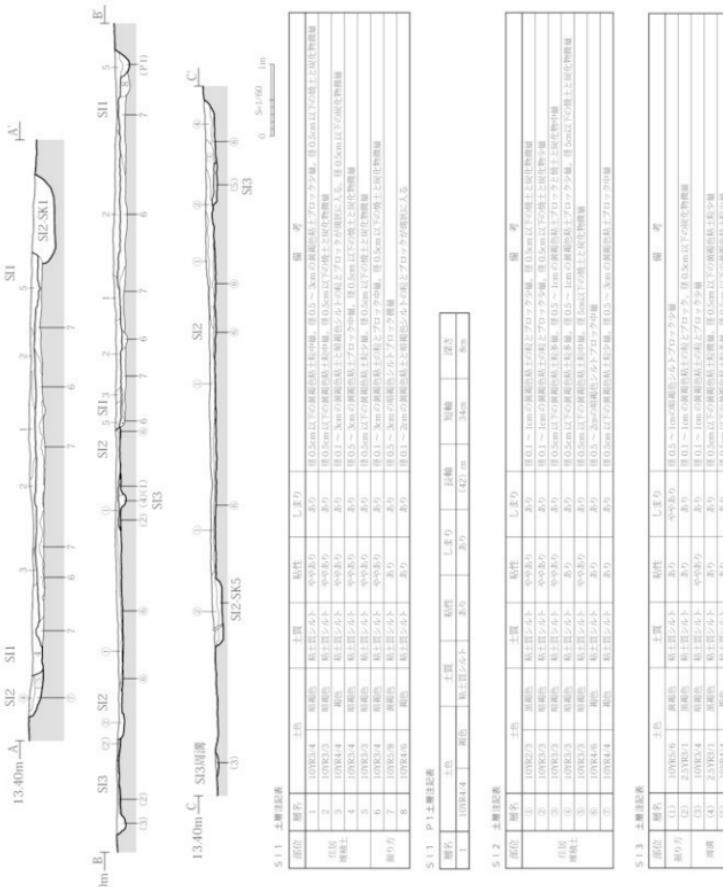
3 検出遺構と出土遺物

(1) 壁穴住居跡 (第14・15図 図版3-1・4-6)

壁穴住居跡は、調査区の南東、H-17・18、I-17 グリッドに位置し、3軒が重複した状態で検出された。いずれの壁穴住居跡も、上面を削平されている。新旧関係は古い方から、SI 3→SI 2→SI 1 の順である。



第14図 SI 1・2・3壁穴住居跡平面図



第15図 S 11・2・3堅穴住居跡断面図

1) S I 1 穫穴住居跡 (第16図 図版3-2・3)

【位置と検出状況】S I 1 は H-17、I-17 グリッドに位置する。基本土層のC断面図より、II層下面から掘り込まれていることが確認されている。南西側を搅乱に削平され、南東側の一部は掘り方まで削平されている。カマド跡や柱穴は検出されていない。新旧関係は、S I 2 と S K 12・13・14・15 より新しい。

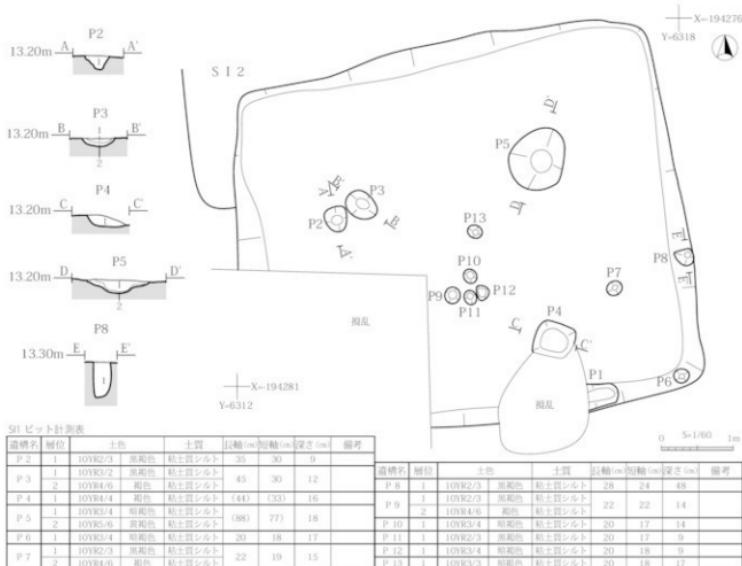
【規模と形態・主軸方向】長軸(東西)約6.1m、短軸(南北)約5.2mで、平面形は隅丸方形である。主軸方向は、長軸を基準とすると N-80°E である。

【堆積土】堆積土は8層を確認した。1～5層は暗褐色土を主体とする住居堆積土で、黄褐色粘土と焼土や炭化物を含む。6～8層は掘り方堆積土で黄褐色粘土を多く含む。

【床面・壁面】住居堆積土の深さは10cm、掘り方の深さは10cmを測る。住居堆積土の底面と掘り方の底面は概ね平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、残存する壁高は12～15cmである。

【床面施設】ピットが13基検出されているが、柱痕跡は確認されていない。

【出土遺物】出土遺物の総数は233点である。遺物の出土は主に1～5層からで、40点が掘り方の堆積土の6層と7層から出土している。内訳は、内面黒色処理されたロクロ土師器の环片が46点で、うち底部片が7点、切り離し技法は全て回転糸切りである。赤焼土器の破片が91点で、うち9点が底部片、7点の切り離し技法は回転糸切りで2点が高台付である。ロクロ甕の破片は11点でうち底部片2点である。その他、小片のため不明なものが67点である。須恵器は甕片が6点、环片が7点である。瓦は平瓦片と丸瓦片が各1点、小片のため不明なものが3点である。いずれも小片のため図化しえなかつた。



第16図 S I 1竪穴住居跡平面図・ピット断面図

第2節 平成21年度調査区

2) S12竪穴住居跡 (第17～21図 図版3-4～4-4・15-1～17-5)

【位置と検出状況】S12はH-17グリッドに位置する。ほぼ全面が削平されており、堆積土はほとんど残っていないかった。新旧関係は、S13より新しく、S11とSK11より古い。

【規模と形態・主軸方向】長軸(東西)約8.2m、短軸(南北)約5.8mで、平面形は隅丸長方形である。主軸方向は、長軸を基準とすると、N-80°Eである。

【堆積土】堆積土は7層を確認した。全て住居堆積土で、1～5層は暗褐色土主体の黄褐色粘土と焼土や炭化物を含む層、6層と7層は黄褐色粘土主体の層である。

【床面・壁面】IV層を床面としている。住居堆積土の深さは5～15cmを測る。東西方向は概ね平坦だが、南北方向は南側から北側へ向かって、約3cm標高が下がる。壁面は緩やかに立ち上がる。残存する壁高は7～10cmで、西側の壁際では、壁高は15～20cmである。

【柱穴】ピットは12基を検出した。柱痕跡は確認されていないが、位置や規模から、P2・P3・P12・P14が柱穴に相当するものと考えられる。柱間寸法は、P2・P3が約225cm、P12・P14が約235cm、P2・P14が約425cm、P3・P12が約445cmである。規模は、P2とP3が径50～60cm、深さはP2が25cm、P3が44cm、P12とP14が径25～40cm、P12がSK5の下から検出されたため深さは28cm、P14はカマドの付属施設と考えられるSK8の下から検出され、深さは36cmである。

【周溝】北東側で検出された。上端幅は32cm～62cmで、深さは15cmを測り、断面形は半円形である。

【床面施設】焼面4基と土坑8基が検出された。

焼面1は竪穴住居跡の東側やや南寄りに位置する。焼面と土坑状の掘り込み(SK8)からなる。焼面1の規模は、長軸(東西)112cm、短軸(南北)62cm、焼土範囲の深さは5cm、その下の掘り方の深さは5cmを測る。平面形は梢円形で、底面は平坦をなす。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形を呈する。

焼面2の規模は、長軸45cm、短軸42cm、焼土範囲の深さは4cmで、その下の掘り方の深さは5cmを測る。焼面3は、長軸133cm、短軸27～54cm、焼土範囲の深さは5cm、その下の掘り方の深さは12cmを測る。焼面4は、長軸41cm、短軸33cm、焼土範囲の深さは5cmを測る。

土坑は竪穴住居跡の東側から8基が検出された。規模は、SK1が長軸135cm、短軸80～125cm、深さは北側が6cmで南側が23cmを測り、3層中からは多量の遺物が出土している。SK2～6は、長軸80～102cm、短軸64～80cm、深さ16～23cmを測り、SK7は長軸48cm、短軸43cm、深さ16cm、SK8は長軸142cm、短軸105cm、深さ16cmを測る。焼面1の北側に位置するSK5・6・7は、下層に多量の炭化物と焼土を含んでいる。

焼面1と土坑8は、残存状況が悪いが、東壁際に位置することからカマド跡の可能性が考えられる。

【出土遺物】総数は725点である。全体的に磨耗がはげしく、接合する土器片は多くなかった。

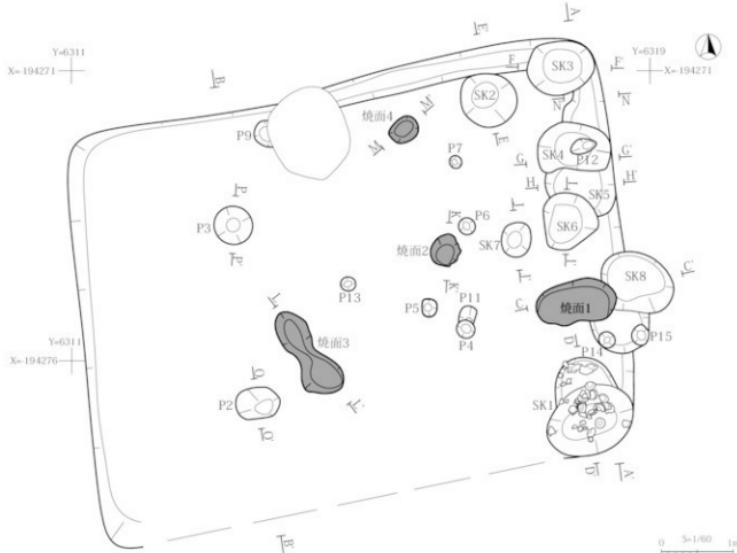
遺物の出土状況は、住居内堆積土中がもっとも多く491点である。内訳は、内面黒色処理されたロクロ土器器の环片が95点で、うち9点が底部片、切り離し技法は全て回転系切りである。赤焼土器の破片は193点で、うち20点が底部片、切り離し技法は全て回転系切りである。ロクロ器の破片は95点で、その他小片のため不明なもののが89点である。須恵器は环片が2点、瓦は平瓦片4点、丸瓦片7点、その他小片のため不明なものが5点である。そのほかに、直径約5cm、121.85gの鉄滓が1点出土している。

SK1の1層から41点、3層から123点の遺物が出土し、3層から出土したロクロ土器器と赤焼土器の多くは重なった状態であった。内訳は、内面黒色処理されたロクロ土器器の环片が37点で、うち19点が底部片、切り離し技法は回転系切りでない7点のうち5点が回転系切りで2点が高台付である。赤焼土器の破片が47点で、うち11点が底部片、切り離し技法は8点が回転系切りで3点が高台付きである。ロクロ器の破片は17点で、その他小片のため不明なものが50点である。須恵器は、壺の底部片が1点である。瓦は平瓦片7点、丸瓦片4点で

ある。そのほかに、直径約10cm、361.15gの鉄滓が1点出土している。

その他の土坑から出土した遺物は70点である。内訳は、内面黒色処理されたロクロ土師器の环片が12点で、うち1点が底部片で切り離しは回転糸切りである。赤焼土器の破片は12点で、うち2点が底部片で切り離しは回転糸切りである。ロクロ蓋の破片は21点で、その他小片のため不明なものが13点である。瓦は平瓦片が4点、丸瓦片が5点、その他小片のため不明なものが2点である。そのほかに、直径約5cm、77.00gの鉄滓が1点出土している。

出土遺物のうち、内面黒色処理されたロクロ土師器杯12点、赤焼土器6点、ロクロ蓋3点、須恵器の壺1点、平瓦片1点、丸瓦片2点を図化掲載した。内面黒色処理されたロクロ土師器（第19図1～9、第20図1～3）は、12点全てが外面ロクロ調整、内面ヘラミガキが施され、底部は手持ちヘラケズリ調整（第19図3）と高台付きの2点（第19図4・5）の3点を除く9点が回転糸切り無調整である。第19図2は、体部外間に墨書きがあるが判読できない。赤焼土器（第20図4～9）は、6点全てが外面ロクロ調整、底部回転糸切り無調整である。須恵器の壺（第21図4）は、低い付け高台である。

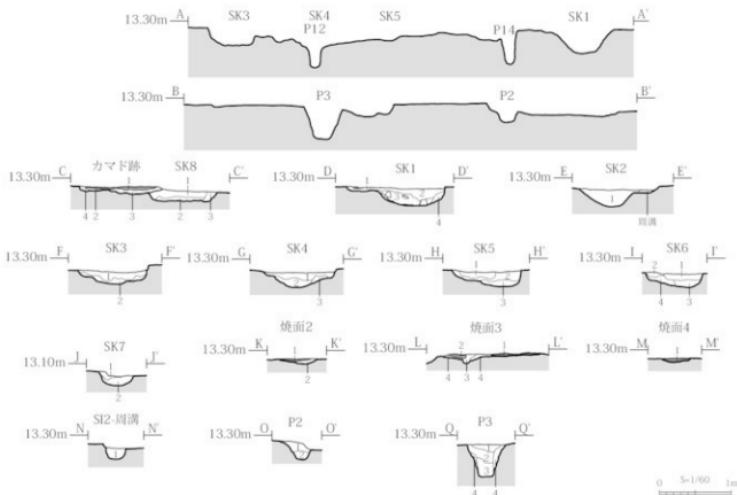


S2 ピット計測表

遺構名	層位	土色	土質	1輪(m)	周輪(m)	深さ(m)	備考
P 9	1 2	10YR3/3 2.5YR5/6	褐褐色 黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	38 (19)	10	
P 11	1	10YR4/4	褐褐色	粘土質シルト	(22)	20	31
P 12	1	10YR3/2	褐褐色	粘土質シルト	34	20	27
P 13	1	10YR2/2	褐褐色	粘土質シルト	21	20	12
P 14	1	10YR2/2	褐褐色	粘土質シルト	24	21	37
P 15	1	10YR2/2	褐褐色	粘土質シルト	25	23	29

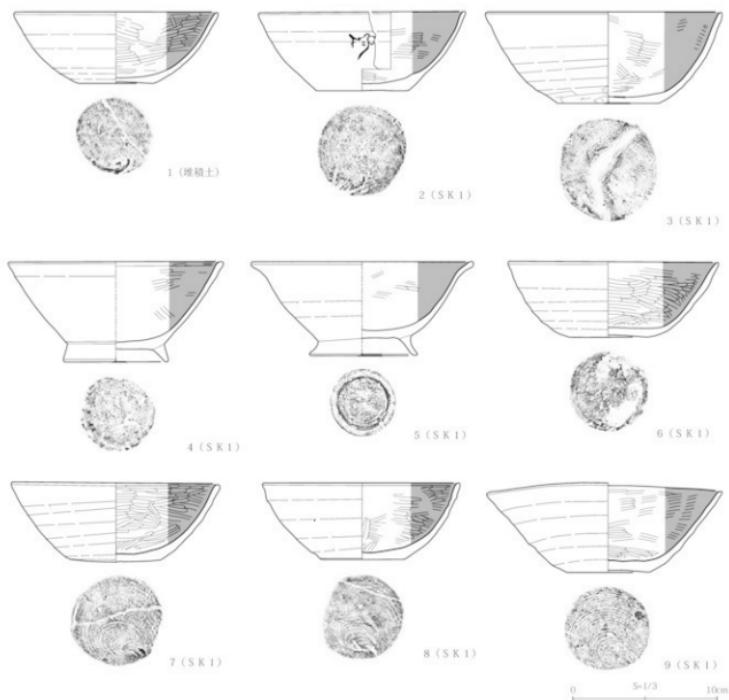
第17図 S1-2 穴住跡平面図

第2節 平成21年度調査区



地塊名	層名	地 考				
		土色	土質	粒性	しまり	備考
地塊1	1 2SYR4-1	赤褐色	砂質シルト	少し	あり	砂土多量。径0.5～1mmの粗粒シルトブロックと径0.5mm以下の細粒物質混雜。
	2 SYRS2/2	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.1～2mmの粘土質シルトと細粒。径0.5mm以下の明赤褐色粘土少量。
	3 7YR4/1	灰褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	径0.5mm以下の明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の粘土と灰褐色物質。
	4 10YR5/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	径0.5mm以下の明赤褐色粘土と少量。
S.K.8	1 10YR5/1	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.3～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 10YR5/3	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.3mm以下の明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	3 10YR4/1	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.5mm以下の明赤褐色粘土と少量。径0.3～1mmの明赤褐色シルト・ブロック少量。
S.K.1	1 10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.5～2mmの灰褐色シルトと少量。径0.5mm以下の粘土と灰褐色シルト。
	2 10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.5～2mmの明赤褐色シルトと少量。径0.5mm以下の粘土。
	3 10YR4/5	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.5～2mmの明赤褐色シルトと少量。径0.5mm以下の粘土。
S.K.2	1 10YR5/7	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.5mm以下の明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 10YR5/8	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.1～2mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
S.K.3	1 10YR6/9	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.3～2mmの明赤褐色シルト・ブロック少量。
	2 10YR6/8	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.3～2mmの明赤褐色シルト・ブロック少量。
S.K.4	1 10YR5/4	暗褐色	粘土質シルト	あり	あり	径0.1～2mmの明赤褐色シルト・ブロック少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	径0.1～1mmの明赤褐色シルト・ブロック少量。径0.5mm以下の細化物質。
	3 10YR5/8	黃褐色	粘土質シルト	あり	あり	径0.1～1mmの明赤褐色シルト・ブロック少量。
S.K.5	1 10YR5/1	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.1～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 10YR5/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.1～3mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の粘土と細化物質。
	3 10YR5/1	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.3～3mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
S.K.6	1 7YR5/1	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.1～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 7YR5/2	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.1～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	3 8YR3/2	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.1～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
S.K.7	1 10YR5/3	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.1～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 10YR5/4	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.1～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	3 10YR5/6	赤褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	径0.5～3mmの赤褐色シルト・砂質シルト・ブロック少量。
	4 10YR5/6	赤褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径0.3～3mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
地塊2	1 10YR4/6	赤褐色	砂質シルト	なし	あり	砂土多量。径0.3～3mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
	2 10YR4/6	赤褐色	粘土質シルト	なし	あり	砂土多量。径0.3～3mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
	3 10YR4/6	赤褐色	砂質シルト	なし	あり	砂土多量。径0.3～3mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
地塊3	1 7YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	砂土多量。径0.3～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 7YR2/6	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	砂土多量。径0.3～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	3 10YR5/6	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	砂土多量。径0.3～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	4 10YR6/6	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	砂土多量。径0.3～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
地塊4	1 10YR6/6	明赤褐色	砂質シルト	ややあり	あり	砂土多量。径0.3～1mmの明赤褐色粘土と少量。径0.5mm以下の細化物質。
	2 10YR5/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂土多量。径0.1から0.5mmの黄褐色粘土・シルト・ブロック少量。
周溝	1 10YR5/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂土多量。径0.1～1mmの黄褐色粘土・シルト・ブロック少量。
	2 10YR4/4	赤褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂土多量。径0.1～1mmの黄褐色粘土・シルト・ブロック少量。
P.2	1 10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂土多量。径0.1～1mmの黄褐色粘土・シルト・ブロック少量。
	2 10YR4/4	赤褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂土多量。径0.1～1mmの黄褐色粘土・シルト・ブロック少量。
P.3	1 10YR5/3	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	砂土多量。径0.1～1mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
	2 10YR5/4	明赤褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	砂土多量。径0.1～1mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
	3 10YR5/3	明赤褐色	粘土質シルト	あり	あり	砂土多量。径0.1～1mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。
	4 10YR4/4	赤褐色	粘土質シルト	あり	あり	砂土多量。径0.1～1mmの明赤褐色粘土・シルト・ブロック少量。

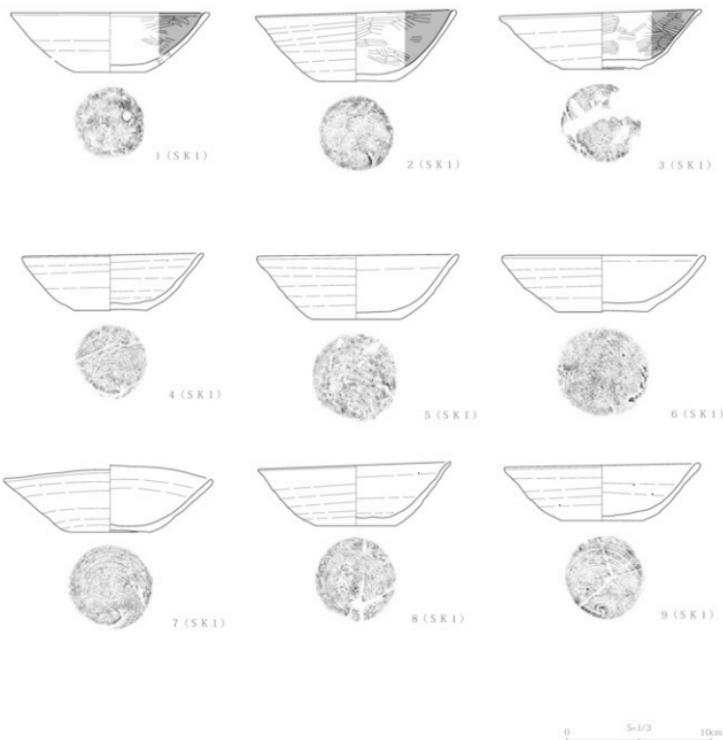
第18図 S1-2豊穴住居跡換出構造断面図



回収番号	写真図版番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	直径 (cm)		外面調整	内面調整	備考	登録番号	
						口径	底径					
1	15-1	堆積土	下層	土師器	坪	(14.2)	5.0 ~ 5.4	ロクロ調整、底面回転糸切り	ハラミガキ	内面黒色処理	D-012	
2	15-2	SK I	3層	土師器	坪	14.3	6.4	5.5	ロクロ調整、底面回転糸切り	ハラミガキ	内面黒色処理 体面外側削面	D-004
3	15-3	SK I	3層	土師器	坪	16.1	7.0	6.3	ロクロ調整、一部底下端と底面手引ハラタツリ	ハラミガキ	内面黒色処理	D-009
4	15-4	SK I	3層	土師器	高台付坪	(15.0)	7.0	7.0	ロクロ調整、底付高台	ハラミガキ	内面黒色処理 付高台	D-008
5	15-5	SK I	3層	土師器	高台付坪	(15.4)	7.6	6.5	口縁~全体ロクロ調整 底面回転糸切り+底付高台	ハラミガキ	内面黒色処理 付高台	D-002
6	15-6	SK I	3層	土師器	坪	14.6	5.5	5.3	ロクロ調整、底面回転糸切り	ハラミガキ	内面黒色処理	D-005
7	15-7	SK I	3層	土師器	坪	14.4	6.2	5.5	口縁~全体ロクロ調整 底面回転糸切り	ハラミガキ	内面黒色処理	D-003
8	15-8	SK I	3層	土師器	坪	13.7	5.7	5.3	口縁~全体ロクロ調整 底面回転糸切り	ハラミガキ	内面黒色処理	D-001
9	15-9	SK I	3層	土師器	坪	16.3	5.8	6.2	ロクロ調整、底面回転糸切り	ハラミガキ	内面黒色処理	D-006

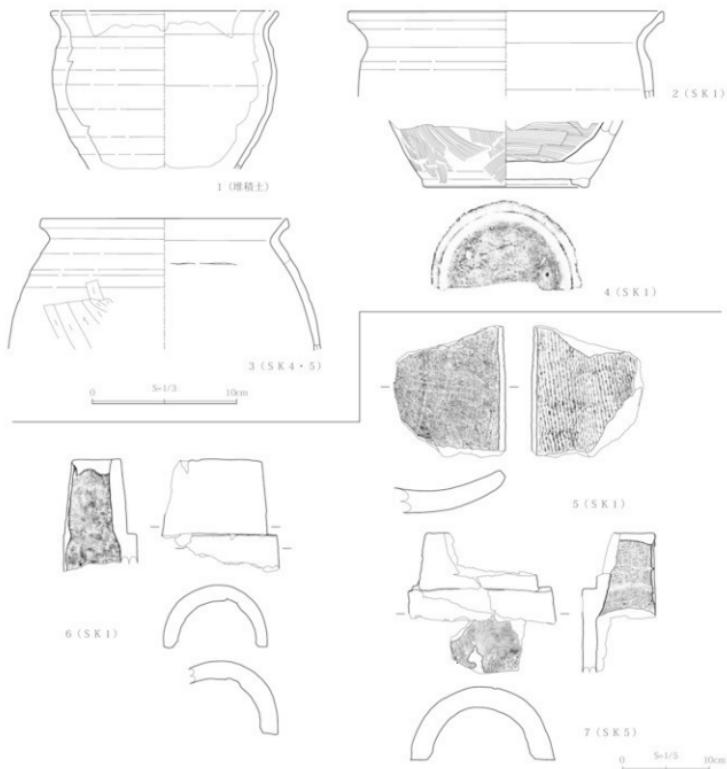
第19図 S1 2竪穴住居跡出土遺物（1）

第2節 平成21年度調査区



図版 番号	写真図版 番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	法量 [cm]			外面調整	内面調整	備考	登録 番号
						口径	底径	高さ				
1	15-10	S K 1	3層	土器類	坪	13.7	5.0	4.1	ロクロ調整、底部回転系切り	ハラミガキ	内面黒色処理	D-007
2	16-1	S K 1	3層	土器類	坪	13.9	5.2	5.0	ロクロ調整、底部回転系切り	ハラミガキ	内面黒色処理	D-010
3	16-2	S K 1	3層	土器類	坪	14.0	5.5	4.1	ロクロ調整、底部回転系切り	ハラミガキ	内面黒色処理、外面部熱	D-011
4	16-3	S K 1	1層	赤絞土器	坪	12.6	5.0	4.0	ロクロ調整、底部回転系切り	ロクロ調整	内面部熱	D-014
5	16-4	S K 1	3層	赤絞土器	坪	13.8	6.0	4.5	ロクロ調整、底部回転系切り	ロクロ調整	内面部熱	D-018
6	16-5	S K 1	3層	赤絞土器	坪	14.1	6.4	3.9	ロクロ調整、底部回転系切り	ロクロ調整	内外部熱、外面部口縁～底部及び内面部底脚付着	D-022
7	16-6	S K 1	3層	赤絞土器	坪	13.4～ 14.4	5.6	4.6	ロクロ調整、底部回転系切り	ロクロ調整		D-021
8	16-7	S K 1	3層	赤絞土器	坪	13.3	5.5	4.4	ロクロ調整、底部回転系切り	ロクロ調整		D-019
9	16-8	S K 1	3層	赤絞土器	坪	13.6	5.6	4.0	ロクロ調整、底部回転系切り	ロクロ調整		D-023

第20図 S-12住居跡出土遺物(2)



回収番号	写真図版番号	出土遺構	出土層位	種類	器種	法量 [cm]			外面調整	内面調整	備考	登録番号
						U1様	底径	高さ				
1	16-9	埋植土	下層	土師器	壺	(15.6)	—	(11.0)	口縁部～側面口クロ調整	口縁部～側面口クロ調整		D-027
2	16-10	S12	1層	土師器	壺	(21.9)	—	(6.0)	クロ調整	クロ調整		D-015
3	17-1	S12 + 5	3層	土師器	壺	14.0	5.5	4.1	クロ調整、側面ヘラケズリ	ヘラスガキ		D-024
4	17-2	S12	3層	陶器器	壺	—	(11.4)	(4.6)	クロ調整～底下端ナデ 底部ヘラケズリーナデ	底下端～底ヘラナデ	内外面白輪、付高台	E-002

回収番号	写真図版番号	出土遺構	出土層位	種類	法量 [cm]			凸面調整	凹面調整	備考	登録番号
					長さ	幅	厚さ				
5	17-3	S12	3層	平瓦	(15.2)	(12.8)	2.7	裏面彫印き	布目	側面ヘラケズリ	G-001
6	17-4	S12	3層	丸瓦	(13.0)	(10.5)	2.3	スリケシ	粘土結晶、布目	側面ヘラケズリ	F-001
7	17-5	S12	3層	丸瓦	(16.2)	(17.0)	2.6	裏面彫印き～一部スリケシ	粘土結晶、布目	側面ヘラケズリ	F-002

第21図 S12住居跡出土遺物(3)

第2節 平成21年度調査区

3) S13竪穴住居跡 (第22図 図版4-5・17-6)

【位置と検出状況】S13はS12よりも古く、ほぼ全面が床下まで削平されている。そのため、住居跡の範囲は、残存していた周溝で確認した。カマド跡や明確な柱穴は検出されていない。

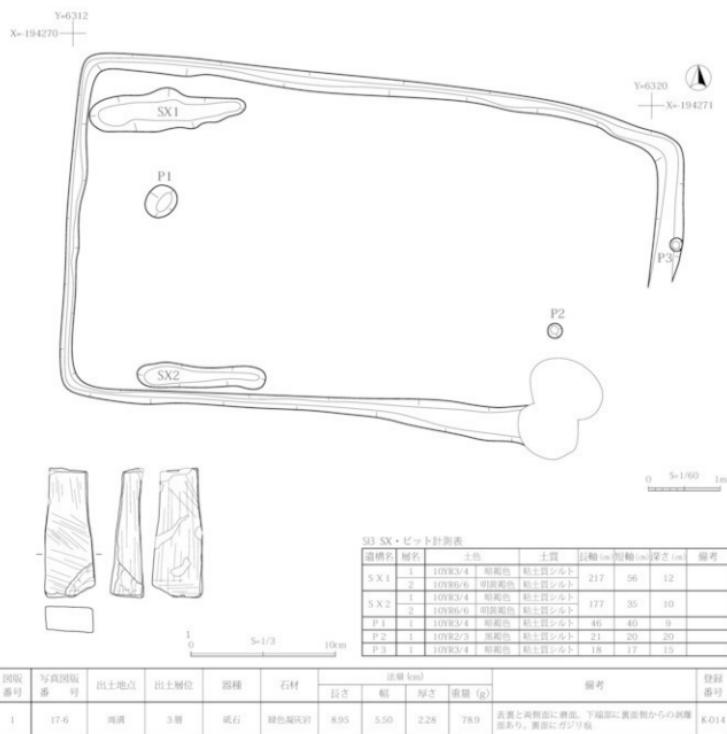
【規模と形態・主軸方向】軸(東西)約8.5m、短軸(南北)約4.7m、平面形は長方形を呈する。主軸方向は、長軸を基準とするとN-82°Wである。

【堆積土】堆積土は5層を確認した。1層と2層は掘り方堆積土、3~5層は周溝堆積土である。

【床面・壁面】床面および壁面は確認されていない。

【床面施設】細長い落ち込み(SX)が2基とピットが3基検出されている。2基のSXは、それぞれ周溝の西側の南北に位置している。平面形は不整形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。

【出土遺物】遺物は、周溝堆積土から砥石1点と、ロクロ土師器の坏片1点が出土している。



第22図 S13竪穴住居跡平面図・出土遺物

(2) SB 1 据立柱建物跡 (第23・24図 図版4-7・8)

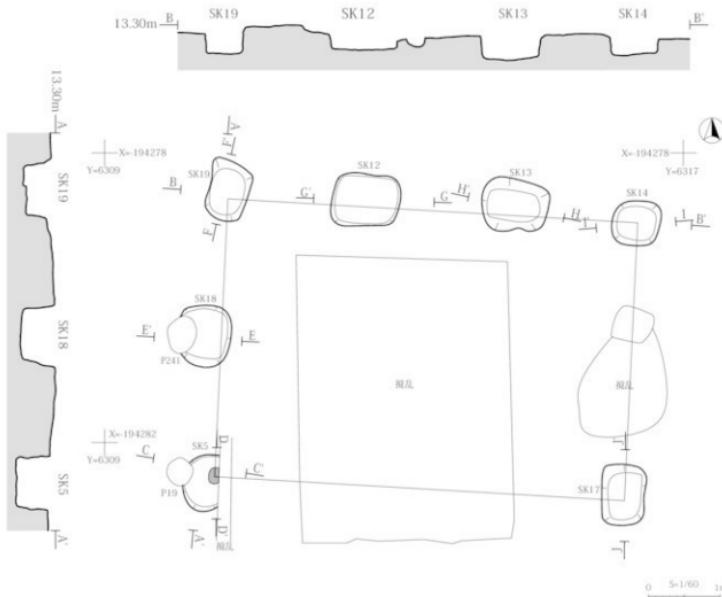
H-17・I-17 グリッドに位置する。壊乱で一部の柱穴が削平されているとみられ、東西3間、南北2間の東西棟と考えられる。SK 12・13・14はSI 1の貼り方の下から検出されたためSI 1より古く、SK 5はP 19より古く、SK 18はP 241より古い。

桁行総長5.7m、梁行総長4.0mを測る。柱間寸法は、桁行の北側柱穴列が西から2.0m(6尺6寸)、2.0m(6尺6寸)、1.7m(5尺6寸)、梁行の西側柱穴列がいずれも2.0m(6尺6寸)である。桁行を基準とした軸方位はN85°Wである。

各柱穴の平面形は隅丸方形もしくは梢円形で、断面形状は逆台形である。規模は、長軸65～95cm、短軸60～75cmである。IV層上面で検出されたSK 5・SK 18・SK 19・SK 17は、深さ45～50cmを測る。SI 1上面を削平されていたSK 12・SK 13・SK 14は、深さ20～35cmを測る。

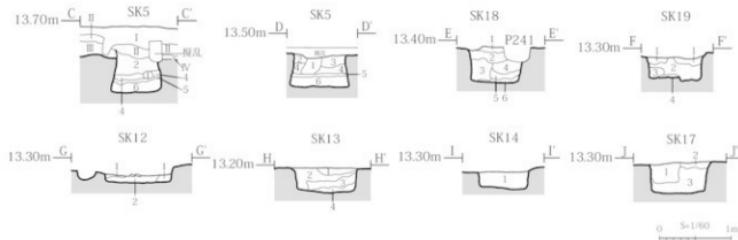
堆積土は、いずれも明黄褐色粘土を多く含む粘土質シルトと、暗褐色シルトと明黄褐色粘土が斑状に入る粘土質シルトである。柱痕跡は、SK 5のみで確認され、径は16cmである。

遺物は、SK 12の2層から繩叩きと布目痕のある平瓦が1点、SK 13から内面黒色処理された土器師の坏片と須恵器の坏片、小片のため不明なものが各1点、SK 17から土器師の壞片1点と須恵器の坏片が2点出土しており、1点は底部の切り離し技法が回転ヘラ切りである。



第23図 SB 1 据立柱建物跡平面図・断面図

第2節 平成21年度調査区



備 考					
遺構名	層名	土色	土質	粒性	しまり
S K 5	1	JOYR3/1 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	2	JOYR3/4 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	3	JOYR3/5 黒褐色	砂質シルト	あり	自0.3～3cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	4	JOYR3/6 黒褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	5	JOYR3/7 黑褐色	砂質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	6	JOYR3/8 黑褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
S K 18	1	JOYR2/3 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	2	JOYR2/4 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	3	JOYR2/5 黒褐色	砂質シルト	あり	自0.3～3cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	4	JOYR2/6 明黄褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	5	JOYR2/7 黒褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	6	JOYR2/8 黒褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
S K 19	1	JOYR2/3 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	2	JOYR2/4 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	3	JOYR2/5 黒褐色	砂質シルト	あり	自0.3～3cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	4	JOYR2/6 明黄褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	5	JOYR2/7 黒褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
	6	JOYR2/8 黒褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数に入る
S K 17	1	JOYR2/3 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	2	JOYR2/4 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
	3	JOYR2/5 黑褐色	砂質シルト	あり	自0.3～3cmの明黄褐色粘土のブロックが複数入る
	4	JOYR2/6 明黄褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数入る
	5	JOYR2/7 黒褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数入る
	6	JOYR2/8 黒褐色	粘土質シルト	あり	自0.3～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数入る

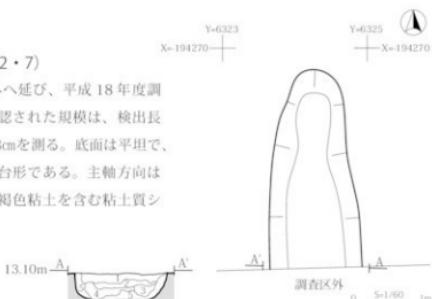
第24図 SB1掘立柱建物跡 土坑断面図

(3) 溝跡

1) SD1溝跡 (第25図 図版5-1・2・7)

H-18グリッドに位置する。南側は調査区外へ延び、平成18年度調査区のSD3に繋がるものと考えられる。確認された規模は、検出長275cmを測り、幅は70～130cmで、深さは38cmを測る。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは直立に近く、断面形は逆台形である。主軸方向はN0°である。堆積土は5層で、いずれも明黄褐色粘土を含む粘土質シルトからなる。

遺物は出土していない。



備 考					
層名	土色	土質	粒性	しまり	
1	JOYR3/3 黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	自0.3～3cmの明黄褐色粘土のブロックが複数
2	JOYR3/4 黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	自0.3～3cmの明黄褐色粘土のブロックが複数
3	JOYR3/5 黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	自0.3～10cmの明黄褐色粘土のブロックが複数
4	JOYR3/6 黒褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	自0.1～1cmの明黄褐色粘土のブロックが複数
5	JOYR3/6 明黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	自0.3cm以下の明黄褐色粘土のブロックが複数

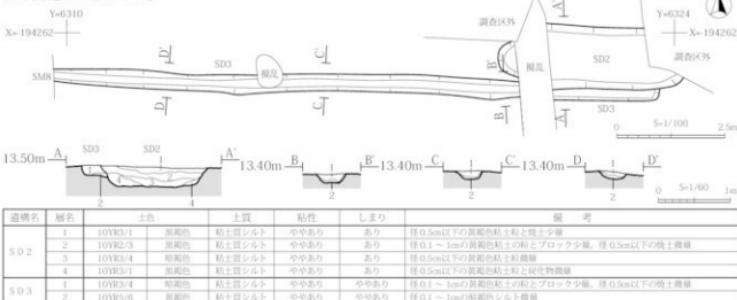
第25図 SD1溝跡平面図・断面図

2) SD 2・3溝跡 (第26図 図版5-3・4・7)

G-17・18 グリッド位置する。

SD 2の東側は調査区外へ延び、SD 3より新しい。確認された規模は、検出長約3.5m、幅は1.2～1.5mで、深さは27cmを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。主軸方向はN-88°-Wである。堆積土は4層で、黄褐色粘土と焼土を含む粘土質シルトである。遺物は、土師器の环片8点、土師器の甕片10点、赤焼土器片2点、その他小片のため不明なもの32点、須恵器の环片1点、縄叩きと布目痕のある平瓦片2点と丸瓦片4点、小片のため不明な瓦2点が出土しているが、いずれも小片のため図化しえなかった。

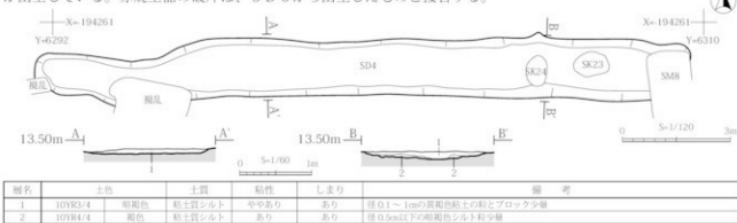
SD 3は、SD 2とSM 8よりも古い。確認された規模は、検出長約13.6m、幅は28～45cmで、深さは12cmを測る。底面は平坦で壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。主軸方向はN-88°-Wである。堆積土は2層である。遺物は、ロクロ土師器の环片1点と小片のため不明な土師器2点が出土しているが、いずれも小片のため図化しえなかった。



第26図 SD 2・3溝跡平面図・断面図

3) SD 4溝跡 (第27図 図版5-5・7)

G-15・16 グリッドに位置する。SK 23・24より新しく、SM 8より古い。確認された規模は、検出長約18m、上端幅は1.1～1.8mで、深さは10cmを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。主軸方向はN-90°である。堆積土は2層である。遺物は、土師器の甕片1点と小片のため不明な土師器2点、赤燒土器の破片1点、須恵器の环片1点、縄叩きと布目痕のある平瓦片3点と丸瓦片4点、小片のため不明な瓦3点が出土している。赤燒土器の破片は、SD 5から出土したものと接合する。



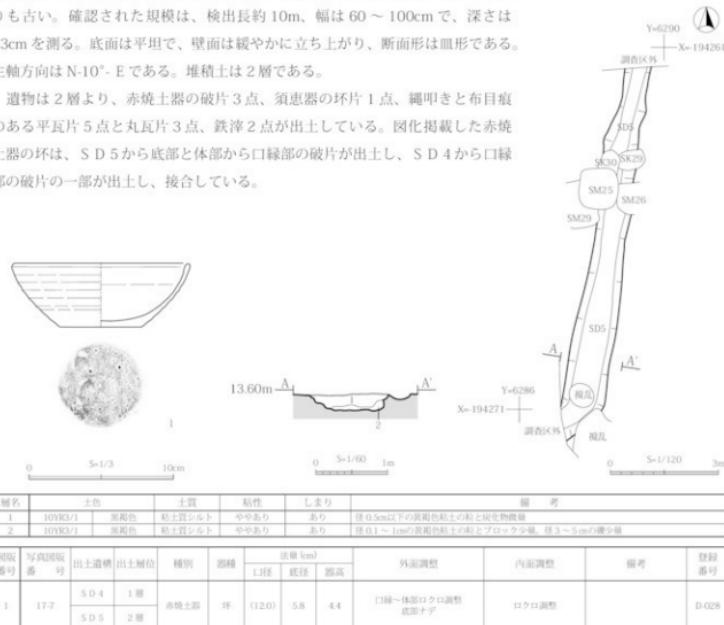
第27図 SD 4溝跡平面図・断面図

第2節 平成21年度調査区

4) SD 5溝跡 (第28図 図版5-6・7・17-7)

G-14・H-14 グリッドに位置する。南北方向の溝跡で、南端が西へ折れ曲がり調査区外へ延び、北側も調査区外へ延びる。S K 29・30とS M 25・26・29よりも古い。確認された規模は、検出長約10m、幅は60～100cmで、深さは23cmを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。主軸方向はN-10°-Eである。堆積土は2層である。

遺物は2層より、赤焼土器の破片3点、須恵器の环片1点、繩叩きと布目痕のある平瓦片5点と丸瓦片3点、鉄滓2点が出土している。図化掲載した赤焼土器の环は、SD 5から底部と体部から口縁部の破片が出土し、SD 4から口縁部の破片の一部が出土し、接合している。

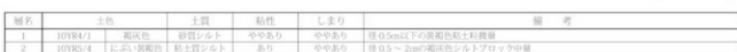


第28図 SD 5溝跡平面図・断面図・出土遺物

5) SD 6溝跡 (第29図)

H-14・15 グリッドに位置し、東西ともに擾乱によって削平されている。確認された規模は、検出長2.10cm、幅は37～68cmで、深さは10cmを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。主軸方向は、N-88°-Wである。堆積土は2層である。

遺物は出土していない。



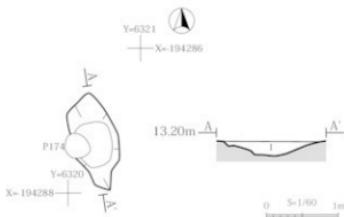
第29図 SD 6溝跡平面図・断面図

(4) 土坑

1) SK 1土坑（第30図）

I-18 グリッドに位置し、P 174より古い。規模は、長軸148cm、短軸62cm、深さ21cmを測る。平面形は不整形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は1層である。

遺物は出土していない。



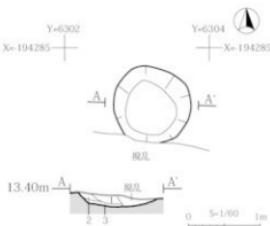
番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	SYR2/1	黒褐色	砂質シルト	あり	伴1～3cmの黄褐色粘土ブロック少層

第30図 SK 1土坑平面図・断面図

2) SK 2土坑（第31図）

I-16 グリッドに位置し、南側を擾乱に削平されている。規模は、長軸106cm、短軸104cm、深さ18cmを測る。平面形は円形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は3層である。

遺物は出土していない。



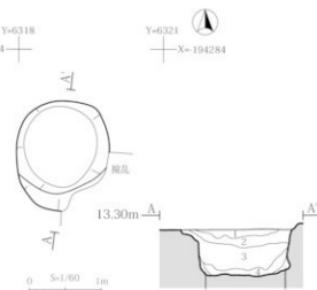
番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	SYR3/2	暗赤褐色	砂質シルト	あり	伴0.5cm以下の黄褐色粘土ブロック
2	ZSYR3/1	暗赤褐色	砂質シルト	あり	伴1～2cmの黄褐色粘土ブロック少層
3	ZSYR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	伴1～3cmの黄褐色粘土ブロック多層

第31図 SK 2土坑平面図・断面図

3) SK 3土坑（第32図）

I-17・18 グリッドに位置し、南東側を擾乱に削平されている。規模は、長軸152cm、短軸128cm、深さ64cmを測る。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁面の立ち上がりは直立に近く、断面形は長方形である。堆積土は6層である。

遺物は土師器の痕跡が1点出土している。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	なし	伴3cmの黄褐色粘土ブロック多層
2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	ややあり	伴3～5cmの黄褐色粘土ブロック多層
3	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	あり	伴0.5～5cmの黄褐色粘土と褐色粘土シルトのブロックが隙間に入る
4	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	ややあり	伴1～3cmの黄褐色粘土ブロック少層
5	10YR5/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	伴1～2cmの黄褐色粘土ブロック少層
6	10YR5/6	黒褐色	粘土質シルト	あり	伴1～3cmの黄褐色粘土ブロック少層

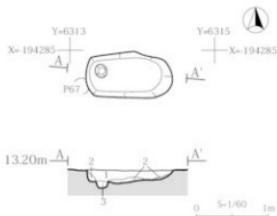
第32図 SK 3土坑平面図・断面図

第2節 平成21年度調査区

4) SK 4土坑（第33図）

I-17 グリッド位置し、P 67より新しい。規模は、長軸118cm、短軸63cm、深さ18cmを測る。底面の西側にピット状の落ち込みがあり、その規模は長軸18cm、短軸16cm、深さ10cmを測る。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁面は東側は緩やかに立ち上がり、西側の立ち上がりは直立に近い。断面形は皿形である。堆積土は3層である。

遺物は出土していない。

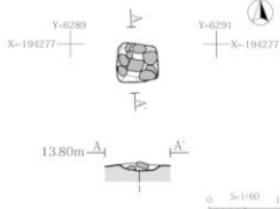


第33図 SK 4土坑平面図・断面図

5) SK 6土坑（第34図）

H-14・15 グリッドに位置する。規模は、長軸56cm、短軸54cm、深さ10cmを測る。平面形は方形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は1層で、径10～20cmの円窯や扁平窯9個を含む。

遺物は出土していない。



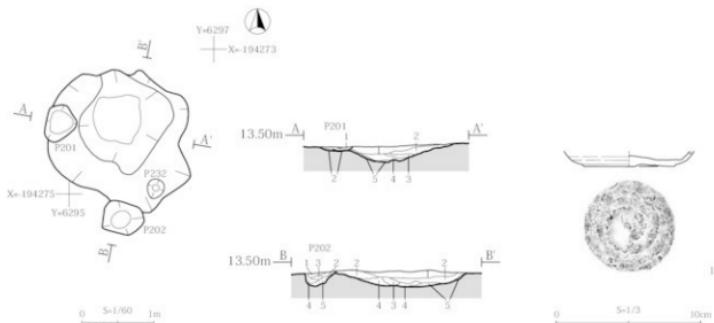
第34図 SK 6土坑平面図・断面図

6) SK 7土坑（第35図 図版6-1・2・17-8・9）

H-15 グリッドに位置し、上面の10～15cmほどを擾乱によって削平されている。P 201・202より古く、底面から検出されたP 232より新しい。規模は、長軸215cm、短軸167cm、深さ23cmを測る。平面形は不整形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は5層で、いずれの層も黄褐色粘土と焼土、炭化物を含む。

出土遺物の総数は58点である。土師器は摩滅が著しく、底部の切り離し技法やロクロの使用は不明なものが多い。土師器は片片が9点、うち3点が底部片、ロクロ裏の破片1点、表片18点、赤焼土器と考えられるもの1点、小片のため不明なもの9点である。須恵器は片片が4点、うち2点が底部片、切り離し技法は回転ヘラ切りである。ほかに須恵器の表片が10点と蓋の破片3点が出土している。瓦は繩叩きと布目痕のある平瓦片が3点、丸瓦片が1点である。

P 201とP 202は、どちらも堆積土に焼土塊を含んでいる。規模は、P 201が長軸54cm、短軸43cm、深さ6cm、P 202が長軸57cm、短軸43cm、深さ19cmを測る。P 201の平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。P 202の平面形も楕円形で、底面は平坦である。壁面の立ち上がりは直立に近く、断面形はすり鉢形である。



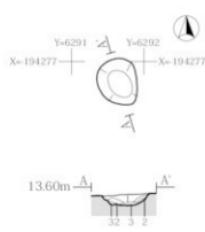
遺構名	層名	土色	土質	粒性	しまり	備考
SK 7	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	目0.3mm以下の黄褐色粘土粘土層
	2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	ややあり	目0.5mm以下の黄褐色粘土粘土層
	3	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	ややあり	目0.5mm～1mmの黄褐色粘土粘土ブロック、炭化物少額
	4	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	ややあり	目0.5mm～1mmの黄褐色粘土粘土層、目0.3～1mmの黄褐色粘土ブロック中層
	5	10YR3/2	灰褐色	粘土質シルト	なし	目0.3～1mmの黄褐色粘土粘土ブロック層
P 201	1	10YR5/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	目0.3～1mmの黒褐色粘土粘土層
	2	10YR5/2b	明る黒褐色	粘土質シルト	なし	目0.3～2mmの黒褐色粘土粘土ブロック少額
P 202	1	7.5YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	目0.3～3mmの暗褐色粘土層
	2	SYR3/8	赤褐色	砂質シルト	なし	目0.3～3mmの赤褐色粘土層
	3	SYR3/6	赤褐色	砂質シルト	ややあり	目0.3～1mmの赤褐色粘土ブロック少額
	4	10YR5/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	目0.3～2mmの黒褐色粘土ブロック少額
	5	10YR6/8	明る黒褐色	粘土質シルト	ややあり	目0.3～2mmの明る黒褐色粘土ブロック少額

第35図 SK 7土坑平面図・断面図・出土遺物

7) SK 8土坑（第36図）

H-15 グリッドに位置する。規模は、長軸68cm、短軸60cm、深さ15cmを測る。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は3層ある。

遺物は出土していない。



層名	土色	土質	粒性	しまり	備考
1	10YR5/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	目0.5mm以下の黒褐色粘土粘土層
2	10YR6/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	目0.3～1mmの黒褐色粘土粘土ブロック少額
3	10YR6/6	黒褐色	粘土質シルト	あり	目0.3～1mmの黒褐色粘土粘土ブロック少額

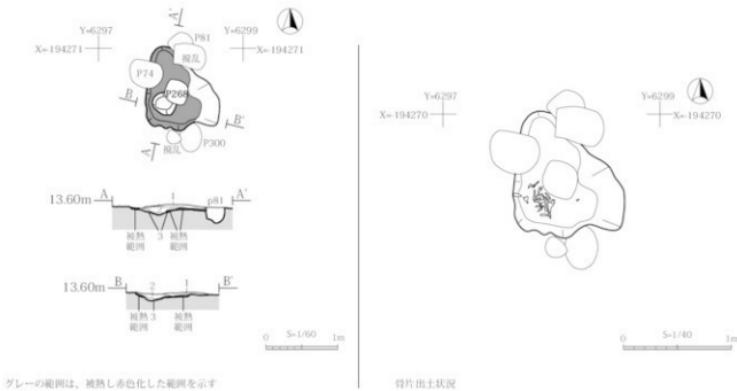
第36図 SK 8土坑平面図・断面図

第2節 平成21年度調査区

8) SK 10土坑（第37図 図版6-3～6）

H-15 グリッドに位置する。P 300より新しく、P 74・P 81・P 268より古い。規模は、長軸 152cm、短軸 98cm、深さ 14cm を測る。平面形は不整形で、底面はやや起伏がある。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は3層である。1層と2層は骨片と焼土、炭化物を含む砂質シルト、3層は暗褐色砂質シルトと焼土、炭化物を含む粘土質シルト、1～3層の下には厚さ 0.5～3cm ほどの被熱により赤色化した範囲がある。

遺物は、多量の被熱した微細な骨片が1箇所にまとまって出土しているが、骨片以外の遺物は出土していない。骨については、頬周りの骨や歯、背骨が見当たらないことから、人骨とは断定出来ないが、周辺に江戸時代の墓跡があることから関連性を考慮し、これらの骨片が人骨と仮定した場合、比較的残存状況の良いものは、成人ぐらいたる頭骨の一部と腕の骨の尺骨の一部、大腿骨と骨盤付近の骨の一部の可能性があるとされた。



グレーの範囲は、被熱し赤色化した範囲を示す

骨片出土状況

番号	土色	土質	粘性	しまり	備考	
					0.1～1cm	1～5cm
1 7.0WR3/4	暗褐色	砂質シルト	なし	あり	径 0.1～1cm の骨片少額。径 0.3～5cm の骨片多額。径 0.3～2cm 炭化物少額	
2 10YR5/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 0.1～3cm の骨片多額。径 0.3～2cm 炭化物中額。径 0.5cm 以下の骨少額	
3 10YR5/6	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径 0.5cm 以下の骨と粘土質シルトと焼土。炭化物微量	
焼熱範囲	5YR4/8	赤褐色	粘土質シルト	あり	被熱し赤色化した焼土	

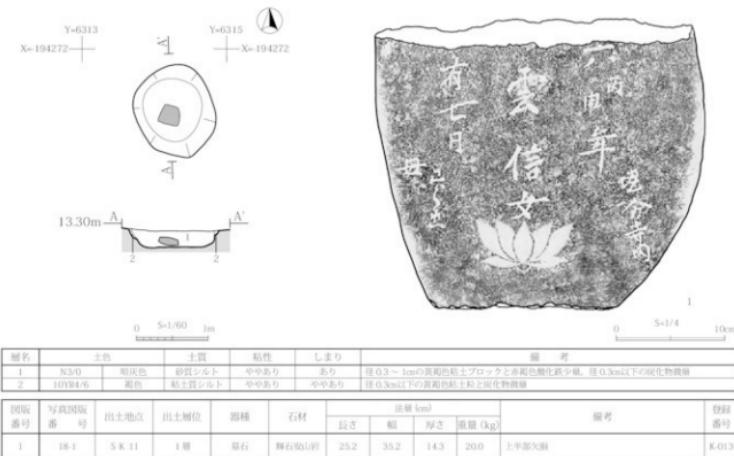
第37図 SK 10 土坑平面図・断面図・骨片出土状況

9) SK 11土坑（第38図 図版6-7・18-1）

H-17 グリッドに位置し、S 12より新しい。規模は、長軸 126cm、短軸 107cm、深さ 22cm を測る。平面形は梢円形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形である。堆積土は2層である。

遺物は、上半部を欠損した墓石が出土している。下端部は打ち欠いた後に荒く敲いて平坦気味に仕上げている。この墓石には、中央に「[] 雲信女」と7弁の「蓮華」が彫られ、右側には、「[] 六丙申年」、「国分寺内」、左側には、「[] 有七日」、「母」、判読不明な文字が彫られている。

江戸時代の「丙申」年は、1656年（明暦2年）、1716年（正徳6年〔享保元年〕）、1776年（安永5年）1836年（天保7年）の4回あることから、この墓石の年号は、下一ケタが6年となる『正徳6年（1716年）〔享保元年〕』と考えられる。



第38図 SK 11 土坑平面図・断面図・出土遺物

10) SK 15 土坑 (第39図)

H-17・I-17 グリッドに位置し、S I Iより古い。規模は、長軸90cm、短軸51cm、深さ17cmを測る。平面形は梢円形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は3層である。

遺物は、ロクロ土器師の环片が1点出土している。



第39図 SK 15 土坑平面図・断面図

11) SK 16 土坑 (第40図)

I-17 グリッドに位置する。規模は、長軸77cm、短軸47cm、深さ10cmを測る。平面形は梢円形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は1層である。

遺物は出土していない。



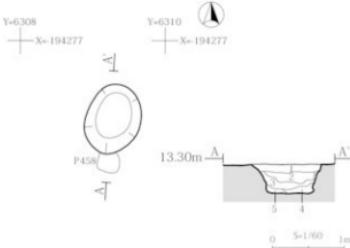
第40図 SK 16 土坑平面図・断面図

第2節 平成21年度調査区

12) SK 21土坑（第41図）

H-16グリッドに位置し、P 458より新しい。規模は、長軸98cm、短軸75cm、深さ39cmを測る。平面形は橢円形で、底面は平坦である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。堆積土は5層で、いずれも明黄褐色粘土を含み、1～3層は炭化物も含む。

遺物は、3層からロクロ土師器の环片が6点、近世のすり鉢片1点が出土している。



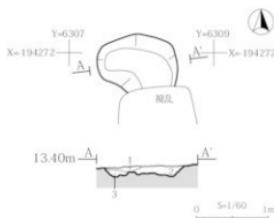
層名	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	10YR8/2	粘土質シルト	ややあり	無	0.1～1cmの黄褐色粘土と砂利とブロック少種
2	10YR8/2	粘土質シルト	ややあり	あり	0.1～1cmの黄褐色粘土と砂利とブロック多種、0.5cm以下T字形物頗
3	10YR8/2	粘土質シルト	ややあり	あり	0.1～3cmの黄褐色粘土と砂利とブロック少種、0.5cm以下T字形物頗
4	10YR8/2	粘土質シルト	あり	あり	0.1～2cmの黄褐色粘土と黒褐色シルトの組とブロックが塊状に入る
5	10YR4/4	黒褐色	粘土質シルト	あり	0.1～1cmの黄褐色粘土と砂利とブロック少種

第41図 SK 21土坑平面図・断面図

13) SK 22土坑（第42図）

H-16グリッドに位置し、南側を壘溝に削平されている。規模は、長軸110cm、短軸75cm、深さ14cmを測る。平面形は不整形で、底面はやや起伏がある。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は3層である。

遺物は出土していない。



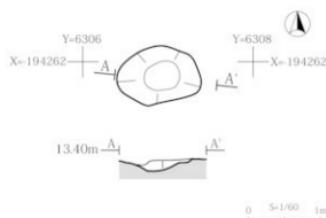
層名	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	0.5cm以下の明黄褐色粘土と少種
2	10YR3/3	明黄褐色	粘土質シルト	ややあり	0.5cm以下の明黄褐色粘土と多種、0.5～1cmの明黄褐色シルトブロック少種
3	10YR5/6	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	0.5～2cmの明黄褐色シルトブロック少種

第42図 SK 22土坑平面図・断面図

14) SK 23土坑（第43図）

G-16グリッドに位置する。S D 4の底面で検出したため、S D 4より古い。規模は、長軸99cm、短軸72cm、深さ15cmを測る。平面形は橢円形で、底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は1層である。

遺物は、ロクロ土師器の环片が2点出土している。



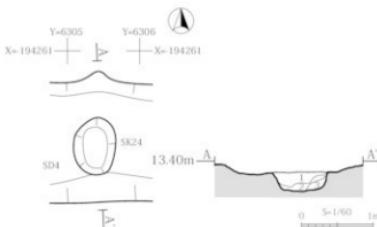
層名	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	10YR3/3	明黄褐色	粘土質シルト	ややあり	0.1～1cmの明黄褐色粘土とブロック少種

第43図 SK土坑平面図・断面図

15) SK 24 土坑 (第44図)

G-16 グリッドに位置する。S D 4 の底面で検出しため、S D 4 より古い。規模は、長軸 79cm、短軸 58cm、深さ 27cm を測る。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。堆積土は3層である。

遺物は、縄印きと布目痕のある平瓦片と丸瓦片が各1点出土している。

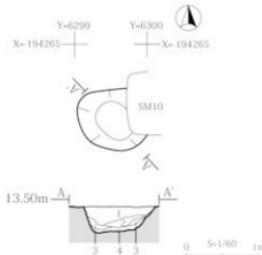


第44図 SK 24 土坑平面図・断面図

16) SK 25 土坑 (第45図 図版6-8)

G-15 グリッドに位置し、S M 10 より古い。規模は、長軸 104cm、短軸 84cm、深さ 34cm を測る。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁面の立ち上がりはやや直角に近く、断面形は逆台形である。堆積土は4層である。

遺物は、3層と4層から赤焼土器の破片 7点と甕の破片が2点、須恵器の环片 1点と甕の破片 1点、布目痕のある丸瓦片 3点が出土している。

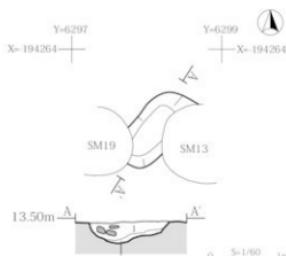


第45図 SK 25 土坑平面図・断面図

17) SK 26 土坑 (第46図)

G-15 グリッドに位置し、S M 13 と S M 19 より古い。規模は、長軸 116cm、短軸 56cm、深さ 30cm を測る。平面形は楕円形で、底面はやや起伏がある。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は2層で、1層は北側に径 5 ~ 15cm の礫を多く含む。

遺物は、1層から赤焼土器の破片 1点と甕の破片が2点、縄印きと布目痕のある平瓦片と丸瓦片が各1点が出土している。



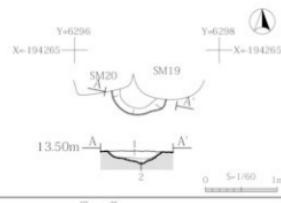
第46図 SK 26 土坑平面図・断面図

第2節 平成21年度調査区

18) SK 27土坑 (第47図)

G-15グリッドに位置し、SM 19とSM 20より古い。規模は、長軸75cm、短軸50cm、深さ17cmを測る。平面形は不明である。底面はやや起伏があり、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は2層である。

遺物は出土していない。

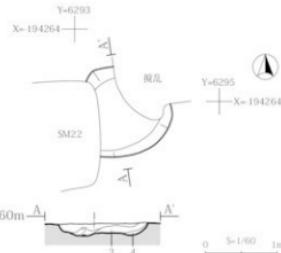


第47図 SK 27土坑平面図・断面図

19) SK 28土坑 (第48図)

G-15グリッドに位置し、撫亂に北東側を削平され、SM 22より古い。規模は、長軸108cm、短軸100cm、深さ15cmを測る。平面形は梢円形で、底面はやや起伏がある。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は4層で、1層と3層は焼土を含む。

遺物は出土していない。



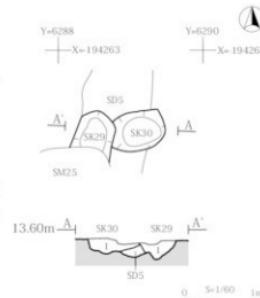
第48図 SK 28土坑平面図・断面図

20) SK 29・30土坑 (第49図)

G-14グリッドに位置する。

SK 29は、SD 5とSK 30より新しく、SM 25より古い。規模は、長軸56cm、短軸52cm、深さ26cmを測る。平面形は梢円形で、底面はやや起伏がある。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形はすり鉢状である。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

SK 30は、SD 5より新しく、SK 29より古い。規模は、長軸72cm、短軸54cm、深さ21cmを測る。平面形は梢円形で、底面は平坦である。壁面の立ち上がりは、東側は直角に近く西側は緩やかである。断面形は皿形である。堆積土は1層である。遺物は出土していない。



第49図 SK 29・30土坑平面図・断面図

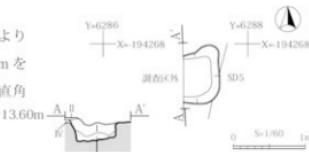
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	0.1～1mの黄褐色土上に0.2mとブロック少額。0.5m以下に堆積。
2 10YR4/6	褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	0.3～5mの黄褐色土と黒褐色粘土の2層が現れに入る。

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 10YR4/6	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	0.1～1mの黄褐色土上に0.2mとブロック少額。
2 10YR4/6	褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	0.3～5mの黄褐色土と黒褐色粘土の2層が現れに入る。
3 10YR4/4	褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	0.3～1mの黄褐色土と黒褐色粘土の2層が現れに入る。
5 10YR4/1	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	0.1～1mの黄褐色土上に0.2mとブロック少額。

21) SK 32 土坑 (第50図)

G-14 グリッドに位置する。西側は調査区外へ広がり、SD 5より新しい。確認された規模は、長軸 78cm、短軸 50cm、深さ 32cm を測る。平面形は不明で、底面は平坦である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。堆積土は 2 層である。

遺物は、鉄釘が 4 点出土している。



第50図 SK 32 土坑平面図・断面図

(5) 墓跡 (図版13-7)

墓跡は、G-14・15・16、H-16 グリッドの南北約 10m、東西約 23m の範囲から 29 基を検出した。

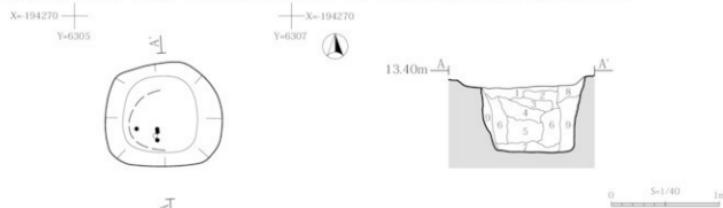
以下の平面図においては、遺物の出土地点は、銭貨や煙管などの金属製品と木製品、石製品などの人工遺物を『●』で、人骨や歯などを『○』で示した。木棺の底板を検出した墓跡はその範囲を図示した。また、木棺の底板の範囲と考えられる痕跡を確認した墓跡については、その範囲を破線で示した。

1) SM 1 墓跡 (第51・52図 図版7-1・18-2)

H-16 グリッドに位置する。規模は、上端が 108 × 96cm、掘り方の底面が 70 × 60cm、深さ 60cm を測る。平面形は不整圓丸形、掘り方の底面は圓丸形である。木棺の底板片がわずかに残存しており、木棺の形態は円形と推定される。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

堆積土は 9 層を確認した。1 ~ 7 層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、8・9 層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は 7 層から、煙管の雁首と吸口の破片が各 1 点、銭貨 3 点、鉄釘 2 点、赤漆片 1 点、歯 4 点が出土している。煙管の雁首は、羅字結合部より見て継目が上にあり、火皿に穴が開いている。3 点出土している銭貨は寛永通宝で、古寛永 2 点、新寛永（文銭）1 点である。歯は、左下の第一大臼歯 1 点と大臼歯の破片 3 点である。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	0.1 ~ 2mの黄褐色土の和とブロック少額
2	明褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	0.3 ~ 3mの黄褐色土と褐褐色シルトのブロックが塊状に入る
3	褐色	粘土質シルト	なし	なし	0.1 ~ 1mの褐褐色シルトと黄褐色土の和とブロックが塊状に入る
4	褐色	粘土質シルト	ややあり	なし	0.1 ~ 2mの褐褐色シルトと黄褐色土の和とブロックが塊状に入る
5	7.5W2/2	褐色	粘土質シルト	ややあり	0.1 ~ 2mの褐褐色シルトと黄褐色土の和とブロックが塊状に入る
6	10W5/6	褐色	粘土質シルト	ややあり	0.1 ~ 3mの黄褐色土と褐褐色シルトの和とブロックが塊状に入る
7	7.5W3/1	褐色	シルト	なし	0.1 ~ 2mの黄褐色土と褐褐色シルトの和とブロックが塊状に入る
8	2.5W6/6	褐色	粘土質シルト	ややあり	0.3 ~ 2mの褐褐色シルトとブロック少額
9	2.5W6/6	明褐色	粘土質シルト	ややあり	0.3 ~ 1mの褐褐色シルトブロック難解

第51図 SM 1 墓跡平面図・断面図

第2節 平成21年度調査区



第52図 SM1墓跡出土遺物

2) SM2墓跡 (第53・54図 図版7-2・3・18-3～5)

G-16, H-16 グリッドに位置する。規模は、上端が $103 \times 100\text{cm}$ 、掘り方の底面が 72cm四方 、深さ 104cm を測る。木棺の底板が残存しており、木棺の底板の形態は $45 \times 35\text{cm}$ の方形である。平面形は上端・掘り方の底面とともに隅丸方形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は円筒形である。

堆積土は8層を確認した。1～6層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、7・8層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は6層の底板の上から、大堀相馬産の陶器の碗片1点、石製の数珠玉1点、煙管の雁首部分にあたる火皿と脇反しの破片が各1点、吸口1点と吸口の破片1点、部位不明の破片1点、銭貨20点、歯10点が出土している。また8層から、径 12cm の礫が1点出土している。数珠玉の石材は水晶である。煙管の吸口は表面の腐食が進んでおり、1点が完形でもう1点は小口部分を欠損している。銭貨は寛永通宝で、古寛永が5点、新寛永(文錢)が4点、新寛永9点、サビのため判別不能なもの2点である。歯は、右上の第一小白歯と第二大白歯、第三大白歯、右下の犬歯と第二大白歯、左上の犬歯と大臼歯、中切歯もしくは側切歯、左下の第一か第二大白歯と第三大白歯である。



層名	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	径 $0.1 \sim 1\text{m}$ の赤褐色シルトと黄色粘土の和とブロックが混在に入る。径 $3 \sim 10\text{m}$ の礫多層
2	明褐色	粘土質シルト	ややあり	なし	径 $0.1 \sim 1\text{m}$ の明褐色シルトの和とブロック微層
3	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	なし	径 $0.1 \sim 2\text{m}$ の黄褐色と明褐色シルトの和とブロックが混在に入る。径 $3 \sim 7\text{m}$ の礫少層
4	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	なし	径 $0.1 \sim 1\text{m}$ の黄褐色と明褐色シルトの和とブロックが混在に入る
5	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	なし	径 $0.3 \sim 1\text{m}$ の黄褐色土ブロック中層
6	灰褐色	シルト	なし	なし	
7	褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径 $0.5 \sim 2\text{m}$ の赤褐色シルトブロック少層
8	2.5TT/8	褐色	粘土質シルト	ややあり	半砂利分 周 $0.3 \sim 1\text{m}$ の赤褐色シルトブロック少層

第53図 SM2墓跡平面図・断面図

図版番号	写真図版番号	層位	種別	部位	法量(cm)					備考	登録番号
					全長	幅(口径)	小口径	LH付替	重さ(g)		
1	18-3	6層	環貫	喉口	0.60	1.70	1.12	0.40	(6.32)	木質残存	N-008
2	18-4	6層	環貫	喉口	0.60	0.20	1.08	—	(3.63)	小円頭丸形 木質残存	N-010

図版番号	写真図版番号	層位	種別	部位	法量(cm)					備考	登録番号					
					外径	穿径	高さ(g)	登録番号								
3	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.41	0.51	2.99	N-016	13	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.33	0.55	3.20	N-013
4	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.40	0.51	2.82	N-017	14	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.22	0.65	1.86	N-014
5	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.45	0.50	3.29	N-018	15	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.40	0.60	2.60	N-020
6	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.29	0.62	2.05	N-019	16	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.34	0.60	2.56	N-021
7	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.41	0.49	2.81	N-026	17	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.22	0.63	1.70	N-022
8	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.54	0.55	3.47	N-015	18	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.32	0.49	2.83	N-023
9	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.51	0.55	3.08	N-027	19	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.20	0.61	1.67	N-024
10	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.51	0.55	3.61	N-028	20	—	6層 寛永通宝(新)	1697年	2.21	0.61	1.51	N-025
11	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.51	0.60	3.38	N-029	21	—	6層 寛永通宝(新)	—	2.31	0.64	1.49	N-011
12	—	6層	寛永通宝(新)	1697年	(2.22)	0.62	(1.69)	N-012	—	—	6層 寛永通宝(新)	—	2.44	0.52	3.46	N-009

図版番号	写真図版番号	層位	種別	部位	法量(cm)					備考	登録番号
					高さ	幅	長さ	重さ(g)			
22	18-5	6層	數珠玉	水晶	0.92	1.17	1.16	2.14	K-001		

第54図 SM2墓跡出土遺物

3) SM3墓跡 (第55・56図 卷頭1-3・2-3・図版7-4～6・18-6～19-4)

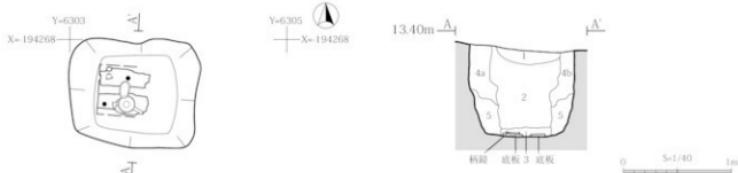
G-16 グリッドに位置する。規模は、上端が 120 × 100cm、掘り方の底面が 76 × 72cm、深さ 84cm を測る。木棺の底板が残存しており、木棺の底板の形態は 47 × 38cm の方形である。平面形は上端が不整圓丸形で、掘り方の底面は圓丸形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は円筒形である。

堆積土は 5 層を確認した。1～3 層は木棺の腐食後に動いて堆積した上で、4～5 層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

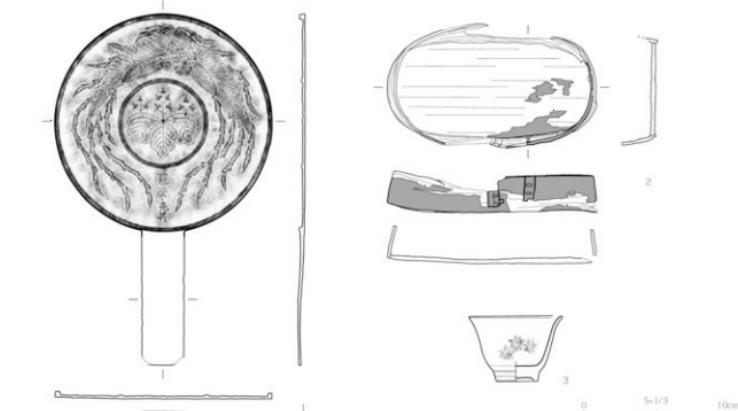
遺物は、2 層から土師器の小片 1 点と産地不明の磁器の碗片 1 点、3 層の木棺の底板の上から、曲げ物 1 点、肥前

第2節 平成21年度調査区

産染付小壺1点、銭貨3点、木片1点、柄鏡1点、木製の櫛3点と鼈甲製の櫛1点が出土している。柄鏡の下から、羽根と櫛4点が出土した。柄鏡は、背面外周に鳳凰文、内区に三五桐文が描かれ、「藤原光長」の銘がある。曲げ物は一部破損しているが、側面に難目を2箇所確認でき、側面と表面の一部に塗布された漆が残存している。木製の櫛3点は、歯の部分の大半が抜けている。木製の櫛のうち1点は、表面に塗布された漆が残存している。鼈甲製の櫛は、木製のものよりも小さい。銭貨は寛永通宝で、全て古寛永である。

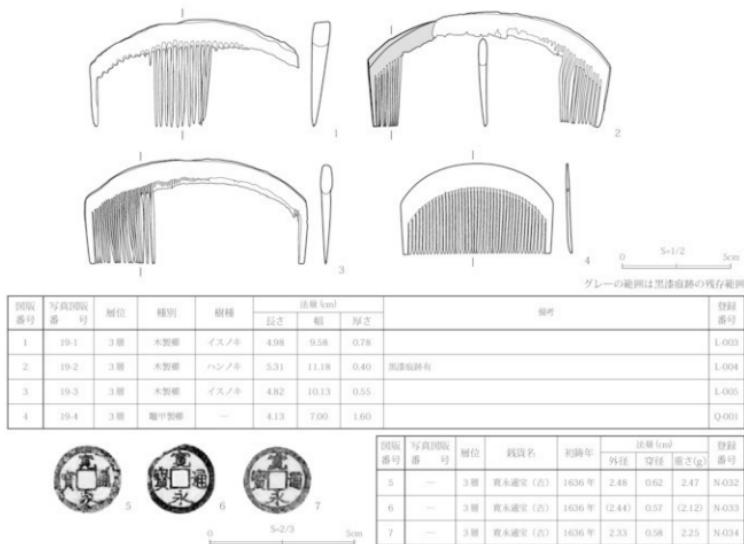


編名	備考			
	土色	土質	粘性	しまり
1 10Y85/1	黒褐色	粘土質シルト	やや柔らか	あり
2 10Y86/9	明褐色	粘土質シルト	やや柔らか	あり
3 10Y83/1	黒褐色	シルト	なし	
4-a 10Y7/6	明褐色	粘土質シルト	あり	0.5~2cmの黄色粘土と暗褐色シルトの和とブロックが複数に入る
4-b 10Y88/6	黒褐色	粘土質シルト	あり	0.5~5cmの黄色粘土と暗褐色シルトの和とブロックが複数に入る
5 10Y88/6	黒褐色	粘土質シルト	あり	0.1~3cmの明褐色シルトの和とブロック少數



図版 番号	写真図版 番号	層位	種別	法量(cm)				備考	登録 番号				
				長さ	幅	高さ	厚さ						
1	苔斑2-3	3層	柄鏡	24.3	15.0	9.30	2.95	背面の外周に鳳凰、内区に三五桐文。「藤原光長」銘	N-031				
2	18-6	3層	山形物	針葉樹	(8.60)	14.38	2.60	0.40	表面部分に漆残存、側面に2箇所の難目有り	L-002			
3	18-7	3層	鼈甲	小形	完形	梗	6.45	2.90	4.63	肥厚	17.7cm	染付もみじ文(コニニガク印凹)、高台筋付麁、輪付圓脚	J-002

第55図 SM3墓跡平面図・断面図・出土遺物（1）



第56図 SM3墓跡出土遺物（2）

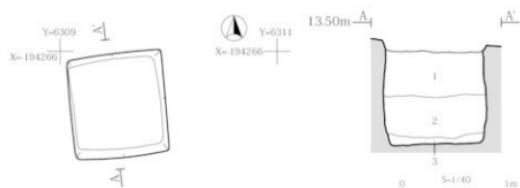
4) SM4墓跡（第57・58図 図版7-7）

G-16グリッドに位置する。規模は、上端が96×88cm、掘り方の底面が82×80cm、深さ96cmを測る。平面形は上端・掘り方の底面ともに方形である。木棺の底板片がわずかに残存しており、木棺の形態は方形と推定される。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は3層で、掘り方の埋め戻し土は確認できていない。1～3層は、木棺の腐食後に動いて堆積した土と考えられる。

遺物は、2層から土師器片

2点、3層から銭貨6点と径8cmの礪1点が出土している。銭貨は寛永通宝で、新寛永4点とサビのため判別不能なもの2点である。



剖面	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR6/6	明褐色	粘土質シルト	中やあり	中や柔らか 径0.1～3cmの細褐色シルトの粒とブロック少根
2	10Y4/2	灰褐色	粘土質シルト	なし	径0.1～3cmの細褐色シルト、径0.3～1cmの細褐色シルトと黄色粘土のブロック少根
3	10Y4/6	褐色	砂質シルト	中や柔らか なし	径0.3～1cmの黄褐色粘土の粒とブロック少根

第57図 SM4墓跡平面図・断面図



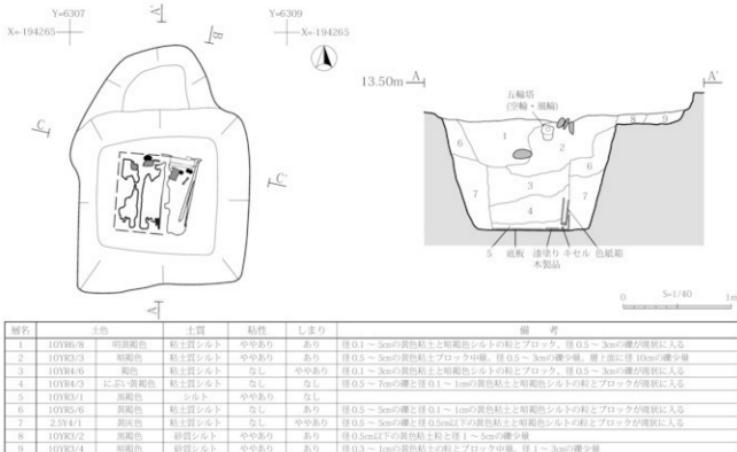
第58図 SM4墓跡出土遺物

5) SM5墓跡 (第59～62図 卷頭1-4・2-1・4～6・図版7-8～8-4・19-5～20-3)

G-16グリッドに位置する。平面形は、上端が北側に小段を持つ不整圓丸方形、掘り方の底面は隅丸方形である。規模は、上端が165cm四方、小段部が120×58cm、掘り方の底面が112×108cm、深さ102cmを測る。木棺の底板と、北側と東側の側板が残存しており、木棺の底板の形態は70cm四方の正方形、側板の高さは14cmである。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

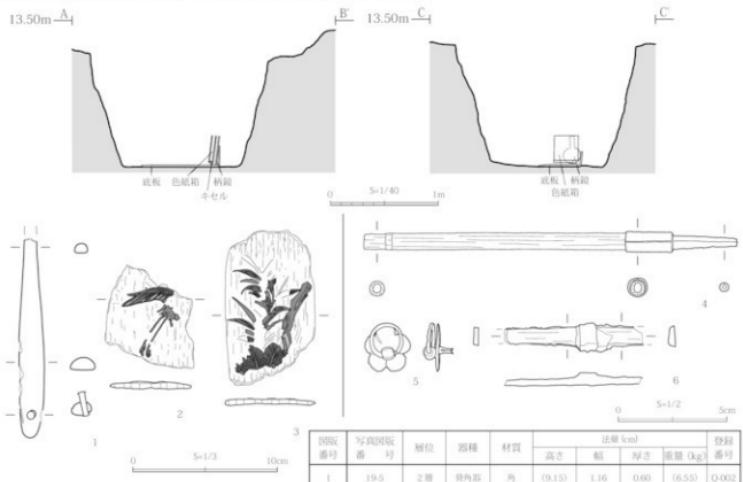
堆積土は9層を確認した。1～5層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、6・7層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土、8・9層は小段部の堆積土と考えられる。

遺物は、2層から五輪塔の空輪・風輪1点と骨器1点、径13cmの礎1点、瀬戸内美濃産の磁器の碗と小杯片2点が出土している。北東側の側板には、柄鏡と漆塗りの色紙箱が立て掛けられた状態で出土している。色紙箱の下からは煙管の吸口と羅字が1点と羽根が出土している。底板の上からは、五鉢杵1点、漆塗り木片3点、木製の数珠玉1点、銭貨が10点、金具と金属片各1点、鉄釘4点、骨片1点、歯2点、木片7点が出土している。

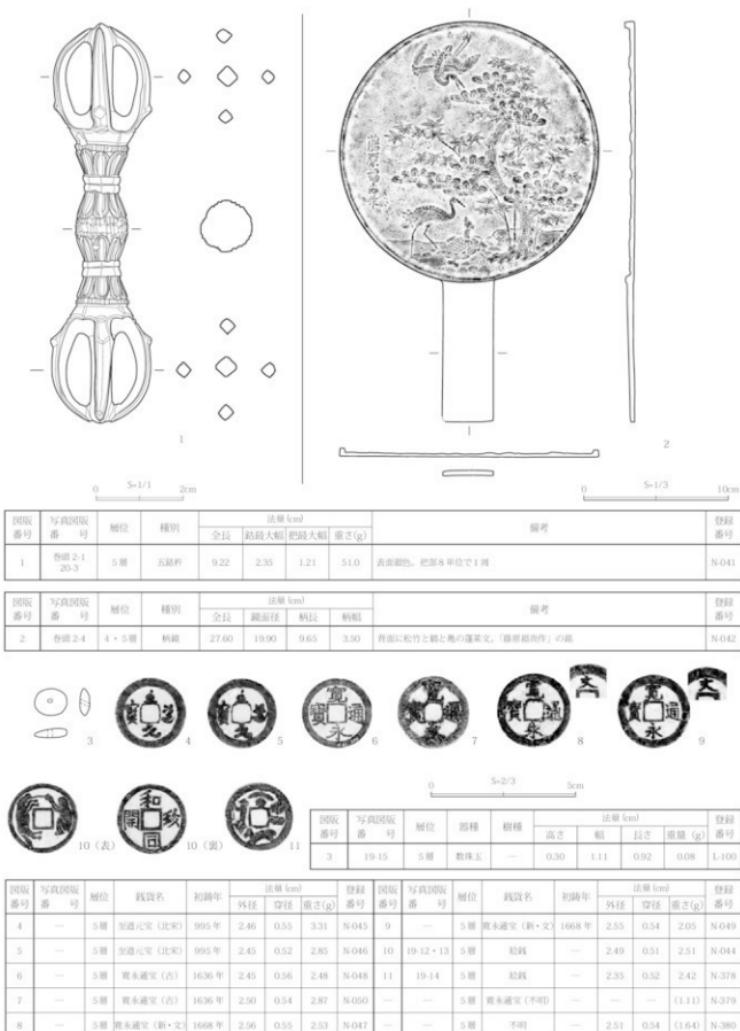


第59図 SM5墓跡平面図・断面図

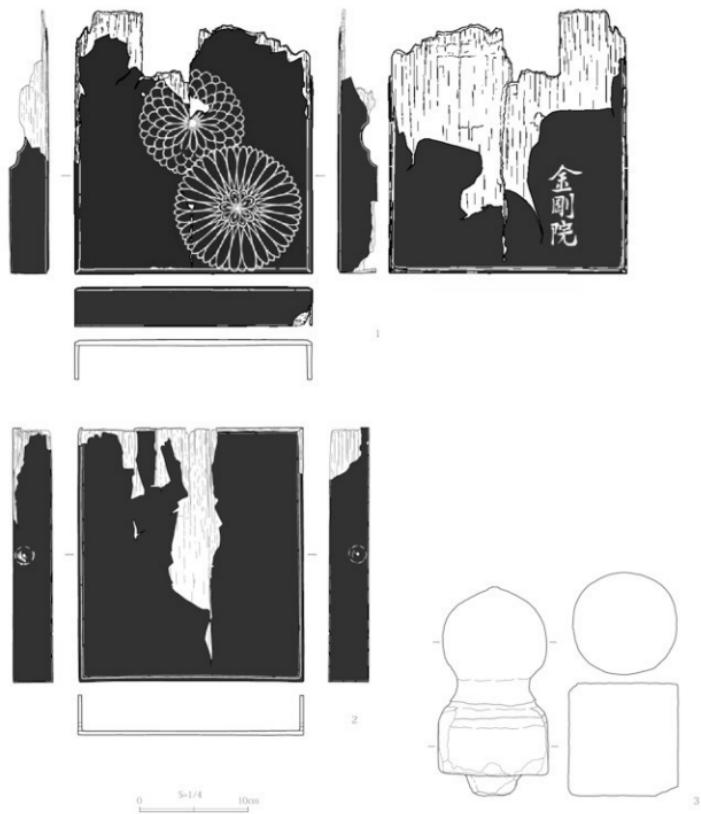
五鉢杵は、ところどころ傷があるが完形である。把は鬼目が省略して表現されており、八葉の連弁が紐帶で締められている。杵のうち、脳杵は逆刺があり、中杵と先端でつながっている。色調は銀色で、白銅製と推定される。柄鏡は背面に松と竹を地に2羽の鶴と1匹の亀の蓬莱文が描かれ、「藤原福尚作」の銘がある。漆塗りの色紙箱は、蓋と身が出土しているが、一端が破損している。蓋は内外面に黒色の漆が塗られているが、下地には使用していない。外面には金蒔絵で菊花文（表・裏）が描かれ、内面には銀蒔絵で「金剛院」と記されている。身は、内面に茶色の漆が、外面に黒色の漆が塗られており、下地には使用していない。側面に小孔があり紐金具を付けた痕跡が認められる。法量の近似した例として、伊達家資料の「竹に雀紋絵色紙箱」（仙台市博物館所蔵）がある（仙台市博物館 1992）。漆塗り木片は、1点が赤漆で鶴の足と羽を、もう1点は赤漆で松と竹が描かれている。煙管は、吸口と羅宇である。10点出土している錢貨は、北宋銭の至道元寶2点、寛永通宝5点、絵銭2点、判別不能な錢貨1点で、寛永通宝は、古寛永2点、新寛永（文錢）2点、サビのため判別不能なもの1点である。絵銭は、2点ともに駒曳錢である。歯は、小白歯と大白歯の破片各1点である。



第60図 SM 5墓跡断面図・出土遺物（1）



第61図 S M5墓跡出土遺物（2）



図版 番号	写真図版 番号	層位	種別	樹種	法量 [cm]				備考	登録 番号
					長さ	幅	高さ	厚さ		
1	25-3・6 25-1	4・5層	色紙箱(蓋)	ヒノキ科	24.20	21.80	3.60	0.55	外面に金荷輪で菊花文、内面に銀荷輪で「金剛院」の墨。上端欠損	L-007
2	26-2	4・5層	色紙箱(身)	ヒノキ科	23.40	20.80	3.60	0.35	左右側面に穿孔。上端欠損	L-008
図版 番号	写真図版 番号	層位	器種	石材	法量 [cm]				備考	登録 番号
					高さ	幅	厚さ	重さ (kg)		
3	19-8	2層	五輪塔	輝石安山岩	19.1	10.1	10.3	3.04	空輪・頭輪	K-004

第62図 S.M.5.墓跡出土遺物（3）

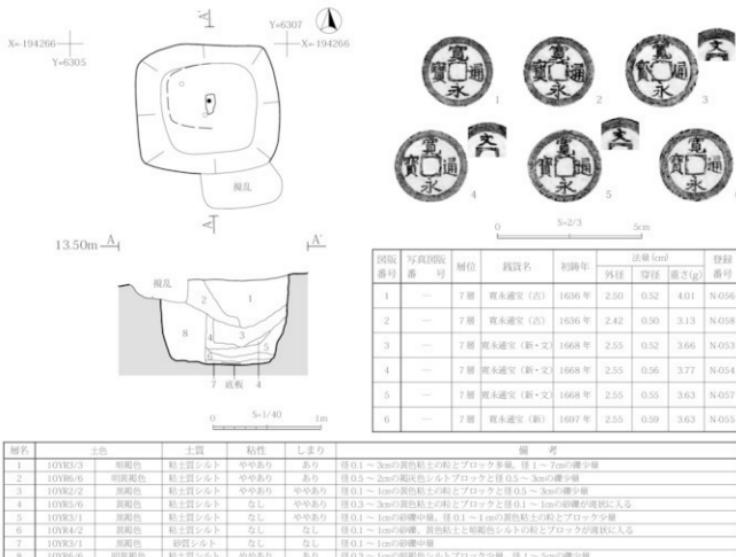
第2節 平成21年度調査区

6) SM6墓跡 (第63図 図版8-5)

G-16グリッドに位置する。規模は、上端が $132 \times 118\text{cm}$ 、掘り方の底面が $88 \times 82\text{cm}$ 、深さ 78cm を測る。平面形は上端・掘り方の底面いずれも隅丸方形である。木棺の底板片がわずかに残存しており、木棺の形態は方形と推定される。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は8層を確認した。1～7層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、8層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は、1層から須恵器と瓦の小片各1点、7層から銭貨6点と骨片1点、歯3点が出土している。銭貨は寛永通宝で、古寛永2点、新寛永(文銭)が3点、新寛永1点である。歯は、右下の第二小白歯1点、左下の第三大白歯1点、左右不明の下の大臼歯片1点である。



第63図 SM6墓跡平面図・断面図・出土遺物

7) SM7墓跡 (第64図 図版8-6～8・21-1・2)

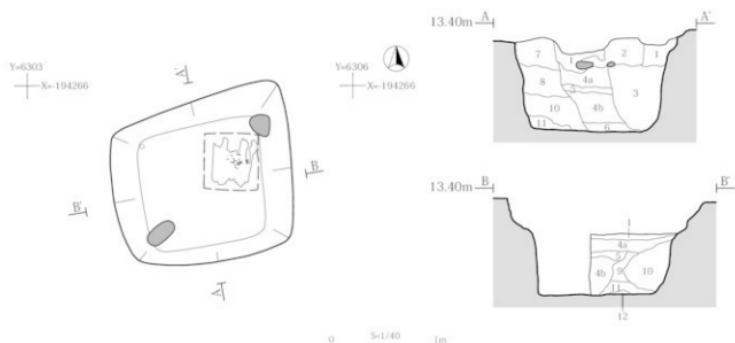
G-16グリッドに位置する。規模は、上端が $170 \times 154\text{cm}$ 、掘り方の底面が $112 \times 110\text{cm}$ 、深さ 78cm を測る。北東隅に木棺の底板が残存しており、木棺の底板の形態は42cm四方の正方形である。平面形は、上端が不整隅丸方形で掘り方の底面は隅丸方形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。残存していた木棺に比べて、掘り方の大きさは4倍ほどである。

堆積土は12層を確認した。1～6層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、7～12層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

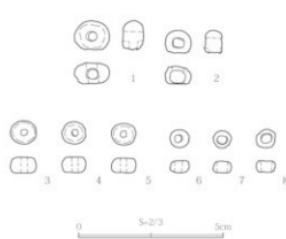
遺物は、3層から土師器片2点と瓦片1点、産地不明な磁器の袋物と皿の破片各1点、鉄釘5点と金属片2点が出土している。

6層の底板の上からは、木製の数珠玉が67点出土している。そのうち41点が完形で、26点が破損していた。完形の数珠玉は、法量からやや大形なものと小形なものに分けられた。やや大きなものは15点あり、高さ0.75～0.87cm、幅0.60～0.79cm、長さ0.40～0.56cm、重さ0.10～0.25cmである。小形なものは24点あり、高さ0.62～0.73cm、幅0.59～0.71cm、長さ0.32～0.51cm、重さ0.05～0.14cmである。そのほかに、2方向に孔があけられているものが2点出土している。

また、10層から径10cmと15cmの礫片が2点、11層の北東隅から径25cmの礫1点、南北隅から径30cmの礫1点、北西隅には赤漆片がまとめて出土している。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	黄褐色	砂質粘土	やや柔軟	なし	0.1～2cmの隙間に木ブロックは見えず、表面無凹凸
2	明褐色	粘土	あり	あり	0.5～3cmの黄色系シルトブロックと径0.5～1cmの礫
3	明褐色	粘土シルト	やや柔軟	あり	0.5～10cmの黄色系シルトブロックと径0.5～2cmの礫
4a	黄褐色	粘土シルト	やや柔軟	あり	0.1～1cmの黄色系シルトと褐色粘土の和とブロックが塊状に入る
4b	黄褐色	粘土シルト	やや柔軟	あり	0.1～1cmの黄色系シルトと褐色粘土の和とブロック。径0.5～3cmの礫が塊状に入る
5	黄褐色	粘土シルト	やや柔軟	あり	0.5cm以下の黄色粘土と褐化物混雜
6	2.5Y2/1	褐色	シルト	あり	なし
7	10W7/1	明褐色	粘土シルト	あり	0.5～3cmの礫
8	10W8/8	明褐色	粘土シルト	あり	0.1～1cmの黄色系シルトと褐色粘土の和とブロック。径0.5～3cmの礫が塊状に入る
9	10W3/2	明褐色	砂質シルト	あり	0.3～1cmの黄色系シルトと褐色粘土の和とブロック。径0.5～1cmの礫
10	2.5Y7/8	褐色	粘土シルト	あり	0.5～3cmの黄色系シルトと褐色粘土の和とブロック。径0.3～1cmの黄色粘土の和とブロック混雜
11	10W3/1	明褐色	粘土質シルト	やや柔軟	0.3～1cmの黄色粘土の和とブロック混雜
12	10W3/6	明褐色	粘土シルト	やや柔軟	0.5cm以下の黄色系シルトの和と少



番号	真跡番号	位相	器種	種類	法量(cm)			登録番号	
					高さ	幅	長さ		
1	21-1	6層	数珠玉	周丸材	1.19	0.96	0.72	0.44	L-057
2	21-1	6層	数珠玉	周丸材	0.90	0.70	0.60	0.17	L-058
3	21-1	6層	数珠玉	周丸材	0.87	0.79	0.56	0.19	L-014
4	21-1	6層	数珠玉	周丸材	0.82	0.72	0.32	0.25	L-015
5	21-1	6層	数珠玉	周丸材	0.82	0.75	0.53	0.19	L-016
6	21-1	6層	数珠玉	周丸材	0.72	0.69	0.45	0.10	L-059
7	21-1	6層	数珠玉	周丸材	0.72	0.70	0.42	0.11	L-060
8	21-1	6層	数珠玉	周丸材	0.73	0.69	0.44	0.11	L-061

第64図 SM7墓跡平面図・断面図・出土遺物

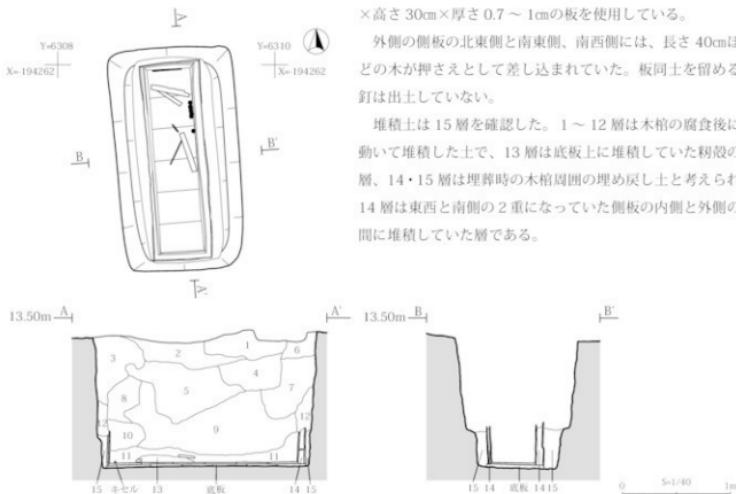
8) SM8墓跡 (第65・66図 図版9-1～4・21-3～7・巻頭2-2)

G-16 グリッドに位置し、S D 3・4より新しい。規模は、上端が 206 × 128cm、掘り方の底面が 190 × 90cm、深さ 125cm を測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともに隅丸長方形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

木棺の底板と側板がほぼ完全な状態で残存しており、底板の大きさは 182 × 56cm の長方形で、側板の高さ約 40cm である。木棺の底板・側板とともに 2 重構造で、底板は下の木材の方が上の木材よりやや大きく、側板も外側の木材の方が内側の木材よりやや大きい。底板は、底面に長さ 30cm × 幅 52cm × 厚さ 4cm の長方形の板を 6 枚並べた上に、長さ 30cm × 幅 40cm × 厚さ 2cm の長方形の板を 6 枚さらに並べている。側板は、東の外側に長さ 182cm × 高さ 40cm × 厚さ 1 ~ 1.5cm、内側に長さ 176cm × 高さ 35cm × 厚さ 1cm、西の外側に長さ 179cm × 高さ 34cm × 厚さ 1 ~ 1.2cm、内側に長さ 174cm × 高さ 33cm × 厚さ 0.7 ~ 1cm、南の外側に長さ 54cm × 高さ 33cm × 厚さ 1.2 ~ 1.5cm、内側に長さ 44cm × 高さ 27cm × 厚さ 1cm、北の外側に長さ 56cm × 高さ 28cm × 厚さ 1.2 ~ 1.5cm、内側に長さ 48cm × 高さ 30cm × 厚さ 0.7 ~ 1cm の板を使用している。

外側の側板の北東側と南東側、南西側には、長さ 40cm ほどの木が押さえとして差し込まれていた。板同士を留める釘は出土していない。

堆積土は 15 層を確認した。1 ~ 12 層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、13 層は底板上に堆積していた初段の層、14・15 層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられ、14 層は東西と南側の 2 重になっていた側板の内側と外側の間に堆積していた層である。

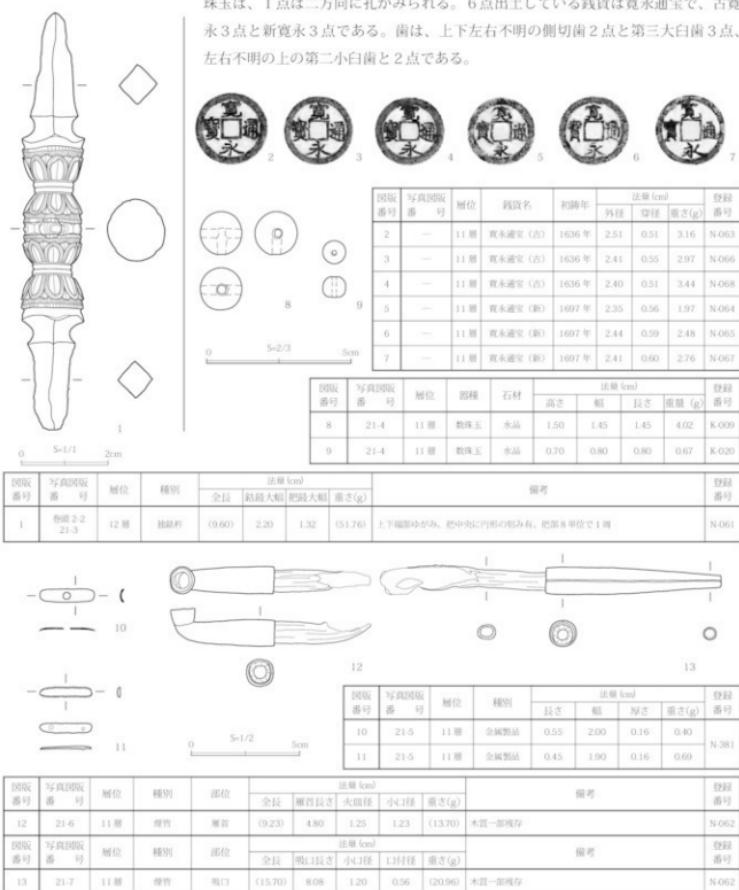


層名	層構成			
	土色	土質	粘性	しまり
1 10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	せん 0.3 ~ 2cmの黒褐色粘土ブロック中層。径 1 ~ 7cmの礫少額
2 10YR6/0	明褐色	粘土質シルト	ややあり	せん 0.3 ~ 5cmの黒褐色粘土と黒褐色シルトのブロック。径 0.5 ~ 5cmの礫少額
3 10YR7/6	明褐色	粘土質シルト	ややあり	あら 0.3 ~ 3cmの黒褐色シルトと黒褐色粘土。径 0.5 ~ 3cmの礫少額
4 10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	なし
5 10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	せん 0.3 ~ 3cmの黒褐色シルトと明褐色粘土。径 0.5 ~ 3cmの礫少額
6 10YR4/1	褐色	粘土質シルト	ややあり	せん 0.3 ~ 3cmの黒褐色粘土と黒褐色シルトのブロックが層中に入る
7 10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	なし
8 5GY4/1	暗オーラブ灰	粘土質シルト	ややあり	せん 0.3 ~ 3cmの黒褐色シルトと明褐色粘土。径 0.5 ~ 3cmの礫少額
9 10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	なし
10 10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	せん 0.3 ~ 1cmの黒褐色粘土のブロックと径 0.5 ~ 3cmの礫少額
11 2.5Y4/1	褐色	シルト	あり	なし
12 10YR4/6	褐色	粘土質シルト	ややあり	せん 0.3 ~ 3cmの黒褐色シルトと黒褐色粘土のブロックが層中に入る
13 N2/0	褐色	有機質土	なし	なし
14 5GY3/1	暗褐色	粘土質シルト	あり	せん 中央グリーン、径 0.3 ~ 1cmの黒褐色シルトと暗褐色シルトのブロック、砂利少額
15 2.5Y3/4	褐色	粘土質シルト	ややあり	なし

第65図 SM8墓跡平面図・断面図

遺物は2層から土師器片2点、11層から金属製品2点と歯7点、底板の東隅から石製の数珠玉2点と銭貨6点、底板の北隅から煙管1点、13層の羽根の直上から独鉢杵1点が出土している。

独鉢杵は、被熱しており、杵に変形がみられるが、完形である。把は横長の鬼目が表現され、鬼目を切るように径 0.46×0.5 cmの梢円形の切り込みが1箇所ある。八葉の連弁が紐帶で縋められている。杵は菱形だが垂みがみられる。色調は赤褐色で、銅製と推定される。煙管は、雁首の羅宇結合部より見て右側に羅目がある。水晶製の数珠玉は、1点は二方向に孔がみられる。6点出土している銭貨は寛永通宝で、古寛永3点と新寛永3点である。歯は、上下左右不明の側切歯2点と第三大臼歯3点、左右不明の上の第二小白歯と2点である。



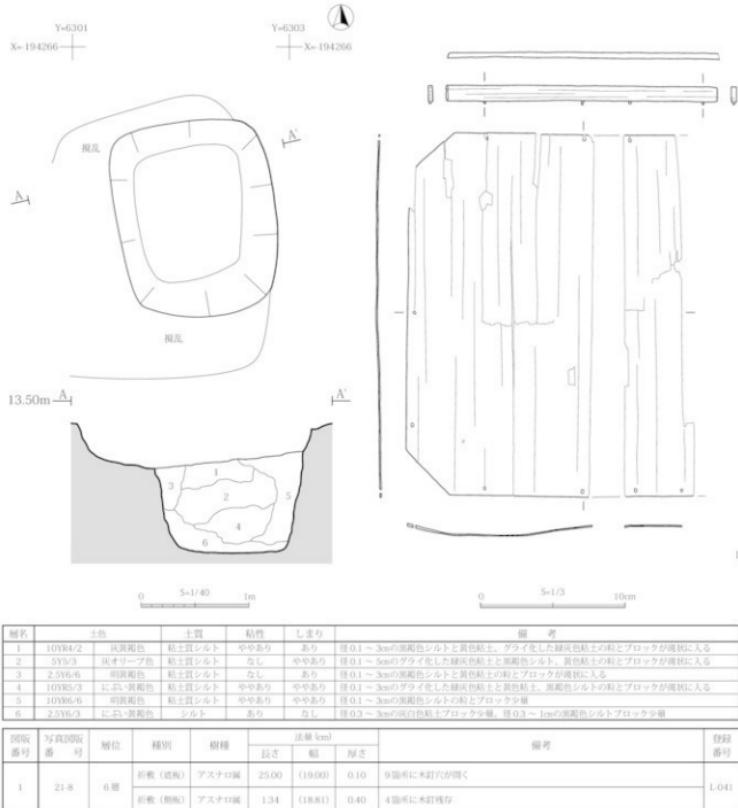
第66図 SM8墓跡出土遺物

第2節 平成21年度調査区

9) SM9墓跡 (第67図 図版9-5・6・21-8)

G-16 グリッドに位置する。大部分を壊乱に削平されており、断面図を作成した北側の掘り方と底面の一部しか堆積土は残存していなかった。規模は、上端が $182 \times 146\text{cm}$ 、掘り方の底面が $120 \times 100\text{cm}$ 、深さ 85cm を測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともに圓丸長方形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。堆積土は6層を確認した。残存状況が悪いため判断しづらいが、1～4層は木棺の腐食後に動いて堆積した土、5・6層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は、底面から折散の底板と側板が各1点出土している。底板は隅が切り落とされており、9箇所に木釘穴が開いている。側板は4箇所に木釘が残っている。



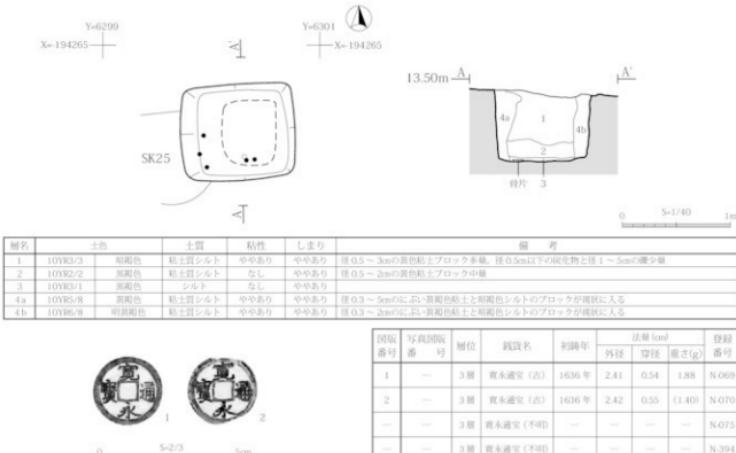
第67図 SM9墓跡平面図・断面図・出土遺物

10) SM 10墓跡 (第68図 図版9-7)

G-15・16グリッドに位置し、SK 25より新しい。規模は、上端が $105 \times 90\text{cm}$ 、掘り方の底面が $83 \times 78\text{cm}$ 、深さ 65cm を測る。平面形は、上端・掘り方の底面いずれも隅丸長方形である。木棺の底板片がわずかに残存しており、木棺の形態は方形と推定される。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は4層を確認した。1～3層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、4層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は、1層から土器器と須恵器の小片各1点、3層から銭貨4点と骨片1点、4層西側底面から、赤漆片3点が出土している。銭貨は寛永通宝で、古寛永2点、破損のため判別不能なもの2点である。



第68図 SM 10墓跡平面図・断面図・出土遺物

11) SM 11・12墓跡 (第69～71図 図版9-8・10-1・21-9～11)

G-15・16グリッドに位置する。SM 11はSM 12より新しく、SM 12はSM 13より新しい。

SM 11の規模は、上端が $96 \times 83\text{cm}$ 、掘り方の底面が $75 \times 66\text{cm}$ 、深さ 48cm を測る。平面形は、上端・掘り方の底面いずれも隅丸方形である。木棺の底板片などは残存していないが、木棺の形態は方形と推定される。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は6層を確認した。1～4層は木棺などの腐食後に動いて堆積した土で、5・6層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土である。

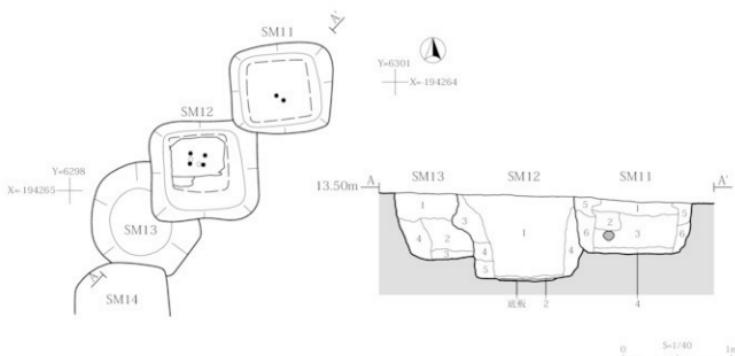
遺物は3層中から鉄釘17点、4層から銭貨4点が出土している。銭貨は寛永通宝で、古寛永1点、新寛永2点、サビのため判別不能なもの1点である。

SM 12の規模は、上端が $100 \times 92\text{cm}$ 、掘り方の底面が $74 \times 72\text{cm}$ 、深さ 80cm を測る。木棺の底板が残存しており、木棺の底板の形態は $50 \times 44\text{cm}$ の方形である。平面形は、上端・掘り方の底面ともに隅丸方形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

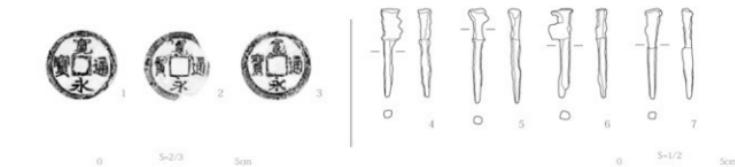
第2節 平成21年度調査区

堆積土は5層を確認した。1・2層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、3～5層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は1層中から鉄釘46点、2層から煙管の吸口1点、銭貨3点、部位不明の骨片2点が出土している。銭貨は寛永通宝で、全て新寛永である。

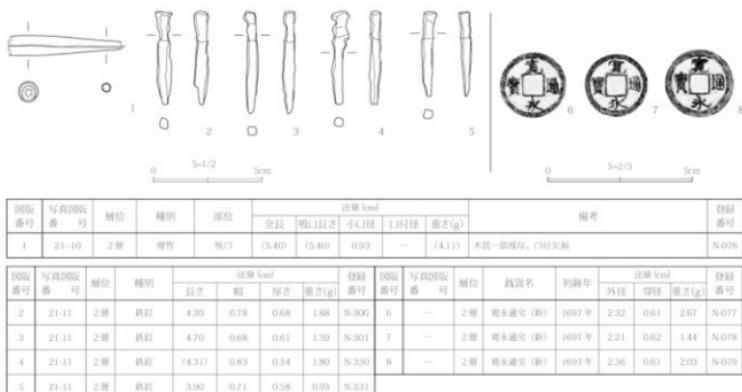


第69図 SM 11・12・13墓跡平面図・断面図



第70図 SM 11墓跡出土遺物

品番 番号	写真図版 番号	層位	銭貨名	初期年	法量(cm)		登録 番号	写真図版 番号	層位	種別	法量(cm)			登録 番号			
					95径	厚径					95径	厚径	重さ(g)				
1	—	4層	寛永通宝(古)	1636年	2.45	0.45	2.69	N-072	4	21.9	3層	鉄釘	(4.07)	0.98	0.61	1.46	N-280
2	—	4層	寛永通宝(新)	1697年	(2.42)	0.55	(1.97)	N-071	5	21.9	3層	鉄釘	4.35	0.93	0.60	1.34	N-286
3	—	4層	寛永通宝(新)	1697年	2.46	0.55	3.19	N-074	6	21.9	3層	鉄釘	4.10	1.12	0.61	1.44	N-293
—	—	4層	寛永通宝(不詳)	—	2.36	0.55	1.77	N-073	7	21.9	3層	鉄釘	4.16	0.80	0.53	1.15	N-296



第71図 SM 12墓跡出土遺物

12) SM 13・14墓跡 (第72～75図 図版10-2～4・22-1・2)

G-15グリッドに位置する。

SM 13は、SM 12・14より古い。規模は、上端が100cm四方、掘り方の底面が 60×56 cm、深さ60cmを測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともに不整円形である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形である。堆積土は4層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

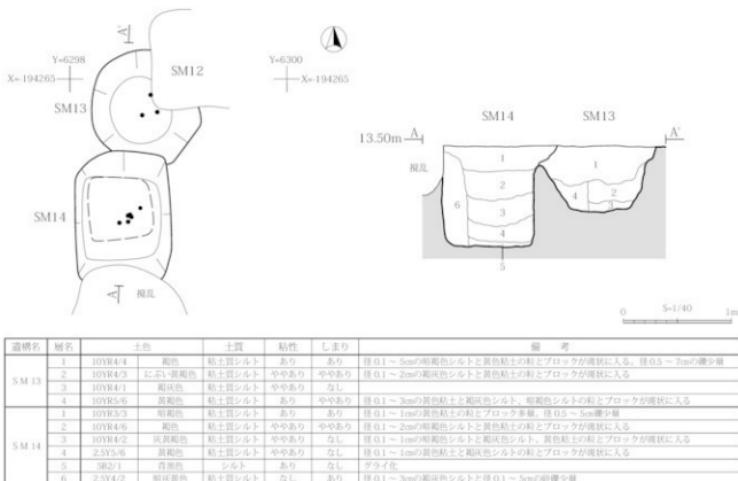
遺物は、3層から煙管の雁首と吸口の破片各1点と銭貨6点が出土している。銭貨は寛永通宝で、古寛永1点と新寛永（文銭）1点、新寛永4点である。

SM 14はSM 13より新しく、南側を壊乱で一部削平されている。規模は、上端が 105×88 cm、掘り方の底面が 76×72 cm、深さ92cmを測る。平面形は上端・掘り方の底面いずれも隅丸長方形である。木棺の底板片がわずかに残存しており、木棺の形態は方形と推定される。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は6層を確認した。1～5層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、6層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は2層から產地不明の陶器の碗片1点、5層から籠甲製の笄3点、煙管片1点、銭貨16点、鉄釘2点が出土壤している。銭貨は寛永通宝15点と判別不能銭貨1点で、寛永通宝は、古寛永5点、新寛永（文銭）1点、新寛永8点、サビのため判別不能なもの1点である。

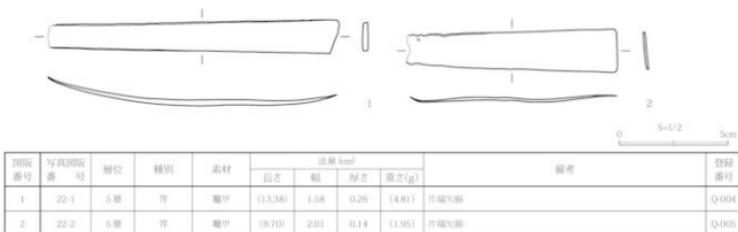
第2節 平成21年度調査区



第72図 SM 13・14墓跡平面図・断面図



第73図 SM 13墓跡出土遺物



第74図 SM 14墓跡出土遺物(1)

回収番号	写真図版番号	層位	銭貨名	初鉛年	法量(cm)	登録番号	回収番号	写真図版番号	層位	銭貨名	初鉛年	法量(cm)	登録番号				
					外径	穿孔径	面さ(g)					外径	穿孔径	面さ(g)			
1	—	5層	寛永通宝(古)	1636年	2.28	0.52	2.92	N-089	9	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.18	0.61	0.93	N-093
2	—	5層	寛永通宝(古)	1636年	2.40	0.53	2.54	N-090	10	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.31	0.55	1.68	N-094
3	—	5層	寛永通宝(古)	1636年	2.50	0.55	2.72	N-101	11	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.32	0.55	1.68	N-095
4	—	5層	寛永通宝(古)	1636年	2.53	0.55	2.20	N-103	12	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.24	0.59	2.22	N-096
5	—	5層	寛永通宝(古)	1636年	2.54	0.56	2.76	N-104	13	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.24	0.59	2.37	N-098
6	—	5層	寛永通宝(新・定)	1666年	2.19	0.52	1.33	N-097	14	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.49	0.54	3.07	N-102
7	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.40	0.54	2.77	N-091	—	—	5層	寛永通宝(不明)	—	2.32	0.60	2.28	N-099
8	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.31	0.60	2.32	N-092	—	—	5層	不明	—	2.34	0.59	(1.67)	N-100

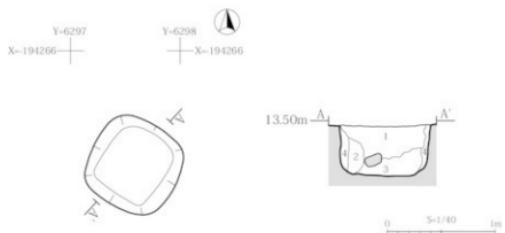
第75図 SM 14墓跡出土遺物（2）

13) SM 15墓跡（第76図 図版10-5）

G-15グリッドに位置する。規模は、上端が82cm四方、掘り方の底面が64×58cm、深さ45cmを測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともに隅丸方形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は4層を確認した。1～3層は木棺などの腐食後に動いて堆積した土で、4層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は出土していない。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	あり	やや入り 0.1～2cmの黄褐色土と黒褐色シルトの和とブロックが隙間に入る
2	10YR6/9	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	やや入り 0.1～3cmの黒褐色シルトの和とブロック少額
3	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	やや入り 0.3～1cmの黄褐色シルトブロック少額
4	10YR5/6	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	入り 0.3～1cmの黒褐色シルトブロック極額

第76図 SM 15墓跡平面図・断面図

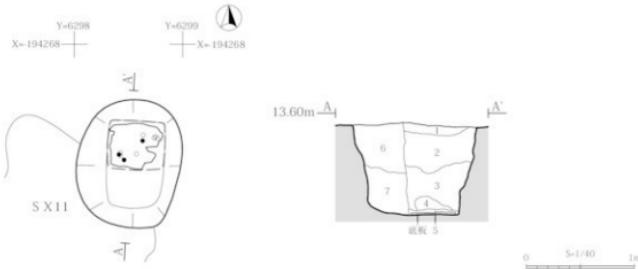
第2節 平成21年度調査区

14) SM 16墓跡 (第77・78図 図版10-6～8・22-3・4)

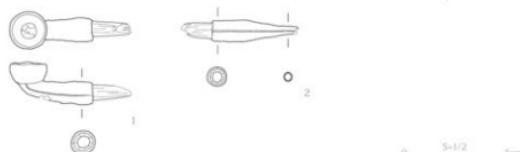
G-15 グリッドに位置し、SX 11より新しい。規模は、上端が118×95cm、掘り方の底面が80×54cm、深さ85cmを測る。木棺の底板が残存しており、木棺の底板の形態は50×42cmの方形である。平面形は、上端は不整剛丸長方形で掘り方の底面は剛丸長方形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は長方形である。

堆積土は7層を確認した。1～5層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、6・7層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は、5層から煙管の雁首と吸口各1点、銭貨13点、骨片4点、歯17点、木棺の底板1点が出土している。煙管の雁首の羅字結合部より見て左側に縫目がある。寛永通宝は、古寛永1点、新寛永(背佐銭)1点、新寛永7点、サビと破損のため判別不能なもの4点である。骨片は4点全てが頭骨の一部で、歯は左上の中切歯、第一小白歯、第二小白歯、第一大白歯、第三大白歯各1点、右上の第一大白歯、第三大白歯各1点、上の第一か第二小白歯1点、左右の下の大臼歯各1点、左下の第一小白歯1点、右下の第一か第三大臼歯1点、下の中切歯か側切歯各1点、側面に溝がある大臼歯1点である。

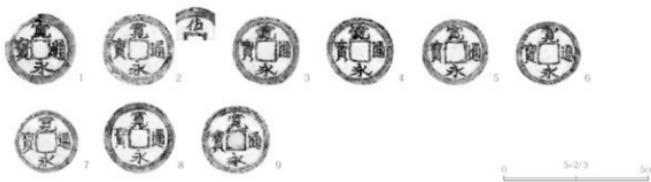


層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	7.5YR4/2 灰褐色	砂質シルト	なし	あり	径0.5cm以下の砂質少粒
2	10YR3/3 褐褐色	砂質シルト	なし	あり	径0.1～3cmの黒褐色シルトと黄色粘土の粒とブロック
3	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.1～1cmの黒褐色シルトと黄色粘土の粒とブロックが塊状に入る
4	10YR3/3 褐褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	径0.5cm以下の黄褐色少粒
5	10YR3/1 黒褐色	シルト	あり	なし	径0.1～1cmの砂質少粒
6	10YR6/6 明褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径0.1～3cmの黒褐色シルトの粒とブロック少額
7	10YR4/3 によく褐褐色	粘土質シルト	あり	あり	径0.1～3cmの砂質少額



図版 番号	写真図版 番号	層位	種別	部位	法量(kg)				備考	登録 番号
					全長	裏首長さ	火曲径	小臼径		
1	22-3	5層	銀質	裏首	(5.63)	3.86	1.72	1.07	(13.70)	木質一部残存
法量(kg)										
2	写真図版 番号	層位	種別	部位	全長	裏首長さ	火曲径	小臼径	備考	登録 番号
2	22-4	5層	銀質	裏口	(5.90)	(4.07)	0.90	—	(3.68)	木質一部残存

第77図 SM 16墓跡平面図・断面図・出土遺物(1)



目録番号	写真版番号	層位	銭貨名	初鉛年	法華 cm		登録番号	写真版番号	層位	銭貨名	初鉛年	法華 cm		登録番号			
					外径	穿孔						外径	穿孔				
1	—	5層	寛永通宝(古)	1636年	2.54	0.50	(2.88)	N-107	7	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.20	0.59	1.32	N-114
2	—	5層	寛永通宝(新・背凸)	1697年	2.50	0.53	2.70	N-110	8	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.46	0.55	3.02	N-115
3	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.32	0.54	2.66	N-108	9	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.43	0.46	3.41	N-117
4	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.38	0.56	2.53	N-109	—	—	5層	寛永通宝(不明)	—	2.44	0.57	(2.00)	N-106
5	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.34	0.53	2.97	N-112	—	—	5層	寛永通宝(不明)	—	2.49	0.58	2.58	N-111
6	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.24	0.64	1.50	N-113	—	—	5層	寛永通宝(不明)	—	2.29	0.61	1.79	N-116
6	—	5層	寛永通宝(新)	1697年	2.24	0.64	1.50	N-113	—	—	5層	寛永通宝(不明)	—	—	—	(0.57)	N-382

第78図 SM 16墓跡出土遺物（2）

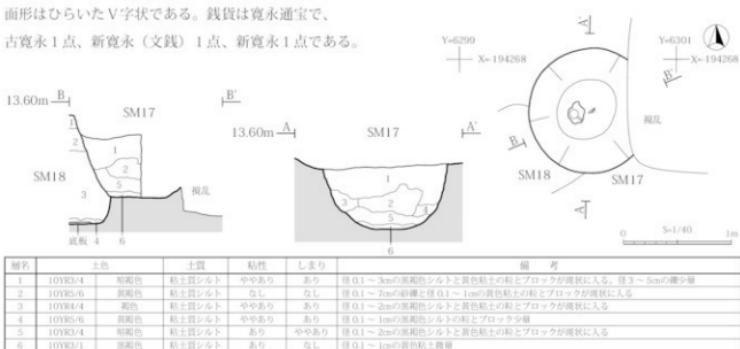
15) SM 17墓跡 (第79・80図 図版11-1～4・22-5・6)

G-15・16グリッドに位置し、東側と上面を掠乱に削平され、SM 18より新しい。規模は、上端が115×90cm、掘り方の底面が60×52cm、深さ58cmを測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともにはほぼ円形である。木棺の底板片がわずかに残存しており、木棺の形態は円形と推定される。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は椀状である。

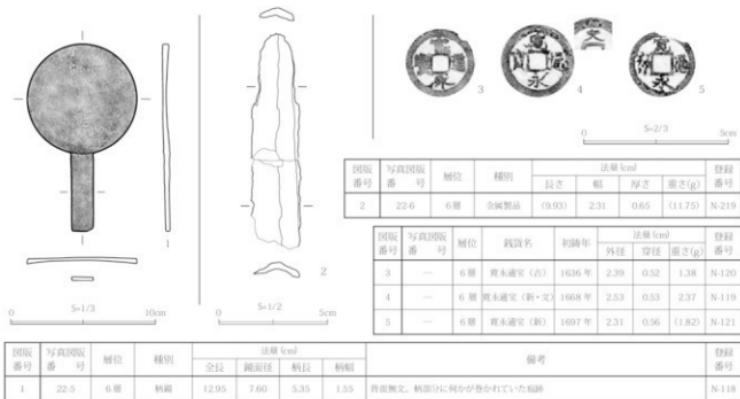
堆積土は6層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は1層から土器師の小片2点、6層から、柄鏡1点、銭貨3点、金属製品1点、鉄釘5点、赤漆片5点が出土している。柄鏡は、背面は無文で柄部分に何かが巻かれていた痕跡がある。金属製品は片端を欠損しており、断面形はひらいたV字状である。銭貨は寛永通宝で、

古寛永1点、新寛永（文銭）1点、新寛永1点である。



第79図 SM 17墓跡平面図・断面図



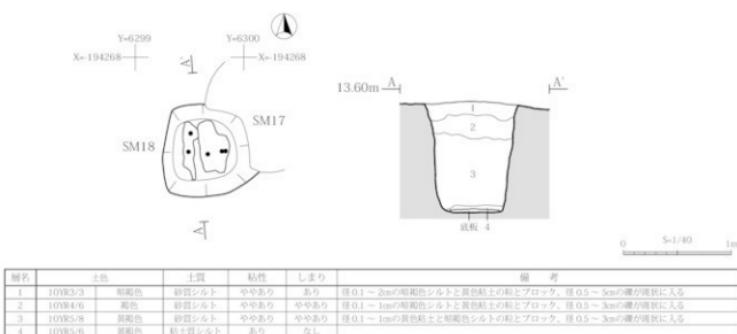
第80図 SM 17墓跡出土遺物

16) SM 18墓跡 (第81・82図 図版11-5～7・22-7・8)

G-15グリッドに位置し、SM 17より古い。規模は、上端が $85 \times 80\text{cm}$ 、掘り方の底面が $56 \times 52\text{cm}$ 、深さ102cmを測る。木棺の底板が残存しており、木棺の底板の形態は $54 \times 44\text{cm}$ の方形である。平面形は、上端・掘り方の底面ともには不整圓角方形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は4層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は3層から土器師と須恵器の小片各1点と鉄釘9点、4層から、煙管の雁首と吸口の破片各1点、銭貨24点、赤漆片2点が出土している。煙管の雁首は、羅字結合部より見て左側に継目がある。銭貨は寛永通宝22点と判別不能な銭貨2点で、寛永通宝は、古寛永2点、新寛永19点、サビと破損のため判別不能なもの1点である。



第81図 SM 18墓跡平面図・断面図

The figure contains several groups of illustrations. At the top left are five views of a curved metal object (1) and five views of a straight metal object (2-6). Below these are two views of a small circular object (7-8). In the center, there is a table with data for these objects. To the right of the table are two views of a coin (6-7). Below the table are three rows of nine coins each, numbered 8 through 26. A scale bar at the bottom right indicates 0, 5-1/2, and 5cm.

図版 番号	写真版 番号	部位	種別	部位	法規 (cm)				備考	登録 番号
					全長	幅	厚さ	重さ(g)		
1	22-7	4層	埋葬	発見	(6.81)	5.80	1.60	0.86	(7.13) 木製一部残存	N-146
2	22-8	3層	鉄釘	長さ	5.87	1.00	0.66	2.29	N-353	
3	22-8	3層	鉄釘	幅	5.71	1.00	0.62	2.03	N-355	
4	22-8	3層	鉄釘	厚さ	5.63	0.79	0.64	1.90	N-356	
5	22-8	3層	鉄釘	重さ	5.47	0.77	0.49	1.43	N-357	
6										
7										
8										
9										
10										
11										
12										
13										
14										
15										
16										
17										
18										
19										
20										
21										
22										
23										
24										
25										
26										

図版 番号	写真版 番号	部位	銭銘名	初期年	法規 (cm)				備考	初期年	外径	穿孔	重さ(g)	登録 番号			
					外径	穿孔	重さ(g)	番号									
6	—	4層	寛永通宝 (古)	1636年	2.42	0.53	3.43	N-128	18	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.22	0.62	1.64	N-133
7	—	4層	寛永通宝 (古)	1636年	2.45	0.51	3.29	N-129	19	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.41	0.61	2.36	N-134
8	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.21	0.61	2.01	N-122	20	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.23	0.61	1.25	N-136
9	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.21	0.59	1.77	N-123	21	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.39	0.56	2.62	N-137
10	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.37	0.56	2.73	N-124	22	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.40	0.54	2.30	N-138
11	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.22	0.62	1.61	N-125	23	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.35	0.52	2.76	N-139
12	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.22	0.62	2.07	N-126	24	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.46	0.52	(2.71)	N-140
13	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.22	0.60	1.45	N-127	25	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.20	0.49	2.33	N-141
14	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.35	0.60	2.65	N-129	26	—	4層	寛永通宝 (新+?)	—	(2.18)	0.59	(1.51)	N-143
15	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.29	0.59	2.23	N-130	—	—	4層	寛永通宝 (平明)	—	2.50	0.52	1.82	N-142
16	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.23	0.59	1.77	N-131	—	—	4層	不明	—	—	—	—	N-144
17	—	4層	寛永通宝 (新)	1697年	2.20	0.59	1.86	N-132	—	—	4層	不明	—	—	—	—	N-395

第82図 SM 18墓跡出土遺物

第2節 平成21年度調査区

17) SM 19・20・21墓跡 (第83～86図 図版11-8～12-2・22-9～12)

G-19 グリッドに位置する。SM 20とSM 21は重複していないが、堆積土の1層は共通しており、新旧関係は不明である。

SM 19の規模は、上端が96×91cm、掘り方の底面が70×70cm、深さ84cmを測る。木棺の底板が一部残存しており、大きさは34×24cmで、木棺の形態は円形と推定される。平面形は、上端は不整円形で掘り方の底面は円形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は3層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は1層から土師器の小片3点、3層から銭貨6点が出土している。銭貨は寛永通宝で、古寛永2点、新寛永4点である。

SM 20の規模は、上端が100×88cm、掘り方の底面が70×66cm、深さ90cmを測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともに不整圓丸形である。木棺の底板片がわずかに残存しており、木棺の形態は方形と推定される。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

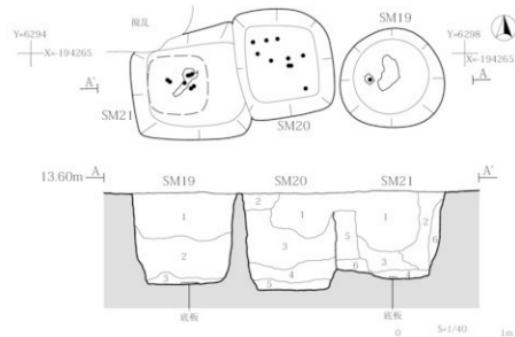
堆積土は5層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は、3層から土師器片4点と須恵器片1点、4層から鉄釘4点、5層から鼈甲製の笄片2点、煙管の雁首と吸口各1点、銭貨18点、木片2点が出土している。銭貨は北宋銭の皇宋通宝1点、寛永通宝は17点で、古寛永4点、新寛永(文錢)3点、新寛永9点、サビのため判別不能もの1点である。

SM 21の規模は、上端が108×106cm、掘り方の底面が88×75cm、深さ80cmを測る。木棺の底板が一部残存しており、大きさは33×

12cmで、木棺の形態は方形と推定される。平面形は、上端・掘り方の底面いずれも不整圓丸形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は6層を確認した。1～4層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、5・6層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。



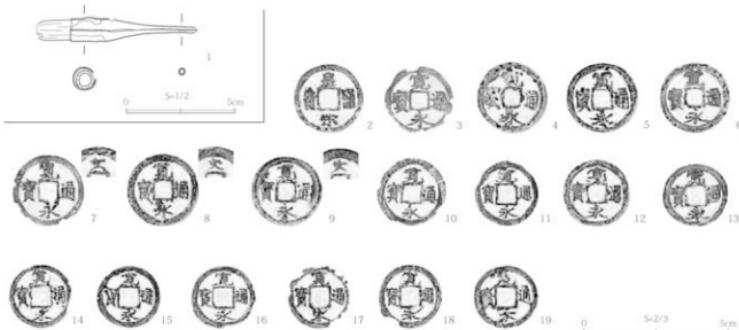
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SM 19	1	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	ややあり	径0.1～1mmの黒褐色シルトと黄褐色シルトとブロックが塊状に入る。径0.5～5cmの砂礫類
	2	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	ややあり	径0.1～1mmの砂礫類
	3	10YR3/3	褐色	粘土質シルト	なし	径0.1～1mmの砂礫類
SM 20	1	10YR3/2	褐色	粘土質シルト	なし	ややあり
	2	10YR5/6	黃褐色	粘土質シルト	ややあり	径0.1～3mmの黒褐色シルトと黄褐色シルトとブロックが塊状に入る。径0.5～5cmの砂礫類
	3	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	なし	径0.1～1mmの砂礫類
	4	10YR2/3	黒褐色	砂質粘土	ややあり	径0.1～1mmの黒褐色シルトと黄褐色シルトと、黄褐色粘土の粒とブロックが塊状に入る
	5	10YR2/1	黒褐色	砂質粘土	なし	径0.1～3mmの砂礫類
SM 21	1	10YR3/2	褐色	砂質シルト	なし	ややあり SM 20の1層と同じ
	2	10YR5/8	黃褐色	粘土質シルト	あり	ややあり 径0.1～3mmの黒褐色粘土と黒褐色シルトの粒とブロックが塊状に入る。径0.1～3cmの砂礫類
	3	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり 径0.1～1cmの黒褐色粘土と黒褐色シルトの粒とブロックが塊状に入る。径0.1～3cmの砂礫類
	4	10YR3/1	褐色	粘土質シルト	なし	なし
	5	10YR5/6	黃褐色	砂質粘土	ややあり	径0.1～3mmの黒褐色粘土と黒褐色シルトの粒とブロックが塊状に入る。径0.1～3cmの砂礫類
	6	10YR3/4	暗褐色	砂質粘土	ややあり	あり 黄褐色粘土の粒 径0.1～1cmの黒褐色粘土と黒褐色シルトの粒とブロックが塊状に入る。径0.1～3cmの砂礫類

第83図 SM 19・20・21墓跡平面図・断面図

遺物は、1層から土師器の小片3点、4層から水晶製の数珠玉3点、錢貨18点、部位不明の骨片1点が出土している。錢貨は寛永通宝で、古寛永10点、新寛永（文銭）4点、新寛永2点、3枚が癒着しており不明なもの1点とサビのため判別不能なもの1点である。数珠玉は1点が涙滴形、2点が円形で、うち1点は二方向に孔がみられる。

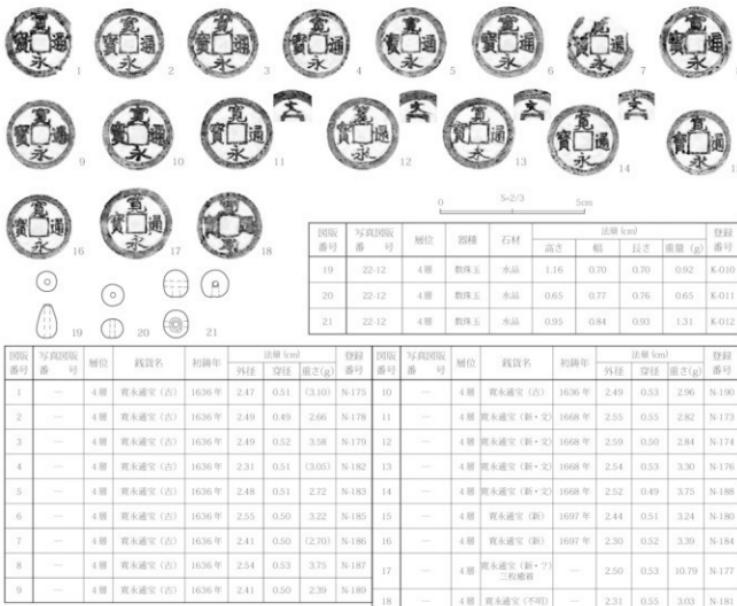


第84図 SM 19墓跡出土遺物



第85図 SM 20墓跡出土遺物

第2節 平成21年度調査区



第86図 S.M. 21墓跡出土遺物

18) S.M. 22・23墓跡 (第87~89図 図版12-3~5・22-13)

G-15グリッドに位置する。S.M. 23はS.M. 22・27より新しい。

S.M. 22の掘り方の規模は、上端が150cm四方、掘り方の底面が120×110cm、深さ68~100cmを測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともに隅丸方形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角である。

木棺部の規模は、上端が94×90cm、底面が59×55cm、深さ100cmを測る。木棺の底板が一部残存しており、大きさは52×28cmで、木棺の形態は円形と推定される。平面形は、上端が不整隅丸方形で、底面は円形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

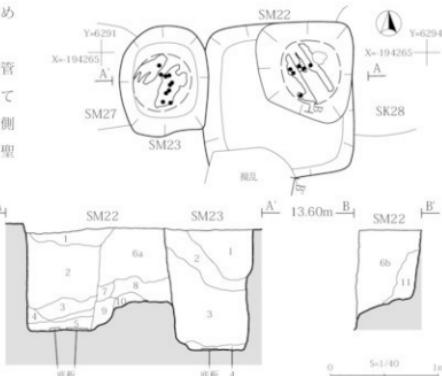
堆積土は6層を確認した。1~5層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、6~11層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は、5層から銭貨12点、骨片2点が出土地している。銭貨は寛永通宝で、古寛永1点、新寛永(文銭)8点、新寛永2点、2枚が施着した銭貨1点で、片面は古寛永でもう片面は新寛永である。骨片は後頭骨1点と部位不明1点である。

S.M. 23の規模は、上端が102×82cm、掘り方の底面が80×60cm、深さ100cmを測る。木棺の底板が一部残存しており、大きさは44×44cmで、木棺の形態は円形と推定される。平面形は、上端が不整隅丸長方形で掘り方の底面は隅丸長方形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

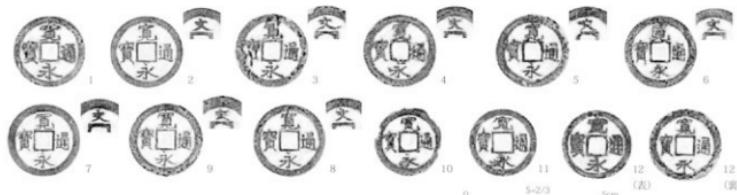
堆積土は4層で、木棺周囲の木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は1層から土師器片1点、4層から煙管の雁首1点、銭貨13点、木片2点が出土している。煙管の雁首は、羅字結合部より見て左側に継目がある。錢貨は、元祐通宝1点と天聖元宝1点、寛永通宝9点で、寛永通宝3点、新寛永(文銭)7点、新寛永1点である。



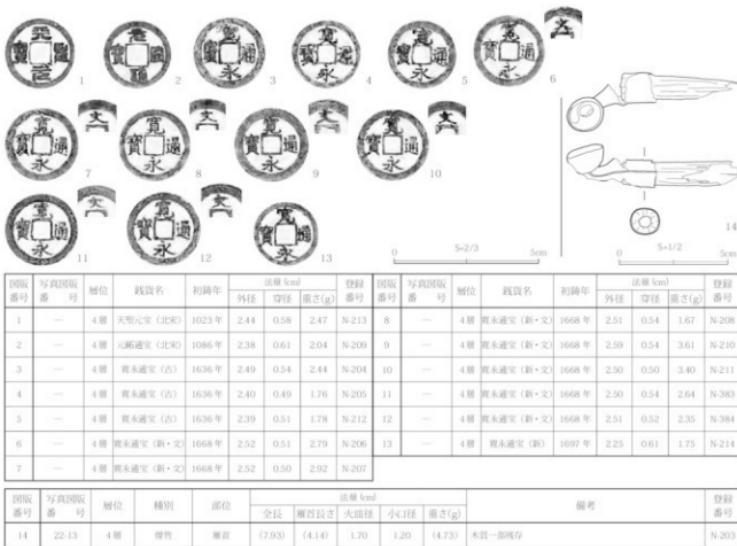
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SM 22	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	ややあり	径0.3~1mmの黄褐色シルトとブロックと0.5~3mmの礫少量
	2	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	中等程度	ややあり	径0.1~2mmの黄褐色シルトと黄褐色土との組合せが複数回入る。径0.5~10mmの礫少量
	3	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	中等程度	ややあり	径0.1~1mmの黄褐色シルトと黄褐色土との組合せが複数回入る。径0.5~3mmの礫少量
	4	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	なし	径0.3mm以下で土と粘土質シルトと細粒砂
	5	10YR3/1	黒褐色	シルト	あり	なし	
	6a	10YR5/6	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	なし	
	6b	10YR5/6	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	あり	径0.1~5mmの黄褐色シルトと黄褐色土との組合せが複数回入る。径0.5~7mmの礫少量
	7	10YR3/4	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	あり	径0.1~1mmの黄褐色シルトと黄褐色土との組合せが複数回入る。径0.5~7mmの礫少量
	8	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	あり	径0.1~1mmの黄褐色シルトと黄褐色土との組合せが複数回入る。径0.5~2mmの礫少量
	9	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	あり	径0.1~2mmの黄褐色シルトとブロックと0.5~3mmの礫少量
	10	10YR5/8	黒褐色	粘土質シルト	あり	なし	
	11	10YR4/1	褐色	粘土質シルト	あり	なし	
SM 23	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	中等程度	ややあり	径0.1~1mmの黄褐色シルトと黄褐色土との組合せが複数回入る。径0.5~3mmの礫少量
	2	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	中等程度	ややあり	径0.1~2mmの黄褐色シルトと黄褐色土との組合せが複数回入る。径0.5~7mmの礫少量
	3	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	中等程度	なし	径0.1~1mmの黄褐色シルトとブロック少量。径0.5~10mmの礫少量
	4	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	なし	

第87図 SM 22・23 畳跡平面図・断面図



岡田 番号	写真図版 番号	層位	钱銘名	初跨年	法頸 cm		發錠 番号	外径 穿径 重さ(g)	写真図版 番号	層位	錢貨名	初跨年	法頸 cm		發錠 番号	
					外径	穿径							外径	穿径		
1	—	5層	寛永通宝(古)	1636年	2.49	0.50	3.46	N-201	7	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.53	0.57	2.26
2	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.52	0.52	2.44	N-191	8	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.51	0.53	2.61
3	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.68	0.55	3.08	N-192	9	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.54	0.51	3.28
4	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.51	0.51	4.23	N-193	10	—	5層	寛永通宝(文)	1697年	2.35	0.32	(2.38)
5	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.57	0.51	3.06	N-194	11	—	5層	寛永通宝(文)	1697年	2.35	0.59	2.32
6	—	5層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.52	0.52	2.79	N-195	12	—	5層	寛永通宝(文)	1636年	2.50	0.31	7.05
														2.46	0.32	N-202

第88図 SM 22墓跡出土遺物



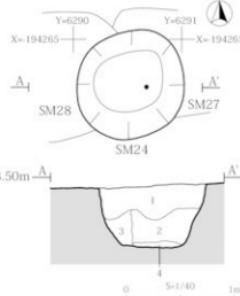
第89図 SM 23墓跡出土遺物

19) SM 24墓跡 (第90・91図 図版12-6)

G-15 グリッドに位置し、SM 27・28より新しい。規模は、上端が100cm四方、掘り方の底面が64 × 54cm、深さ58cmを測る。平面形は、上端は不整円形で掘り方の底面は不整梢円形である。壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形である。

堆積土は4層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は1層から土器師の小片8点、4層から、銭貨13点、木片1点、歯3点が出土地している。銭貨は熙寧元宝1点と寛永通宝10点と判別不能な銭貨2点で、寛永通宝は、古寛永2点、新寛永(文鏡)3点、新寛永3点、サビと破損のため判別不能なもの2点である。歯は、左上の中切歯か側切歯1点、左下の第三大臼歯1点、左右不明の下の大臼歯1点である。



剖面名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10W3/4	暗褐色	砂質シルト	やや柔軟	0.3～1cmの黄褐色粘土ブロック中層。径1～5cmの礫少見
2	10W4/2	黒褐色	粘土シルト	やや柔軟	0.5cm以上の黄褐色粘土層。径3～7cmの礫多見
3	10W3/3	暗褐色	粘土質シルト	やや柔軟	0.1～2cmの黄褐色シルトと黄褐色粘土の軽いブロック。径0.5～3cmの礫が混在に入る
4	N3-0	暗褐色	粘土質シルト	あり	なし

第90図 SM 24墓跡平面図・断面図

図版番号	写真版番号	層位	銭貨名	初跡年	法華 cm		写真版番号	層位	銭貨名	初跡年	法華 cm		写真版番号				
					外径	穿孔					外径	穿孔					
1	—	4層	寛永通宝(北)	1668年	2.40	0.56	3.27	N-389	8	—	4層	寛永通宝(東)	1697年	2.48	0.49	3.16	N-216
2	—	4層	寛永通宝(西)	1636年	2.45	0.50	2.10	N-388	9	—	4層	寛永通宝(東)	1697年	2.35	0.50	2.97	N-391
3	—	4層	寛永通宝(西)	1636年	2.51	0.52	3.38	N-362	—	—	4層	寛永通宝(不明)	—	2.40	0.43	2.26	N-387
4	—	4層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.55	0.52	3.81	N-385	—	—	4層	寛永通宝(不明)	—	2.40	0.49	(1.55)	N-393
5	—	4層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.61	0.52	3.92	N-386	—	—	4層	不明	—	—	—	(1.16)	N-217
6	—	4層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.60	0.51	3.39	N-390	—	—	4層	不明	—	—	—	(0.60)	N-218
7	—	4層	寛永通宝(新)	1697年	2.48	0.48	2.45	N-215	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第91図 SM24墓跡出土遺物

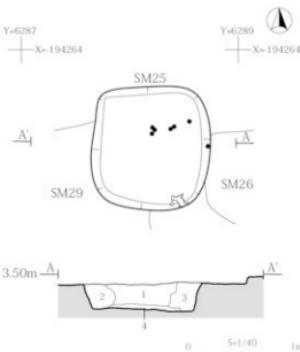
20) SM25墓跡 (第92・93図 図版12-7・8・23-1～5)

G-14グリッドに位置し、SD5とSM26・29より新しい。規模は、上端が114×110cm、掘り方の底面が100×92cm、深さ28cmを測る。平面形は、上端・掘り方の底面ともに圓丸形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

堆積土は4層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は1層から土器片1点、2層から犬形土製品1点と土鈴2点、煙管の雁首1点と銭貨1点、4層から煙管の吸口片と部位不明の破片が各1点、銭貨7点、金属製品2点、鉄釘3点が出土している。

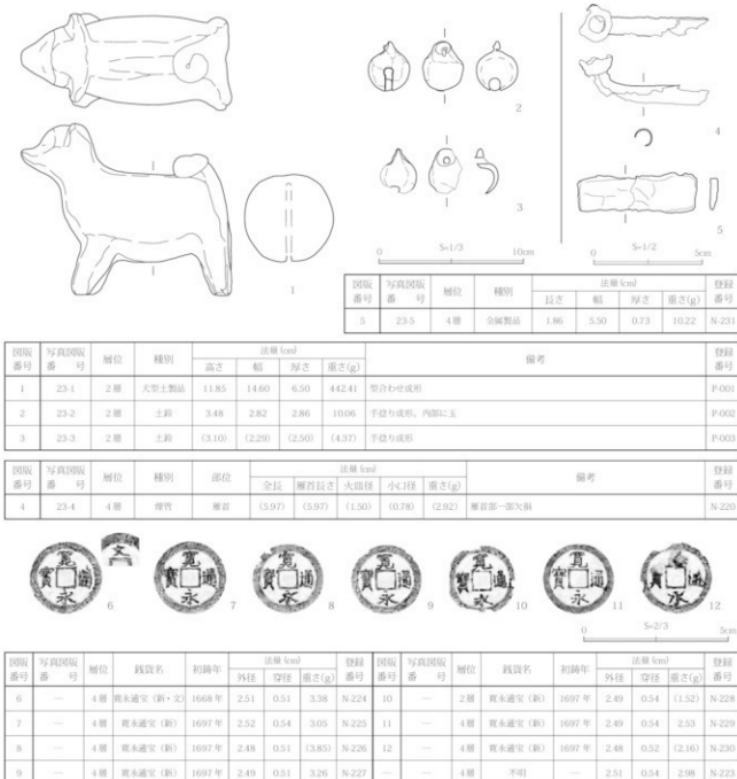
犬形土製品の成形技法は型合わせで、腹部に深さ5.6cmの穴がある。土鈴2点はいずれも手捏り成形で、完形品には径0.87cmの玉が入っている。煙管の雁首は、羅宇結合部より見て左側に雁目がある。銭貨は寛永通宝7点と判別不能な銭貨1点で、寛永通宝は、新寛永(文銭)1点、新寛永6点である。



第92図 SM25墓跡平面図・断面図

剖面名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10183/2	黒褐色	砂質シルト	やや柔軟	径0.1～2cmの黄褐色粘土とブロック中軸、径0.5～3cmの礫少頭
2	10183/2	黒褐色	砂質シルト	やや柔軟	径0.1～1cmの黄褐色粘土とブロック中軸、径0.5～3cmの礫頭
3	10183/2	黒褐色	砂質シルト	やや柔軟	径0.1～1cmの黄褐色粘土とブロック中軸
4	10183/1	黒褐色	粘土シルト	柔軟	径0.5～3cmの黄褐色粘土と砂質頭

第2節 平成21年度調査区



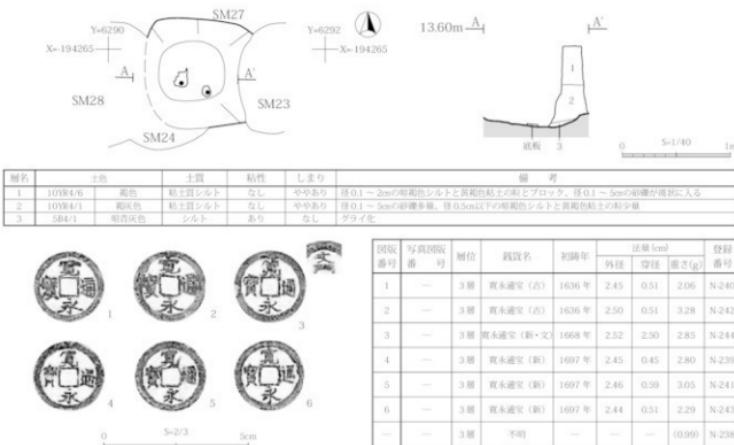
第93図 SM 25墓跡出土遺物

21) SM 27墓跡 (第94図 図版13-2・5)

G-15グリッドに位置し、SM 23・24・28より古い。規模は、上端が $100 \times 86\text{cm}$ 、掘り方の底面が $60 \times 55\text{cm}$ 、深さ75cmを測る。平面形は、上端が隅丸長方形で掘り方の底面は隅丸方形である。木棺の底板片がわずかに残存しているが、木棺の形態は不明である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は不明である。

堆積土は、SM 23とSM 24に削平され、一部しか確認されておらず、3層に分層される。

遺物は、3層から錢貨7点が出土している。錢貨は寛永通宝6点と判別不明な錢貨1点で、寛永通宝は、古寛永2点、新寛永(文銘)1点、新寛永3点である。



第94図 SM 27 墓跡平面図・断面図・出土遺物

22) SM 26・28 墓跡 (第95～98図 図版13-1・3～5・23-6～10)

G-14・15グリッドに位置する。SM 26は、SM 28より新しく、SM 25より古い。SM 28は、SM 24・26より古い。

SM 26 の規模は、上端が $88 \times 84\text{cm}$ 、掘り方の底面が 60cm四方 、深さ 60cm を測る。平面形は、上端は不整隅丸方形で掘り方の底面は隅丸方形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

堆積土は3層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

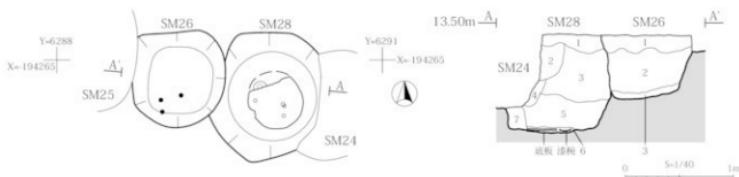
遺物は、2層から土師器の小片1点と肥前產磁器の端反の小杯片1点、鉄釘3点、3層から煙管の吸口片1点、銭貨10点以上が出土している。銭貨は、寛永通宝は、古寛永2点、3点が癒着した銭貨で表面が古寛永の1点と、サビにより5枚以上の銭貨が癒着して判別不能な銭貨1点である。

SM 28 の規模は、上端が $120 \times 88\text{cm}$ 、掘り方の底面が $82 \times 82\text{cm}$ 、深さ 92cm を測る。木棺の底板が残存しており、木棺の底面の形態は $50 \times 42\text{cm}$ の円形である。平面形は、上端は不整隅丸方形で掘り方の底面は円形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

堆積土は7層を確認した。1～6層は木棺の腐食後に動いて堆積した土で、7層は埋葬時の木棺周囲の埋め戻し土と考えられる。

遺物は5層から磁器1点、6層から水晶製数珠玉5点と木製数珠玉1点、銭貨19点、骨片1点、歯約5点が出土している。また底板の下から、土師質器片1点と漆塗りの椀1点が出土している。漆塗りの椀は、口縁部を欠損している。内面は赤色の漆、外表面は黒色の漆が塗られており、高台内に「四盆力」の文字が確認できる。磁器は肥前產磁付香炉の底部片で、17世紀中頃のものである。銭貨は寛永通宝17点と判別不能な銭貨2点で、寛永通宝は、古寛永9点、新寛永(文錢)8点である。歯は、左上の第一小白歯1点、左右不明の上の犬歯と大臼歯の破片数点、右下の犬歯1点と第一小白歯1点である。

第2節 平成21年度調査区



調査名						層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SM 26	1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	なし	あり	後0.5m以下	黄褐色粘土と侵食面	0.5~5cm	薄少弱	
	2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	なし	ややあり	後0.5m以下	黄褐色粘土と微細粒	0.5~5cm	薄少弱	
	4	5Bp3/3	暗褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	やややや	黄褐色	0.5~5cm	薄少弱	
SM 28	1	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	後0.1~2m	黄褐色粘土と黄褐色粘土の粒とブロック	0.5~3cm	薄が付有入る	
	2	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	後0.1~2m	黄褐色粘土の粒とブロック	0.3~3cm	薄少弱	
	3	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	後0.1~1m	黄褐色粘土の粒とブロック	0.3~3cm	薄少弱	
	4	10YR4/1	暗褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	後0.5m以下	黄褐色粘土と微細粒	0.5~5cm	薄少弱	
	5	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	なし	後0.5m以下	黄褐色粘土と微細粒	0.5~3cm	薄少弱	
	6	NSV/0	暗褐色	シルト	あり	なし	やややや	黄褐色	0.1~1m	薄少弱	
	7	10YR5/6	黒褐色	粘土質シルト	あり	あり	後0.1~1m	黄褐色シルトの粒とブロック	0.5~3cm	薄少弱	

第95図 SM 26・28墓跡平面図・断面図

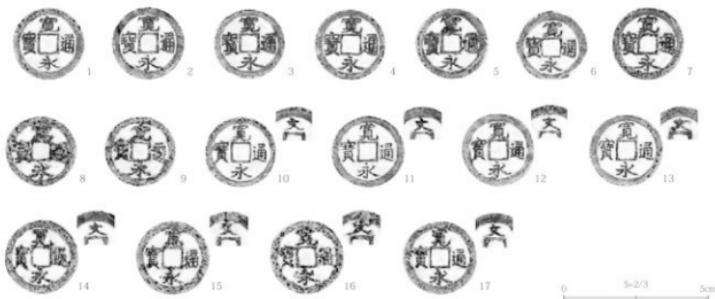


第96図 SM 26墓跡出土遺物

団版番号	写真団版番号	層位	種別	種類	法量 (cm)			文様・備考			登録番号
					上径	底径	高さ	幅	長さ	重量 (g)	
1	—	3層	青玉	玉	2.38	0.45	2.90	N-234			
2	—	3層	青玉	玉	2.42	0.48	2.16	N-235			
3	—	3層	青玉	玉	2.39	0.51	7.03	N-236			
—	—	3層	不明	玉	—	—	—	—	—	31.89	N-237
					法量 (cm)			文様・備考			
					高さ	幅	長さ	重量 (g)			
4	—	6層	数珠玉	水晶	0.43	0.58	0.58	0.27	K-013		
5	—	6層	数珠玉	水晶	0.47	0.55	0.52	0.24	K-016		
6	—	6層	数珠玉	水晶	0.42	0.56	0.58	0.25	K-017		
7	—	6層	数珠玉	水晶	0.44	0.51	0.55	0.22	K-018		
8	—	6層	数珠玉	水晶	0.32	0.45	0.49	0.12	K-019		
9	—	6層	数珠玉	木製	0.29	0.77	0.64	0.03	L-056		

団版番号	写真団版番号	層位	種別	種類	法量 (cm)			文様・備考			登録番号
					上径	底径	高さ	幅	長さ	重量 (g)	
7	23-8	6層	鏡	ブナ	—	5.60	(5.10)	外周黒漆、内赤漆、高台に「西昌」	—	—	L-055
8	23-9	5層	鏡	杏核	底部穴	—	(5.65)	(2.10)	肥前	17c中	J-009
9	23-10	6層	土器	土器	底部一体	縫	(8.88)	(5.90)	2.20	—	J-002

第97図 SM 28墓跡出土遺物(1)



図版番号	写真版番号	層位	鉢貨名	初跡年	法面 (cm)			登録番号	写真版番号	層位	鉢貨名	初跡年	法面 (cm)			登録番号	
					外径	穿径	重さ(g)						外径	穿径	重さ(g)		
1	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.56	0.54	3.70	N-247	10	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.51	0.51	3.90	N-246
2	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.60	0.49	3.93	N-248	11	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.51	0.52	3.63	N-251
3	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.22	0.51	3.42	N-249	12	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.55	0.55	2.94	N-253
4	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.50	0.51	3.31	N-250	13	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.55	0.50	3.94	N-254
5	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.50	0.48	4.31	N-252	14	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.58	0.50	3.72	N-257
6	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.45	0.51	2.96	N-255	15	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.60	0.49	2.82	N-258
7	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.51	0.49	3.10	N-256	16	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.61	0.50	3.12	N-261
8	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.48	0.50	2.80	N-260	17	—	6層	寛永通宝(新・文)	1668年	2.39	0.51	3.21	N-263
9	—	6層	寛永通宝(古)	1636年	2.48	0.41	3.72	N-262	—	—	6層	不明	—	—	—	(270)	N-245
										—	6層	不明	—	2.61	0.50	3.81	N-259

第98図 SM 28 墓跡出土遺物 (2)

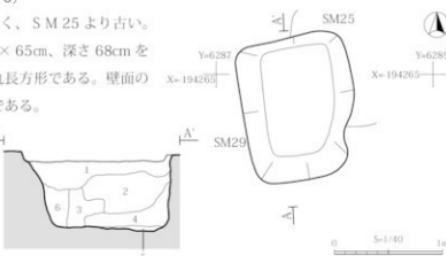
23) SM 29 墓跡 (第99図 図版13-6)

G-14 グリッドに位置し、SD 5より新しく、SM 25より古い。

規模は、上端が $132 \times 104\text{cm}$ 、底面が $98 \times 65\text{cm}$ 、深さ 68cm を測る。平面形は、上端・底面ともに不整隅丸長方形である。壁面の立ち上がりはほぼ直角で、断面形は長方形である。

堆積土は6層で、木棺周囲の埋め戻し土は明確ではない。

遺物は出土していない。



層名	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	10Y4/6	褐色	砂質粘土	ややあわり	0.1 ~ 3cmの黄褐色シルトと黄褐色粘土の粒とブロックが塊状に入る。径 0.5 ~ 7cmの礫少種
2	10Y9/3	褐褐色	砂質シルト	ややあわり	0.3 ~ 1cmの黄褐色粘土ブロックと径 0.5 ~ 5cmの礫少種
3	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあわり	0.5cm以下の黄褐色粘土と径 0.5 ~ 3cmの礫少種
4	5BP7/1	褐褐色	粘土質シルト	ややあわり	ダグラス樹皮。0.5 ~ 3cmの礫少種
5	5BP7/2	青黒色	粘土質シルト	あり	なし
6	10Y3/2	褐褐色	粘土質シルト	ややあわり	0.5 ~ 2cmの黄褐色シルトと黄褐色粘土のブロック。径 0.5 ~ 5cmの礫少種

第99図 SM 29 墓跡平面図・断面図

(6) 性格不明遺構

性格不明遺構は、11基を調査したが、多くは自然の落ち込みの可能性も考えられたため、次の3基のみ提示する。

1) SX1性格不明遺構 (第100図 図版14-1・2・24-1~5)

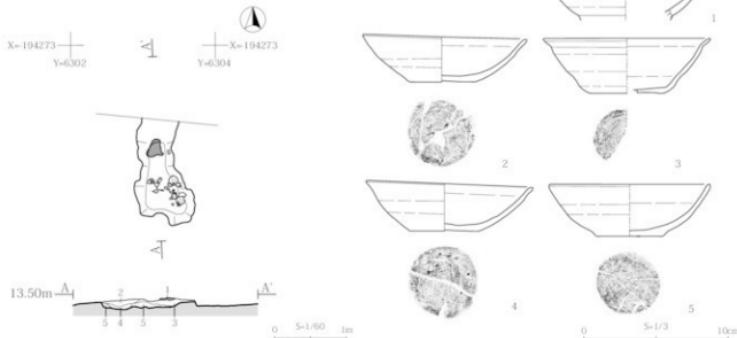
H-16グリッドに位置し、上面と北側を搅乱に削平されている。規模は、上端が $148 \times 84\text{cm}$ 、底面が $90 \times 55\text{cm}$ 、深さ12cmを測る。堆積土上面の $27 \times 20\text{cm}$ の範囲は、被熱により赤色化している。平面形は、上端・底面ともに不整形である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。

堆積土は5層を確認した。1層は被熱により赤色化した層である。

出土遺物の総数は89点である。遺物の出土は主に2層上面からで、内訳は、内面黒色処理されたロクロ土師器の环片が13点、うち底部片が3点で切り離し技法は回転糸切りである。赤焼土器の环片は65点で、うち5点が底部片で切り離し技法は回転糸切りである。ロクロ甕の破片は3点、小片のため不明としたもの4点である。須恵器は环片が2点である。瓦は縄叩きと布目痕のある平瓦と丸瓦が各1点である。須恵器は焼成が甘いためか赤味がかった色調である。赤焼土器の底部整形はすべて回転糸切りで、1点のみ切り離し後ナデ調整を施している。

また、遺構の北側からも2点の赤焼土器の环が出土しており、うち1点

(第100図5) を図化掲載した。



図版 番号	出土遺構 番号	出土層 番号	出土層 層位	種別	器種	法量(km)		外側調整	内側調整	備考	登録 番号
						工様	底様				
1	24-1	SX1	2層	赤燒土器	甕	(14.4)	—	(3.8)	口縁部~体部ロクロの調整	口縁部~体部ロクロの調整	E-011
2	24-2	SX1	2層	赤燒土器	甕	11.4	4.7	3.3	ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	D-029
3	24-3	SX1	2層	赤燒土器	甕	(11.6)	(5.2)	3.8	口縁部~体部ロクロの調整 底部回転糸切り	ロクロ調整	D-030
4	24-4	SX1	2層	赤燒土器	甕	11.6	5.0	3.5	口縁部~底加ロクロの調整 底部回転糸切り	口縁部~体部ロクロの調整	D-032
5	24-5	SX1	—	赤燒土器	甕	(11.2)	4.6	3.6	口縁部~底加ロクロの調整 底部回転糸切り	口縁部~底加ロクロの調整	D-034

第100図 SX1性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

2) SX2性格不明遺構 (第101図 図版14-3~5・24-6・7)

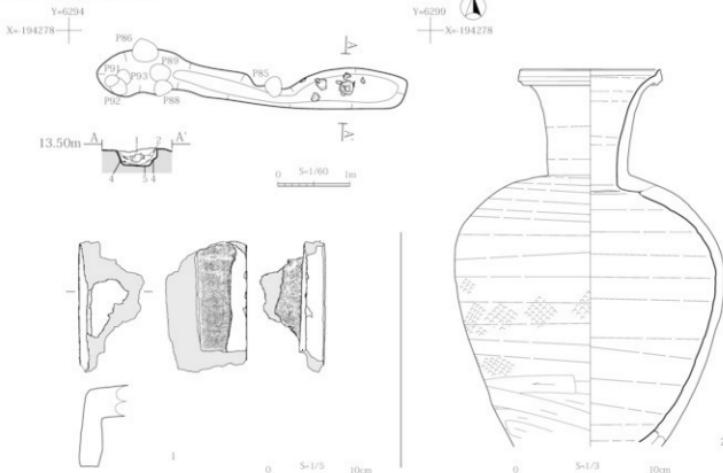
H-15 グリッドに位置する。P 85・86・88・89・91・92・93より古い。

規模は、上端が 428 × 56cm、底面が 310 × 38cm、深さ 24cm を測る。平面形は、上端・底面ともに溝状の不整形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

堆積土は 5 層を確認した。

出土遺物の総数は 32 点である。遺物の出土は主に 3 層からで、内訳は、赤焼土器の壊片が 11 点、うち 1 点が底部片で切り離し技法は回転糸切りである。甕の破片は 3 点、小片のため不明としたものが 7 点である。須恵器は壊片が 4 点、甕の破片が 4 点、壺が 1 点である。瓦は、布目痕のある丸瓦片 1 点と隅木蓋瓦片 1 点である。

隅木蓋瓦は、平坦部から側面部にかけての小片である。須恵器の長頸壺は、底部を欠損しているが、肩部がやや張り出し、直立する頸部から口縁部に向かって外反し、口唇部上方につまみ上げておさめている。頸部と体部の接合は、2段階構成である。



グレーの範囲は欠損部分を示す

編名	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	10Y3/3-1	褐褐色	砂質シルト	少やあり	0.5m以下の黄褐色粘土層
2	10Y3/4-6	褐色	粘土質シルト	少やあり	0.5 ~ 1mの黄褐色粘土と褐褐色シルトのブロックが塊状に入る
3	10Y3/2-2	褐褐色	砂質シルト	少やあり	0.3m以下の黄褐色粘土層
4	10Y4/3-1	にふく黄褐色	粘土質シルト	少やあり	0.3 ~ 1mの黄褐色粘土ブロック中層
5	25YR6-6	明瞭褐色	粘土質シルト	あり	0.5m以下の黄褐色シルト地層

図版 番号	写真図版 番号	出土遺構	出土層位	種類	法面 (cm)			凸面調整	凹面調整	備考	登録 番号
					長さ	幅	厚さ				
1	22-6	SX2	3層	隅木蓋瓦	(15.00)	(7.54)	3.40	ナゲ調整	布目、ヘラケ(?)		H-001

図版 番号	写真図版 番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	法面 (cm)			外側調整	内側調整	備考	登録 番号
						口径	底径	高さ				
2	22-7	SX2	3層	須恵器	長頸壺	(9.80)	—	(26.0)	口縁→斜口縁調整 側面格子タキ付口→ロクロ調整 下閉鎖部ヘラケ(?)	ロクロ調整	内側面部複合編	E-007

第101図 SX2性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

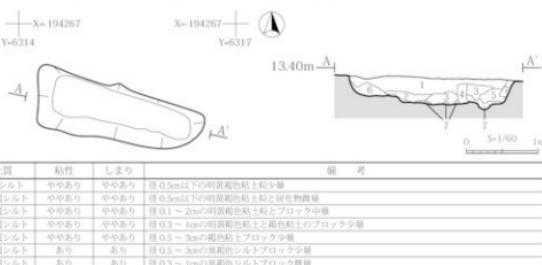
第2節 平成21年度調査区

3) SX9性格不明遺構 (第102図)

G-17 グリッドに位置する。規模は、上端が $238 \times 77\text{cm}$ 、底面が $195 \times 54\text{cm}$ 、深さ 42cm を測る。平面形は、上端・底面ともに不整長方形である。壁面の立ち上がりは直角に近く、断面形は逆台形である。

堆積土は7層を確認した。

遺物は出土していない。



第102図 SX9性格不明遺構平面図・断面図

(7) その他の遺構

石列1基と柱列跡を5列、ピット404基を検出した。ピットの規模等は第3・4表に示した。

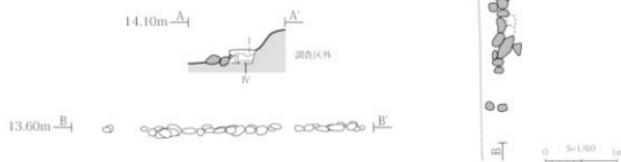
1) 石列 (第103図 図版14-6)

H-14 グリッドに位置する。規模は、南北約 360cm 、東西約 40cm の範囲に径 $5\sim 25\text{cm}$ の円錐や扁平錐が34個が並んでいる。

動いてしまった錐については、破線で範囲を示してある。

この石列を検出した層序は、基本層II層中からIV層上面で、掘り込みは確認されず配置されていた。主軸方向は、長軸基準で $N\sim N^{\circ}$ である。

遺物は、北側の礫と礫の間から、19世紀中葉の肥前磁器紅皿片が1点出土している。



第103図 石列平面図・断面図・見通図

2) SA1・2柱列跡 (第104図 図版14-7)

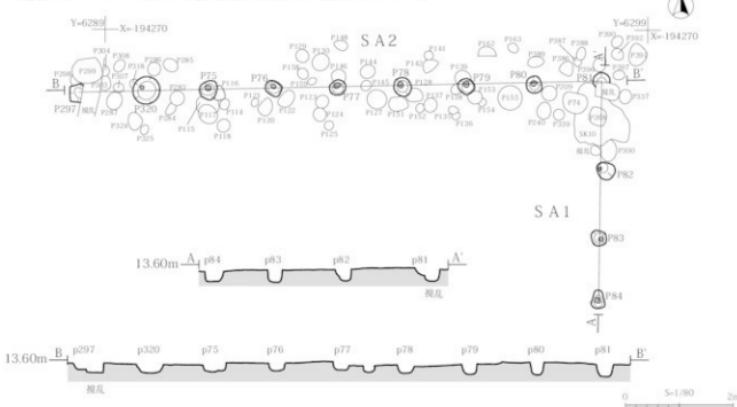
H-14・15 グリッドに位置する。この付近には、東西方向に並ぶように70基ほどのピットが分布しており、複数の柱列跡が想定される。その中で、柱痕を持つものをSA1・2として抽出した。

南北方向のSA1は4基、東西方向のSA2は9基の柱穴からなり、P81を重複する合計12基からなる柱列跡である。径 $8\sim 14\text{cm}$ の柱痕跡が、P81とP297を除く10基のピットから確認された。

SA 1 の長さは 404cmで、柱間寸法は南から 112cm（3 尺 7 寸）・130cm（4 尺 3 寸）・162cm（5 尺 3 寸）と不揃いで、徐々に間隔が大きくなる。主軸方向は、N-1°E である。平面形は、円形もしくは楕円形で、断面形は逆台形である。

SA 2 の長さは 962cmで、柱間寸法は西から 115cm（3 尺 8 寸）・122cm（4 尺）・120cm（4 尺）・117cm（3 尺 8 寸）・117cm（3 尺 8 寸）・122cm（4 尺）・124cm（4 尺 1 寸）・125cm（4 尺 1 寸）とほぼ均一である。主軸方向は、N-89°E である。平面形は、P 297 が不整形でそれ以外の 8 基は円形もしくは楕円形で、断面形は逆台形である。

遺物は、P 80 の上面から近代以降の磁器が 1 点出土している。



遺構名	地名	土色	土質	柱間 (m)	列軸 (m)	列幅 (m)	深さ (cm)	備考	遺構名	地名	土色	柱間 (m)	列軸 (m)	列幅 (m)	深さ (cm)	備考	
P 75	1	10Y6/3-4	褐色地 砂質シルト	36	33	13			P 81	1	10Y6/3-7	褐色地 砂質シルト	31	(18)	22		
	2	10Y6/4-4	褐色						P 82	1	10Y6/4-4	褐色地 砂質シルト	34	32	21	柱底有	
P 76	1	10Y6/3-2	褐色地 砂質シルト	31	26	14			P 83	1	10Y6/3-1	褐色地 砂質シルト	31	29	23	柱底有	
	2	10Y6/3-4	褐色地 砂質シルト	31	27	15			P 84	1	10Y6/3-2	褐色地 砂質シルト	34	26	18	柱底有	
P 77	1	10Y6/3-2	褐色地 砂質シルト	31	26	14			P 85	2	10Y6/3-4	褐色地 砂質シルト	34	22	12		
	2	10Y6/3-3	褐色地 砂質シルト	31	27	15			P 86	1	10Y6/3-1	褐色地 砂質シルト	31	29	23	柱底有	
P 78	1	10Y6/3-4	褐色地 砂質シルト	36	31	15			P 87	1	10Y6/3-2	褐色地 砂質シルト	34	26	18	柱底有	
	2	10Y6/3-4	褐色地 砂質シルト	36	31	15			P 88	2	10Y6/4-4	褐色 粘土質シルト	34	49	17		
P 79	1	10Y6/3-1	褐色地 砂質シルト	30	28	20			P 89	1	10Y6/4-4	褐色地 砂質シルト	34	49	17		
	2	10Y6/3-4	褐色地 砂質シルト	30	28	20			P 90	2	10Y6/4-4	褐色地 砂質シルト	34	49	17		
	3	10Y6/4-6	褐色 粘土質シルト						P 91	1	10Y6/4-6	褐色 粘土質シルト	31	(18)	22		
P 80	1	10Y6/3-1	褐色地 砂質シルト	31	28	24			P 92	1	10Y6/4-6	褐色 粘土質シルト	31	29	23		
	2	10Y6/4-6	褐色 粘土質シルト						P 93	1	10Y6/4-6	褐色 粘土質シルト	31	29	23		

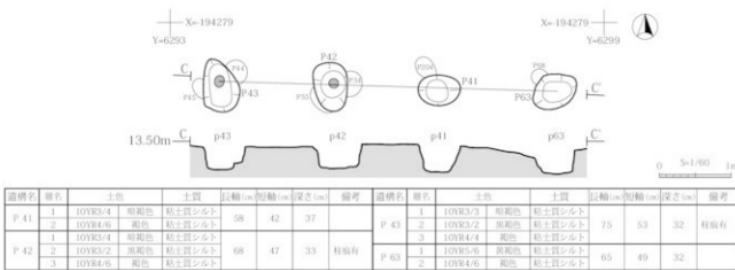
第104図 SA 1・2柱列跡平面図・断面図

3) SA 3 柱列跡 (第105図 図版14-8)

H-15・I-15 グリッドに位置する。東西に並ぶ4基の柱穴からなる柱列跡である。新旧関係は、P 41 は P 204 より新しく、P 42 は P 34・55 より新しく、P 43 は P 44・47 より新しく、P 63 は P 68 より新しい。

長さは 467cmで、柱間寸法は西から 158cm（5 尺 2 寸）・143cm（4 尺 7 寸）・166cm（5 尺 5 寸）である。主軸方向は、N-90°である。柱痕跡は P 42 と P 43 で確認された。平面形は、P 41 と P 42 が楕円形、P 43 と P 63 が不整楕円形で、断面形は逆台形である。

遺物は、P 41 の 2 層からロクロ土師器の壺片 5 点と、P 43 から須恵器の壺片 1 点が出土している。



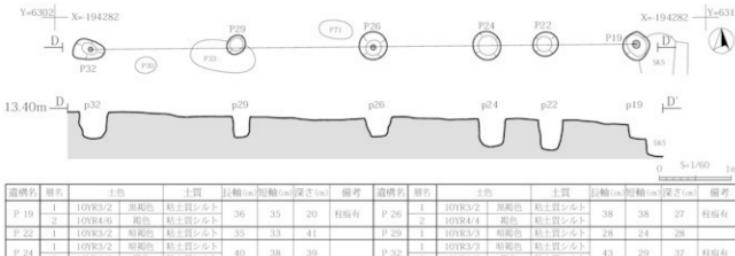
第105図 SA3柱跡平面図・断面図

4) SA4柱跡 (第106図)

I-16・17グリッドに位置する。東西に並ぶ6基の柱穴からなる柱跡である。柱間寸法が不定だが、後述するSA5柱跡と直交するとみられるため、柱列として抽出した。P 19はSA5と重複し、SB1のSK5より新しく、P 29はP 33より新しい。

長さは760cmで、柱間寸法は西から204cm(6尺7寸)・191cm(6尺3寸)・158cm(5尺2寸)・77cm(2尺5寸)・130cm(4尺3寸)である。主軸方向は、N-90°である。径8~14cmの柱痕がP 32とP 26とP 19から確認された。平面形は、不整梢円のP 32を除く5基のビットは円形で、断面形は逆台形である。

遺物は、P 24から布目痕のある丸瓦片が1点出土している。



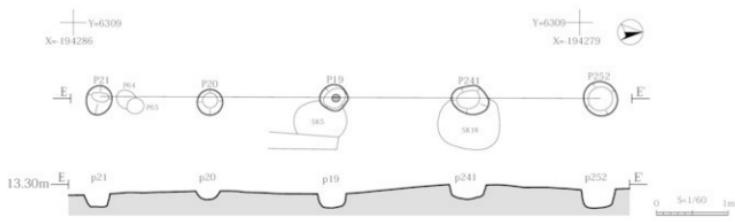
第106図 SA4平面図・断面図

5) SA5柱跡 (第107図)

H-16・17グリッドに位置する。南北に並ぶ5基の柱穴からなる柱跡で、P 19はSA4と重複し、SB1のSK5より新しく、P 241はSB1のSK18より新しい。

長さは694cmで、柱間寸法は南から152cm(5尺)・174cm(5尺7寸)・184cm(6尺1寸)・184cm(6尺1寸)である。主軸方向は、N-0°である。柱痕はP 19のみから確認されている。平面形は、P 21とP 241が不整梢円形、P 20とP 19とP 252は円形で、断面形は逆台形である。

遺物は、P 20から繩叩きと布目痕のある平瓦片が1点出土している。



第107図 SA5柱列跡平面図・断面図

遺構名	層位	土軸	土質	柱軸	柱軸(△)深さ(cm)	備考
P 20	1	10/3/3/2	埴輪地	粘土質シルト	35 35 12	P 241
P 21	1	10/3/3/2	埴輪地	粘土質シルト	41 35 18	P 252

遺構名	層位	柱軸(△)深さ(cm)	柱軸(△)深さ(cm)	柱軸(△)深さ(cm)	備考
P 70	1	30	27	22	△△△
P 71	2	43	25	14	
P 72	1	34	7	10	
P 73	1	19	18	11	
P 74	1	47	38	12	柱軸
P 85	2	27	24	10	
P 86	2	36	33	30	
P 87	2	66	35	11	
P 88	1	26	22	21	
P 90	1	21	19	9	
P 91	1	19	15	8	
P 92	2	21	(19)	23	
P 93	1	20	(15)	13	
P 94	1	39	22	22	
P 95	2	33	23	28	
P 96	1	24	23	9	
P 99	1	24	23	13	
P 100	1	41	23	18	
P 101	1	30	22	7	
P 103	1	40	36	4	
P 104	1	29	29	6	
P 105	1	19	18	9	
P 107	1	17	17	10	
P 109	1	19	17	17	
P 110	1	15	14	16	
P 112	1	22	22	13	
P 114	2	21	17	18	
P 115	2	43	(17)	13	
P 116	1	27	(18)	15	
P 117	1	38	33	32	
P 118	1	25	23	20	
P 120	2	33	25	22	
P 121	1	16	13	8	
P 122	1	35	24	14	
P 123	1	25	23	24	
P 124	1	17	24	16	
P 125	1	36	17	17	
P 127	1	31	30	11	
P 128	1	17	17	12	
P 129	2	29	25	18	
P 130	1	14	30	27	
P 131	1	17	14	9	
P 132	1	7	14	9	
P 133	1	16	17	13	
P 134	1	16	16	14	
P 135	1	16	16	9	
P 136	1	16	(11)	8	
P 137	1	27	25	16	
P 138	1	18	(10)	17	
P 139	1	28	(10)	22	
P 140	2	22	21	25	
P 141	1	17	17	15	
P 142	1	31	21	14	

第3表 平成21年度ピット集計表(1)

集計表に記載の無いピット番号は、柱列跡に記載のある番号以外は、調査及び整理時に、自然の落ち込みと判断し欠番とした。

遺構名	層位	柱軸(△)深さ(cm)	柱軸(△)深さ(cm)	柱軸(△)深さ(cm)	備考
P 143	2	28	25	27	
P 145	1	20	18	12	
P 146	1	27	(18)	18	
P 147	1	(30)	36	7	
P 148	1	26	18	32	
P 149	1	21	17	17	
P 150	1	24	24	11	
P 151	2	44	32	12	柱軸
P 152	1	17	15	15	
P 153	2	26	25	15	
P 154	1	16	(10)	14	
P 155	1	45	45	27	
P 156	1	54	51	24	
P 157	1	23	15	17	
P 158	1	22	19	14	
P 159	1	16	13	9	
P 160	2	44	32	37	
P 161	1	12	11	12	
P 162	2	30	(17)	23	
P 163	1	20	16	10	
P 164	1	25	18	26	
P 168	2	68	62	28	
P 170	1	39	39	8	
P 171	2	22	22	6	
P 172	1	18	18	18	
P 173	1	35	30	18	
P 174	1	36	33	27	
P 175	2	33	29	18	
P 177	1	37	37	40	
P 178	2	33	(17)	27	
P 179	1	31	29	40	
P 180	1	24	24	14	
P 181	1	27	25	12	
P 182	1	24	21	11	
P 183	1	(34)	27	15	
P 184	1	36	27	31	
P 185	2	32	26	42	柱軸
P 186	3	33	38	41	
P 187	4	47	(37)	48	柱軸
P 188	1	37	36	19	
P 189	1	28	(15)	16	
P 190	1	(60)	36	12	
P 191	1	23	22	10	
P 192	2	27	21	23	
P 194	1	32	(23)	15	
P 195	2	52	(20)	37	
P 196	1	22	19	17	
P 197	2	35	(31)	19	
P 198	2	29	26	42	柱軸
P 199	2	25	(19)	32	柱軸
P 200	1	36	31	18	
P 202	1	25	(11)	15	
P 204	1	(29)	24	16	

第2節 平成21年度調査区

道耕名	順位	面積(m ²)	幅員(m)	深さ(m)	備考
P 205	1	24	20	13	
P 206	1	14	14	15	
P 207	1	21	(17)	32	
P 208	1	23	21	15	
P 209	2	28	28	23	柱柵
P 210	1	29	30	36	
P 211	1	49	7	28	
P 212	1	33	33	48	
P 213	1	33	30	45	
P 214	2	30	26	37	柱柵
P 215	2	24	23	18	
P 216	3	30	26	45	
P 217	2	33	32	42	柱柵
P 218	1	23	21	20	
P 219	3	30	30	28	柱柵
P 220	1	23	20	15	
P 221	1	58	43	16	
P 222	1	24	17	7	
P 223	2	35	(25)	28	柱柵
P 224	1	48	(25)	25	
P 225	1	45	(25)	25	
P 226	1	45	(28)	25	
P 227	1	(45)	(31)	26	
P 228	2	(56)	(14)	18	
P 229	1	14	14	6	
P 231	2	28	20	17	
P 232	2	27	23	10	
P 233	2	16	(6)	23	
P 234	1	18	(13)	27	
P 235	1	19	(8)	9	
P 236	2	24	20	13	
P 237	1	71	60	15	
P 238	2	28	24	26	柱柵
P 239	2	30	29	24	柱柵
P 240	2	26	26	13	
P 241	2	25	25	28	
P 243	3	23	23	15	
P 244	2	40	39	28	
P 245	3	40	39	22	柱柵
P 246	3	40	35	44	柱柵
P 247	2	50	48	50	柱柵
P 248	2	47	45	35	
P 249	1	31	28	14	
P 250	1	29	20	13	
P 251	1	71	74	10	
P 253	1	35	33	15	
P 254	2	33	(23)	13	
P 255	2	25	34	22	
P 256	1	27	17	16	
P 257	1	40	39	12	
P 259	1	45	43	44	
P 260	1	(18)	(12)	12	
P 261	1	22	(10)	25	
P 262	2	27	25	26	
P 263	1	26	24	11	
P 264	1	25	23	14	
P 265	1	20	13	8	
P 266	1	22	17	12	
P 267	1	77	16	12	
P 268	1	38	33	26	
P 269	1	31	29	22	
P 281	1	23	22	18	
P 282	1	28	28	17	
P 283	1	25	25	25	
P 284	1	(18)	15	16	
P 285	1	28	23	14	
P 286	1	25	24	14	
P 287	1	33	28	14	
P 288	1	23	17	9	
P 289	1	23	19	7	
P 290	1	26	26	17	
P 291	1	20	16	9	
P 292	1	32	23	6	
P 293	1	23	21	9	
P 294	1	25	24	11	
P 295	2	33	32	27	
P 296	2	30	26	14	柱柵
P 298	1	(18)	(15)	8	

第4表 平成21年度ピット集計表(2)

道耕名	順位	面積(m ²)	幅員(m)	深さ(m)	備考
P 269	1	57	46	7	
P 300	2	40	30	43	
P 301	1	26	18	32	
P 302	1	36	23	30	
P 303	1	(26)	(17)	8	
P 304	1	19	(12)	20	
P 305	1	31	(17)	29	
P 306	1	22	20	11	
P 307	1	19	17	8	
P 308	1	25	18	11	
P 310	1	22	19	11	
P 311	1	21	19	13	
P 313	1	27	24	19	
P 314	1	28	(8)	24	
P 315	1	17	(15)	6	
P 316	2	43	26	28	
P 318	1	18	(9)	15	
P 321	1	22	(10)	12	
P 322	1	27	24	17	
P 323	1	19	14	24	
P 324	2	45	26	17	
P 325	1	18	14	17	
P 326	2	32	24	33	
P 327	2	25	23	17	
P 329	1	27	(10)	8	
P 330	1	(27)	(15)	25	
P 331	2	32	(17)	8	
P 332	1	72	53	11	
P 333	1	51	50	12	
P 334	1	24	24	11	
P 335	1	17	16	7	
P 336	1	22	21	7	
P 337	1	27	23	27	
P 338	1	21	20	8	
P 340	1	16	14	19	
P 341	1	27	25	15	
P 342	1	15	14	12	
P 343	1	19	19	12	
P 344	1	17	17	21	
P 345	2	21	21	12	
P 346	1	51	43	10	
P 347	1	34	18	32	
P 348	1	28	23	35	
P 349	1	29	22	23	
P 350	2	24	24	24	
P 351	2	47	22	16	
P 352	1	22	20	27	
P 353	2	29	25	8	
P 354	1	31	31	39	
P 356	1	22	19	14	
P 357	2	54	44	46	柱柵
P 358	1	26	22	7	
P 359	1	46	(22)	12	
P 360	2	28	25	8	
P 361	1	30	29	26	
P 362	1	21	21	14	
P 363	1	29	26	34	
P 364	1	17	15	30	
P 365	1	25	24	28	
P 366	1	30	26	27	
P 367	1	25	23	30	
P 368	1	30	25	19	
P 369	1	26	26	19	
P 370	1	14	14	20	
P 371	1	26	25	28	
P 372	1	48	29	32	
P 373	1	19	18	7	
P 374	1	22	17	18	
P 375	1	25	19	17	
P 376	1	30	19	9	
P 377	1	31	28	10	
P 378	1	40	32	37	
P 379	1	22	20	12	
P 380	2	(25)	(14)	29	
P 381	1	22	21	22	
P 382	1	41	21	13	
P 383	1	17	16	15	

道耕名	順位	面積(m ²)	幅員(m)	深さ(m)	備考
P 385	1	14	14	17	
P 386	1	26	26	24	
P 387	1	16	15	13	
P 388	1	24	16	27	
P 389	3	30	19	20	
P 390	3	25	18	29	
P 391	2	29	21	18	
P 392	2	29	21	18	
P 393	1	16	16	29	
P 396	1	29	23	26	
P 397	1	22	17	12	
P 400	1	24	17	29	
P 401	1	25	23	13	
P 402	2	27	(17)	20	
P 404	2	55	(21)	38	
P 405	1	26	25	19	
P 406	2	(22)	(20)	19	
P 407	2	35	(24)	30	
P 408	1	16	13	11	
P 412	2	20	17	12	
P 413	2	28	22	12	
P 414	2	23	(14)	14	
P 415	2	39	25	19	
P 416	1	53	46	13	
P 433	1	18	18	25	
P 434	1	18	16	16	
P 435	1	28	19	19	
P 436	1	29	23	21	
P 437	3	25	22	22	
P 440	1	26	19	13	
P 449	1	20	17	17	
P 450	2	31	(18)	21	
P 451	1	26	23	13	
P 452	1	45	43	14	
P 453	1	32	23	12	
P 454	1	10	19	9	
P 455	1	19	18	10	
P 456	1	29	24	19	
P 457	1	25	20	20	
P 458	3	31	23	38	
P 459	1	21	17	12	
P 460	1	45	28	12	
P 461	1	32	18	12	
P 462	1	19	18	9	
P 464	1	36	(24)	13	

第5章 自然科学分析

薬師堂東遺跡墓跡から出土した棺材および木製品の樹種

吉川純子(古代の森研究会)

1. 試料と方法

薬師堂東遺跡は仙台市若林区の東の沖積地に立地し、かつての陸奥国分寺の坊が位置していた場所とされている。平成21年度に本調査が行われ、調査区の北側で29基の近世の墓跡が確認された。これら墓跡の多くは棺材が残っており、また一部の墓跡からは木製の副葬品が確認されたため、当時の木材利用を解明する目的でこれら樹種を調査した。

分析に充てた種類は、棺材の底板23点、側板1点の計24点、副葬品は櫛、漆塗木片、数珠玉など計12点の樹種同定を行った。出土木材からは直接剥刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の3方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。なお数珠玉2点については保存処理済みで乾燥し亀裂が多数確認されたため、反射照明型顕微鏡で観察・同定した。

2. 同定結果

薬師堂東遺跡から出土した木材の樹種同定結果を表1に示す。出土した樹種は、アカマツ、マツ属複雑管束亜属、モミ属、スギ、アスナロ属、ヒノキ科、針葉樹、ハンノキ属ハンノキ亜属、ブナ属、サクラ属サクラ節、イスノキ、広葉樹環孔材であった。以下に同定された分類群の記載を行う。

モミ属 (Abies)：樹脂道ではなく、早材から晚材への移行は比較的緩やかで晚材は厚い。放射組織は柔細胞のみでじゅず状末端壁である。分野壁孔はスギ型で小さく1分野に1～3個ある。

アカマツ (Pinus densiflora Sieb. et Zucc.)：早材から晚材への移行は急で晚材部が厚く、垂直・水平樹脂道がある。放射假道管の内壁に著しい銀歯状の突起がある。分野壁孔は窓状で1分野に1個ある。銀歯状突起がそれほど激しくないものはマツ属複雑管束亜属とした。

スギ (Cryptomeria japonica (Linn. Fil.) D.Don)：早材から晚材への移行は急で晚材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い梢円形となり、1分野に2～3個ある。

アスナロ属 (Thujopsis)：早材から晚材への移行はゆるやかで年輪界が比較的明瞭なヒノキに似た針葉樹。晚材部付近に樹脂細胞があり水平壁が数珠状に肥厚する。分野壁孔はスギないしヒノキ型で小さく1分野に2-3個存在する。晚材部がやや薄いが分野壁孔が溶けて確認できないものをヒノキ科とした。

針葉樹：放射組織は柔細胞のみからなるようであるが、分野壁孔が溶けて確認できず、細胞壁も薄く組織が失われている可能性があるものを針葉樹とした。

ハンノキ属ハンノキ亜属 (Alnus subgen. Alnus)：中程度の道管が2～4個放射方向に複合して均一に分布している散孔材である。道管には数の多い階段穿孔があり、壁孔は交互状。放射組織は單列同性で集合放射組織が確認できる。

ブナ属 (Fagus)：単独ないし数個複合した管孔がほぼ均一に年輪内に分布する散孔材。道管内の穿孔板は單一で柔組織は接線状、放射組織はほぼ同性で単列のものと複合状の大きい放射組織がある。

サクラ属サクラ節 (Prunus sect. Pseudocerasus)：中程度の道管が単独ないし数個複合して年輪内に平等に分布し、晚材部付近で少し径が小さくなる散孔材。道管は單穿孔で内壁にらせん肥厚がある。放射組織はやや異性で1～4細胞幅程度、放射柔細胞に結晶細胞が見られる。

イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) : 小さい道管が均一に分布する散孔材、道管は段数が少ない階段穿孔を有する。軸方向柔細胞に結晶が多く細胞が丸く膨れる。放射組織は異性で幅は1~3列で数個の單列部を介して軸方向に長く連なる。放射柔細胞にも丸い結晶細胞が見られる。

広葉樹環孔材: 数珠玉は保存処理と乾燥のため、全面に比較的深い亀裂が生じており、細胞構造の把握が困難であった。横断面ではやや大きい道管と小さい道管が確認され、環孔材であることがわかった。放射細胞は方形で、大きい道管の壁は交互壁孔であり、小道管内壁にはらせん肥厚がみとめられ、道管の穿孔版は單一であった。接線断面で観察するとほとんどの放射細胞のところで裂け目が生じており、形状や幅の細胞数などが確認できなかった。

試料番号	道構	登録番号	種別	位置	分類群
1	SM3	L-002	曲物	—	針葉樹
2	SM3	L-003	柳	—	イスノキ
3	SM3	L-004	柳	—	ハンノキ属ハンノキ亜属
4	SM3	L-005	柳	—	イスノキ
5	SM5	L-007・8	色紙箱	—	ヒノキ科
6	SM5	L-009	漆塗木片	—	サクラ属サクラ節
7	SM5	L-010	漆塗木片	—	サクラ属サクラ節
8	SM5	L-011	漆塗木片	—	サクラ属サクラ節
9	SM7	L-034	数珠玉	—	環孔材(広葉樹)
10	SM7	L-035	数珠玉	—	環孔材(広葉樹)
11	SM9	L-041	折敷	—	アスナロ属
12	SM28	L-055	漆塗椀	—	ブナ属
13	SM1	—	円形木棺	底板片	針葉樹
14	SM2	—	方形木棺	東側底板	スギ
15	SM3	—	方形木棺	底板	スギ
16	SM4	—	方形木棺	底板片	スギ
17	SM5	—	正方形木棺	北側側板	スギ
18	SM5	—	正方形木棺	底板	スギ
19	SM6	—	方形木棺	底板片	針葉樹
20	SM7	—	正方形木棺	底板	マツ属複離管東亜属
21	SM8	—	長方形木棺	底板	スギ
22	SM8	—	長方形木棺	底板	スギ
23	SM8	—	長方形木棺	側板押さえ	スギ
24	SM8	—	長方形木棺	西側側板内側	マツ属複離管東亜属
25	SM8	—	長方形木棺	西側側板外側	マツ属複離管東亜属
27	SM12	—	方形木棺	底板	モミ属
28	SM14	—	方形木棺	底板片	スギ
29	SM16	—	方形木棺	底板	スギ
30	SM17	—	円形木棺	底板片	アカマツ
31	SM18	—	方形木棺	底板	スギ
32	SM19	—	円形木棺	底板片	スギ
33	SM21	—	方形木棺	底板片	スギ
34	SM22	—	円形木棺	底板片	スギ
35	SM23	—	円形木棺	底板片	マツ属複離管東亜属
36	SM27	—	不明	底板片	アスナロ属
37	SM28	—	円形木棺	底板	モミ属

第5表 薬師堂東遺跡出土木製品・木棺底板の樹種

3. 考察

出土した木製副葬品の樹種の内訳は、針葉樹 1 点、サクラ属サクラ節が 3 点、イヌキと環孔材（広葉樹）が各 2 点、アスナロ属、ヒノキ科、ハンノキ属ハンノキ亜属、ブナ属が各 1 点であった。副葬品は櫛や色紙箱などの生活具をそのまま埋葬したと見られ、櫛はイヌキとハンノキ属ハンノキ節、箱や曲げ物、折敷きなどにはアスナロ属などの針葉樹、椀はブナ属、漆塗木片はサクラ属サクラ節を用いており、器種に応じて適材を使用していたと考えられる。

出土した木棺の底板などの樹種の内訳は、スギ 14 点、マツ属複維管束亜属 4 点、針葉樹とモミ属各 2 点、アカマツ、アスナロ属、各 1 点であった。

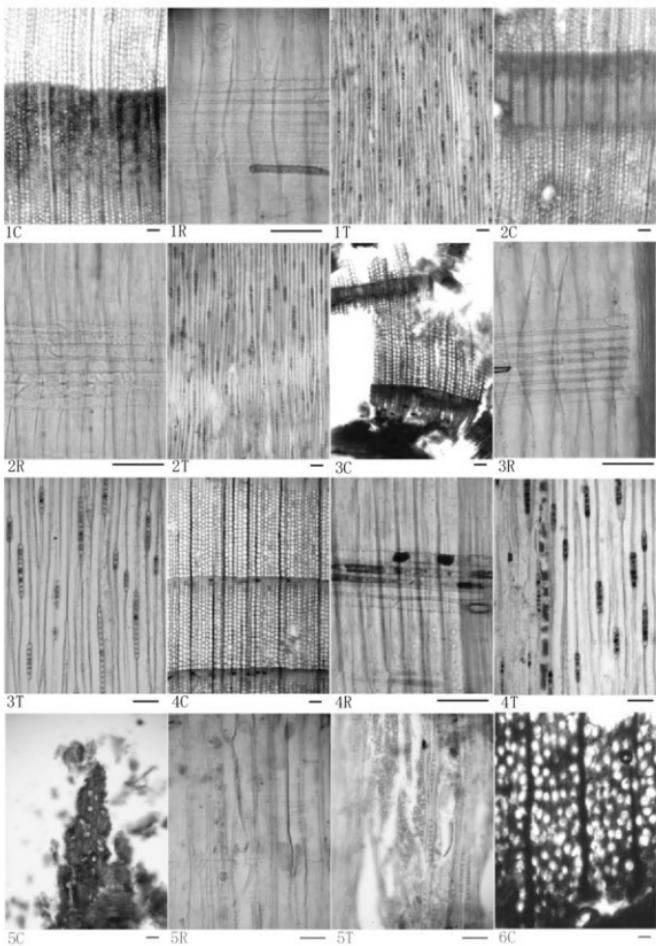
棺材使用樹種（表 2）はすべて針葉樹材が使われていた。最も多く使用されていたのはスギ 14 点で、棺材の 58% を占めていた。またアカマツを含めるとマツ属複維管束亜属が 5 点使われていた。これらのほかにモミ属、アスナロ属などが使われ、棺材には必ず針葉樹を用い、スギとマツ属複維管束亜属が多用されているという結果であった。これは、東北の棺材は 18 世紀以降になるとスギや二葉松類が多く使われる傾向にある（山田 1993）という既存の調査結果と調和的な傾向となった。また、江戸時代 17 世紀後半～19 世紀前半における木棺の形態と樹種についての関連性を調査した鈴木・能城（2006）によると、18 世紀以降の棺材はスギやアカマツ、モミ属が増加する傾向にあり、円形木棺はスギ、方形木棺はモミ属とアカマツが多用されるとしている。本遺跡では試料数が少ないが、スギ材は方形木棺 20 基のうち 7 基（35%）、円形木棺 8 基のうち 3 基（38%）に使われ、ほぼ同率であり偏りは認められなかった。

分類群名＼棺形状	正方形・方形(17 基)	円形(6 基)	長方形(1 基)	不明(5 基)	個数計
スギ	9	2	3		14
ニヨウマツ亜属	1	1	2		4
モミ属	1	1			2
アカマツ		1			1
アスナロ属				1	1
針葉樹	1	1			2
総計	12	6	5		24

第 6 表 薬師堂東遺跡出土木棺材の樹種別個数

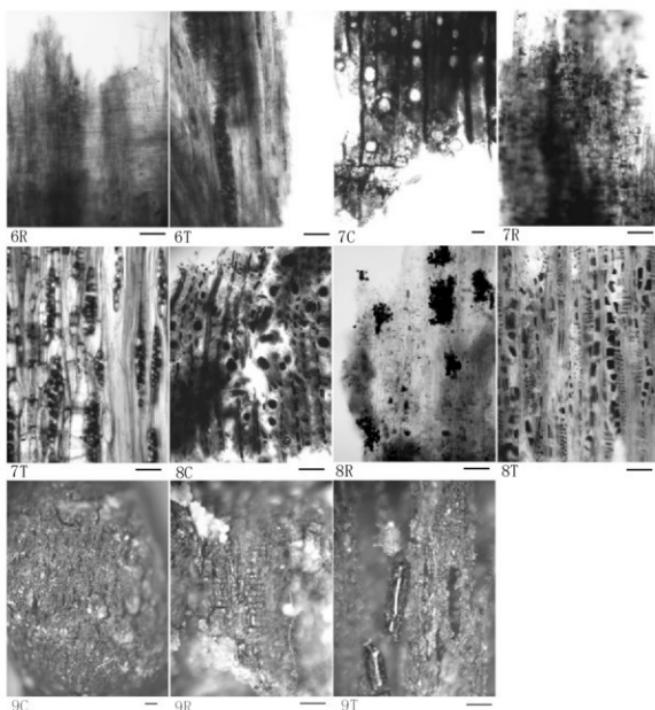
引用文献

- 鈴木伸哉・能城修一、2006. 東京都新宿区崇源寺・正見寺跡から出土した江戸時代の木棺の形態と樹種、植生史研究第 14 卷第 2 号、61-72.
- 山田昌久、1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別第 1 号、植生史研究会、1-244.



1.モミ属 (SM28 桧底板 703) 2.アカマツ (SM17 桧底板 513) 3.スギ (SM8 桧底板 637)
4.アスナロ属 (SM27 桧底板 699) 5.ハンノキ属ハンノキ亜属 (SM3 L-4 櫛) 6.ブナ属
(SM28 L-55 漆器椀) C:横断面, R:放射断面, T:接線断面, スケールは0.1mm

第108図 薬師堂東遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)



6.ブナ属 (SM28 L-55 漆器椀) 7.サクラ属サクラ筋 (SM5 L-11 漆塗木片) 8.イスノキ (SM3 L-3 樹) 9.広葉樹環孔材 (SM7 L-34 数珠玉)
C:横断面, R:放射断面, T:接線断面,
スケールは0.1mm

第109図 薬師堂東遺跡出土木材の顕微鏡写真（2）

第6章 出土遺物と検出遺構について

1 古代の出土遺物と遺構について

(1) S I 2 穫穴住居跡出土の遺物について

S I 2 の S K 1 からは、図化掲載した 21 点の遺物を含む 164 点の遺物がまとまって出土している。出土遺物の構成は、ロクロ土師器の环片 37 点、赤焼土器の环片 47 点、甕の破片 17 点、その他小片のため不明なもの 50 点で、須恵器は壺の底部片 1 点、瓦は平瓦片 7 点、丸瓦 4 点で、そのほかに鉄滓が 1 点である。

そのうち、図化掲載したロクロ土師器と赤焼土器の环 17 点の底部の切り離し技法は、「ハ」の字状に開く貼付高台を持つ 2 点（第 18 図 4・5）と体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリされた 1 点（第 18 図 3）を除く 14 点全てが、回転系切り→無調整である。ロクロ土師器の环の内面調整は、全てに横方向のヘラミガキが施されており、一部に斜め方向（第 18 図 4）と縱方向（第 18 図 8）のヘラミガキが確認できる。器形は、土師器の环のうち 8 点は内湾して立ち上がり、うち 1 点（第 18 図 5）は口縁が外反している。残り 4 点の土師器の环と赤焼土器の环は、直線的に立ち上がる。口径は 12.6 ~ 16.3cm、底径は 5.0 ~ 7.6cm、器高は 3.9 ~ 6.3cm（高台付环 6.5 ~ 7.0cm）で、底径口径比は 1 : 0.35 ~ 0.45 で、平均すると 0.40 である。

土師器环は、製作時にロクロを使用し、内面をヘラミガキ後に黒色処理されており、東北地方南部の土師器編年では、表杉ノ入式に位置づけられ、平安時代とされている。表杉ノ入式期の中での変遷は、製作技法、器形、須恵器や赤焼土器との組み合わせなどから検討されている。

S I 2 穫穴住居跡の S K 1 の出土土器は、赤焼土器を含み、口径底径比が 1 : 0.35 ~ 0.45（平均 0.4）である。類例として、中峰 A 遺跡（宮城県教委 1985）における検討結果を引用すると、東山遺跡（宮城県教委 1981）土器溜の土器群とは、調整・口径底径比が異なり、中峰 A 遺跡 2・12 号竪穴住居跡を中心とした第二段階の土器群（口径底径比 1 : 0.35 ~ 0.5）と、色麻遺跡（宮城県教委 1984）31 号竪穴住居跡出土遺物（口径底径比 1 : 0.35 ~ 0.45）に近似しこれらの遺跡より後出とされている安久東遺跡（宮城県教委 1980）2 号竪穴住居跡（口径底径比 1 : 0.3 ~ 0.4）よりは、口径底径比が大きい。

報告書では、中峰 A 遺跡第二段階の土器群の年代は、1 号竪穴住居跡から出土した黒漆 90 号窯式の灰釉陶器の年代から検討し、900 年に近い頃とされている。それより古い東山遺跡土器溜は 9 世紀中葉と考えられており、安久東遺跡 2 号竪穴住居跡は 10 世紀前半とされている。以上のことから、薬師堂東遺跡 S I 2 穫穴住居跡の S K 1 出土遺物については、9 世紀後半に位置づけておきたい。

(2) S X 2 性格不明遺構出土の遺物について

S X 2 からは、隅木蓋瓦が出土しているが、上面から側面にかけての破片で、全体の形状や孔の有無などは不明である。隅木蓋瓦は宮城県内の出土例は、陸奥国分寺跡（仙台市教委 1990）から、平成元年（1989 年）に行われた塔跡南地区調査区から 1 点と、与兵衛沼窯跡蟹沢地区西地点（仙台市教委 2010）から出土している。

ほかには、須恵器長颈瓶が出土している。宮城県内の生産遺跡で類例を見ると、形状及び 2 段構成の成形技法からみて、須江窯跡で 2 期としている S E K 11 窯段階に類似すると考えられ、8 世紀末葉から 9 世紀第 1 四半期頃に位置づけられる（河南町教委 1993・吾妻 2001）。

(3) その他の古代の遺構について

古代に所属すると考えられる他の遺構として、S K 7 土坑、S X 1 性格不明遺構、S B 1 掘立柱建物跡がある。

S K 7 からは、古代の遺物が多く出土している。下層からは底部ヘラ切りの須恵器环が出土しているが赤焼土器

も出土しており、遺物に時期幅があることから、所属時期は不明である。

S X 1 からは、土師器、赤焼土器と須恵器が出土しており、赤焼土器3点と須恵器1点を図化掲載した（第100図1～4）。赤焼土器は口径が11cm程度と小ぶりで、多賀城跡の土器群であるF群（宮城県多賀城跡調査研究所1992）に近いが、遺構がかなり削平されており遺物の全体像が不明であるため、10世紀代に位置づけられると考えておきたい。

S B 1 は S I 1 より古く、S I 2 との関係は不明である。S I 1 は時期の分かる遺物が出土しておらず、9世紀後半頃としたS I 2 よりも新しいとしか言えないため、S B 1 の所属時期の詳細は不明である。

遺構名	土師器			須恵器			赤焼土器			瓦			その他	合計
	土師器	甕	不明	环	廣(壺)	蓋	赤焼土器	平瓦	丸瓦	その他不明				
S I 1	46 (7)	11 (2)	67	7	6		91 (9)	1	1	3				233
S I 2	144 (29)	133	152	2	1 (1)		252 (33)	15	16	7	3			725
S I 3	1										1			2
S B 1	1	1	1	3 (1)				1						7
S D 2	8 (2)	10 (2)	32	1			2	2	4	2				61
S D 3	1		2											3
S D 4		1	2	1			1	3	4	3				15
S D 5				1			3 (1)	5	3		2			14
S K 3	1													1
S K 7	9 (3)	19	9	4 (2)	10	3	1	3	1					59
S K 15	1													1
S K 21	6											1		7
S K 23	2													2
S K 24								1	1					2
S K 25		2		1	1		7		3					14
S K 26		2					1	1	1					5
S X 1	13 (3)	3	4	2			65 (5)	1	1					89
S X 2		3	7	4	5		11 (1)		1	1				32
S A 3	5			1						1				6
S A 4														1
S A 5								1						1
合計	237 (44)	186 (4)	276	27 (3)	23 (1)	3	434 (49)	34	37	16	7			1280

第7表 出土遺物（古代）集計表

2 近世の墓跡について

(1) 墓跡の構造

29基の墓跡の埋葬形態は、残存していた木棺の底板や底板片の有無、調査の段階で確認した木棺周囲の埋め戻し土と考えられる堆積土の有無などから、次のように分類した。

方形木棺墓14基（S M 2・3・4・5・6・7・10・11・12・14・16・18・20・21）

円形木棺墓6基（S M 1・17・19・22・23・28）

長方形木棺墓1基（S M 8）

不明木棺墓1基（S M 27）

方形直葬墓？3基（S M 15・25・26）

円形直葬墓？2基（S M 13・24）

不明直葬墓？1基（S M 29）

不明1基（S M 9）

墓跡の大きさは、掘り方の上端の長軸が82～206cm、短軸が82～165cm、深さは28～125cmとやや幅があるが、長軸・短軸ともに100cm前後のものが多い。そのなかでもS M 5・6・7・9・22は、長軸132～184cm、短軸118～165cmと大きい。

(2) 墓跡の配置

29基の墓跡の配置は、SM 10からSM 29にかけての17基の墓跡が東西方向に近接して並ぶ一群と、その南東側にSM 4からSM 16にかけての9基が並ぶ一群があり、後者には掘り方の大きな墓跡が多く含まれる。SM 1・2・8はやや離れた所に位置している。

(3) 副葬品

墓跡の形態と出土遺物については、下記第8表の集計表に記載した。

墓跡から出土した遺物のうち、時期決定資料は陶磁器、銭貨、煙管である。

陶磁器 SM 3 : 肥前染付小环 17世紀末(完形)

SM 28 : 肥前染付香炉 17世紀中葉(破片)

銭貨の組み合わせ

a : 古寛永のみ出土(1636年以降) SM 3

b : 新寛永(文銭)だけが含まれるもの(1668年以降) SM 1

c : 新寛永が含まれるもの(1697年以降) SM 2・4・6・8・11～14、16～25・27

d : 銭種不明が含まれるため時期を絞り込めないもの SM 5・10・26・28

e : 銭貨が出土していない墓跡 SM 7・9・15・29

遺構	墓形態	渡來鉄	古寛永	文銭	新寛永	その他	不明	煙管	鉄釘	骨・齒	その他	他の遺物
SM 1	円形木棺墓		2	1					1	2	4	赤漆片
SM 2	方形木棺墓		5	4	9		2		5		10	水晶製数珠玉
SM 3	方形木棺墓			3								柄鏡・曲げ物・瓢甲製櫛・木製櫛3点 磁器の小杯・羽根
SM 4	方形木棺墓				4		2					
SM 5	方形木棺墓	2	2	2		2	2	1	4	3		五點杯・柄鏡・色紙箱・漆塗り木片3点 陰刻2点・五輪塔・骨角器・金属製品2点 木製数珠玉・羽根
SM 6	方形木棺墓		2	3	1						4	
SM 7	方形木棺墓									5		木製数珠玉67点・赤漆片・金属片2点 鈍頭杵・金属製品2点・羽根
SM 8	長方形木棺墓	3		3			1					水晶製数珠玉2点 折敷・粗品に削平される
SM 9	不明											
SM 10	方形木棺墓		2				2			1		赤漆片
SM 11	方形木棺墓	1		2		1				17		
SM 12	方形木棺墓			3			1	46	2			
SM 13	円形直葬墓?	1	1	4				2				
SM 14	方形木棺墓	5	1	8		2	1	2				瓢甲製笄3点 遺物の出土なし
SM 15	方形直葬墓?											
SM 16	方形木棺墓	1		7	1	4	2			21		背佐鉄
SM 17	円形木棺墓	1	1	1						5		柄鏡・赤漆片・金属製品
SM 18	方形木棺墓	2		19		3	2	9				赤漆片
SM 19	円形木棺墓	2		4								
SM 20	方形木棺墓	1	4	3	9		1	2	4			瓢甲製笄2点 水晶製数珠玉3点
SM 21	方形木棺墓	10	4	2			4					
SM 22	円形木棺墓	2	8	3						2		
SM 23	円形木棺墓	2	3	7	1			1				
SM 24	円形直葬墓?	1	2	3	3		4			3		
SM 25	方形直葬墓?			1	6		1	3	3			大型土製品・土鈴2点・金属製品2点
SM 26	方形直葬墓?	3					7	1	3			
SM 27	不明木棺墓	2	1	3		1						
SM 28	円形木棺墓		9	8			2			6		漆塗桶・磁器片・土師質土器片 水晶製数珠玉5点・木製数珠玉
SM 29	不明直葬墓?											遺物の出土なし
合計		6	67	46	91	3	39	14				

第8表 近世墓形態及び出土遺物集計表

煙管の形状

煙管は14点出土しており、時期を判断できる雁首は6点出土している。古泉氏の分類（江戸遺跡研究会 2001）によると、SM24が第IV段階（18世紀後半）、SM1・8・16・18・23が第五段階（19世紀）とみられる。

鏡は3点出土しており、うち2点は背面に文様と鏡師名が記される。SM5出土鏡は、蓬莱文が描かれ「藤原福尚作」とある。藤原福尚は『日本の美術 第42号 和鏡』（中野編 1969）書中の「鏡師名寄」によると江戸中期の鏡師である。SM3出土鏡は、桐文と鳳凰文が描かれ、「藤原光長」とある。藤原光長は同書によると宝永6年（1709年）と文久2年（1862年）の作例が記されており、年代に幅がある。

密教法具はSM5から五鉢杵、SM8から独鉢杵が出土している。五鉢杵は長さ9.22cmで、中心鉢と脇鉢が先端でつながっている。独鉢杵は長さ9.60cmで、鉢の先端部にゆがみがみられる。『密教法具』（奈良国立博物館監修 1965）に平安後期を主に鎌倉・室町時代の資料が提示されており、それらと長さを比較してみると、『密教法具』によると、独鉢杵は長さ13.1cm～33.6cmのものがあり、平均18.3cmである。五鉢杵は長さ13.26cm～24.55cmのものがあり、平均18.06cmである（旅道具及び埋納用とされる10cm台のものと、割五鉢杵、都五鉢杵を除く）。今回の出土資料は、『密教法具』所収の資料に比べ小さい。これが、江戸時代の製品であることによるか、いわゆる「旅道具」（藏田編 1967）にあたるものであるかについては、今後の検討課題とした。

色紙箱はSM5から出土している。内外面漆塗りで、蓋外面には金蒔絵で菊花文が描かれている。蓋内面には銀蒔絵で「金剛院」と記されている。箱の所有者の名前か、箱の保管場所の名前かと推定される。近世の寺院名称としての「金剛院」については、『仙台市史』（仙台市役所 1953）によると、前田（天台宗）、中島丁（真言宗）、場所不明だが修験道のものの3つがあったとされている。また、現在も「小田原金剛院丁」という地名があるが、修験道金剛院があったことに由来するとされている（角川書店 1979）。

（4）墓跡の時期

副葬品の時期はそのまま埋葬の時期を示すものではないが、時期の分かる遺物から推定をしたい。遺物全体の時期は陶磁器、銭貨、煙管雁首の形状から、17世紀中葉から19世紀にかけてである。

一番新しい年代を示す遺物から見ると、煙管雁首の形状から、18世紀後半以降と考えられるものがSM24、19世紀代と考えられるものがSM1・8・16・18・23である。またSM17は、重複関係でSM18より新しいことから、19世紀代に含めたい。

銭貨のうち1697年以降鋳造の新寛永がふくまれるものを見ると、18世紀以降と考え、SM2・4・6・8・11～14・17～25・27である。SM3は古寛永のみが出土しており、共作の肥前染付が17世紀末とされることから、17世紀末以降にさかのぼり位置づけたい。

SM5は銭貨からは判断できないが、共作の鏡の鏡師が江戸中期とされることから、おおむね18世紀以降と考えたい。SM26・28は銭貨からは確定できないが、新寛永が出土する墓より古いので、これらも18世紀以降と考えられる。

以上を整理すると次のとおりである。

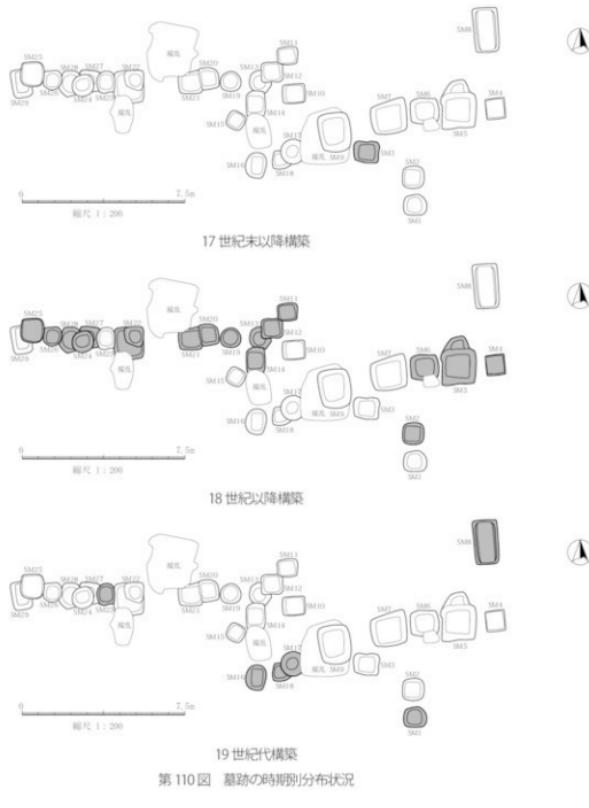
17世紀末以降 : SM3

18世紀以降 : SM2・4・5・6・11・12・13・14・19・20・21・22・25・26・27・28

18世紀後半以降 : SM24

19世紀代 : SM1・8・16・17・18・23

不明 : SM7・9・10・15・29



(5) 近世の調査区の環境について

近世の陸奥国分寺は、薬師堂を中心に周囲に坊が広がっていた（第112図）。今回の発掘調査対象地は、絵図で推定すると「院主坊」と「馬場本坊」にまたがる付近にあたると推定される。

調査区からは29基の墓跡が発見された。そのなかには、密教法具や「金剛院」と記された色紙箱など、一般的墓跡と様相が異なる遺物を出土した墓がある。近世の国分寺の「坊」にあたる場所にある墓跡ということから、僧侶など、寺院に関わりのある人物の墓が含まれていると考えられる。

なお、かつて当地に居住されていた方々に、この付近にはかなり以前には高まりのある場所があったことや、家屋の工事で地下を掘削した際に鏡などが見つかったとのお話をうかがった。



第111図 現在の薬師堂東遺跡の位置

第112図 「安政補正改革仙府絵図」
安政3~6年（1855～1859）
(第二師団旧戦災焼失 高倉ほか 1993)

3 その他の遺構について

その他の遺構については、古代の遺物が少量出土しているものもあるが、明確な時期比定は難しい。そのうち、S A 1・2柱列跡については、近世墓跡群の南側に位置し方向性が近似することから、同時期の柵列などの可能性が考えられる。S K 10は、近世墓跡群に接近し、焼骨片が出土している。墓跡は土葬墓で、火葬遺構が位置するのは不自然ではあるが、現在のところは近世の遺構と考えておきたい。

溝跡については北側に延びるものもあり、今後継続して北側の発掘調査を実施しているため、全体を把握した上で次の報告書において再度検討したい。

4まとめ

- 平成21年度調査区からは、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。竪穴住居跡は、9世紀後半を中心とした時期と考えられる。
- 近世の墓跡が29基検出された。17世紀末頃から19世紀にかけて構築されたものと考えられる。
- S M 5墓跡とS M 8墓跡には、密教法具が副葬されていた。遺跡の位置が、近世国分寺の坊跡にあたることから、寺院関係者の墓跡の可能性が考えられる。
- 平成19年度調査区からは、時期不明のビット等が散漫な状況で検出されており、遺跡の広がりは認められない。

引用・参考文献

- 吾妻俊典 2001 「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」
『古代の土器研究会第6回シンポジウム資料 古代の土器研究』古代の土器研究会
- 阿部正光・佐藤敏幸 1997 「宮城県の近世墓と六道斎」「近世の出土銭一一論考編一」兵庫県埋蔵文化財調査会
- 氏家和典 1957 「東北土器の型式分類とその編年」『歴史』14
- 江戸遺跡研究会 1996 「江戸時代の墓と葬制」江戸遺跡研究会第9回大会
- 江戸遺跡研究会編 2001 「図説江戸考古学研究事典」柏書房
- 加藤道男 1989 「宮城県における土器研究の現状」『考古学論叢II』 芹沢長介先生還暦記念論集刊行会
- 角川書店 1979 「角川地名大辞典 4 宮城県」
- 河南町教育委員会 1993 「須賀川窯跡群 開ノ入遺跡」河南町文化財調査報告書第7集
- 藏田誠編 1967 「日本の美術 第16号 仏具」至文堂
- 桑原温郎 1969 「クロコ土器について」『歴史』39
- 国土地理院 1998 「都市圏活動断面図 仙台 1:25000」
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所

- 鈴木公雄 1988 「出土六道鉄の分析」『増上寺子院群』 東京都教育委員会
- 関根達人 2002 「死者を映した鏡一韻作品に基づく近世鏡の研究ー』『人文社会論叢 人文学科篇 7』 弘前大学
- 仙台市教育委員会 1981 『史跡奥羽分寺跡昭和55年度環境整備予備調査概報』 仙台市文化財調査報告書第27集
- 仙台市教育委員会 1986 「新妻女墓地改修調査報告」『年報7』 仙台市文化財調査報告書第94集
- 仙台市教育委員会 1987a 『富沢遺跡 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第98集
- 仙台市教育委員会 1987b 『山田上ノ台遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第100集
- 仙台市教育委員会 1989 『富沢遺跡・泉崎浦遺跡・仙台市高速鉄道関係道路跡発掘調査報告書I~』 仙台市文化財調査報告書第126集
- 仙台市教育委員会 1990 『仙台平野の遺跡群区一平成元年度発掘調査報告書ー』 仙台市文化財調査報告書第134集
- 仙台市教育委員会 1992a 『町田遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第158集
- 仙台市教育委員会 1992b 『沼垂跡一仙台市上谷刈地区面整理事業関係調査報告書ー』 仙台市文化財調査報告書第166集
- 仙台市教育委員会 1999 『陸奥国分寺跡ほか発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第238集
- 仙台市教育委員会 2003 『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第266集
- 仙台市教育委員会 2007 『仙台市高速鉄道東西線関係道路跡発掘調査(3) 概要報告書』 仙台市文化財調査報告書第316集
- 仙台市教育委員会 2010 『与兵廻沼窪跡一都市計画道路「川内・南小泉線」関係道路発掘調査報告書ー』 仙台市文化財調査報告書第366集
- 仙台市環境計画課編・松本秀明監修 2001 『せんだい空中写真集~杜の都いま、むかし』 仙台市環境計画課
- 仙台市史編さん委員会 1994 『仙台市史 特別編1 自然』
- 仙台市史編さん委員会 1995 『仙台市史 特別編2 考古資料』
- 仙台市史編さん委員会 2004 『仙台市史 通史編5 近世3』
- 仙台市博物館 1992 『仙台市博物館収蔵資料図録④木漆工』
- 仙台市役所 1953 『仙台市史7 別編5』
- 高倉淳ほか編 1994 『絵図・地図で見る仙台 第一輯』 今野印刷株式会社
- 谷川章雄 1997 『江戸の近世墓と六道鉄』『近世の出土銭一論考編ー』 兵庫県埋蔵文化財調査会
- 東京都教育委員会 1988 『増上寺子院群』
- 中野政樹編 1969 『日本の美術 第42号 和鏡』 至文堂
- 奈良国立博物館監修 1965 『密教法具』 講談社
- 兵庫県埋蔵文化財調査会 1996 『日本出土銭総観』
- 政次浩 1996 「仙台市に伝わる平安・鎌倉時代の仏像』『仙台市史特別篇3 美術工芸』 仙台市史編さん委員会
- 松本秀明他 2005 『仙台平野北部、七北田川下流域に発達する自然堤防地形の形成年代と湖淵埋積過程』
『2005年日本地理学会春季学術大会講演要旨集』 No.67
- 松本秀明・熊谷真樹 2010 『広瀬川中流域における完新世の河床高度変化に関する知見』
『東北地理学会・北海道地理学会秋季学術大会発表要旨』 季刊地理学 vol.63
- 宮城県教育委員会 1980 『安久東遺跡』『東北新幹線関係道路発掘調査報告書IV』 宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 1981 『東山遺跡』『東北自動車道道路跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会 1984 『宮城県宮闕場整備等関係道路詳細分布調査報告書 風神古墳群』 宮城県文化財調査報告書第100集
- 宮城県教育委員会 1985 『中峰跡発掘調査報告書』 宮城県文化財調査報告書第108集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991 多賀城跡』
- 陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961 『陸奥国分寺跡』

写真図版

検出遺構写真



1. I区北壁東側・基本層F断面（南から）



2. I区北壁西側断面（南から）



3. I区東側全景（西から）



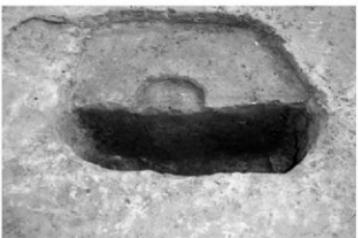
4. I区西側全景（東から）



5. II区南壁・基本層B断面（北から）



6. II区南壁・基本層E断面（北から）



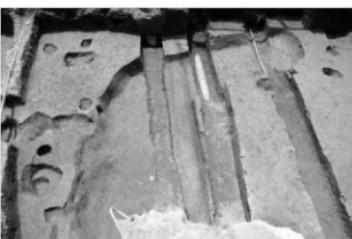
7. II区SA1 P3 C断面（北から）



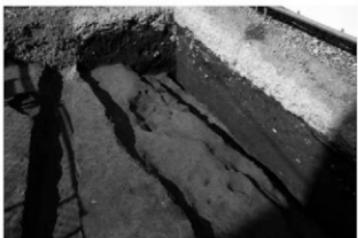
8. II区SA1 完掘（東から）



1. II区 SD1 断面（東から）



2. II区 SD1 完掘（北から）



3. II区 SD2 完掘（南から）



4. II区 SX1 断面（東から）



5. II区 SX1 及び周辺遺構完掘（西から）

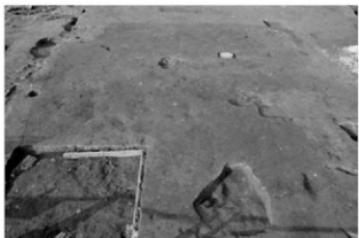


6. II区中央部遺構完掘（西から）



7. II区調査区西侧遺構完掘（東から）

検出遺構写真



1.SI1・2・3 條出（南から）



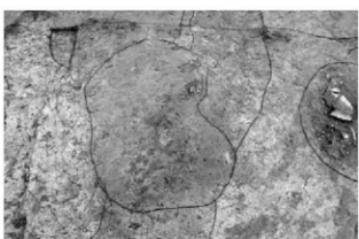
2.SI1・SI2-SK1 A 断面（南から）



3.SI1 完成（西から）



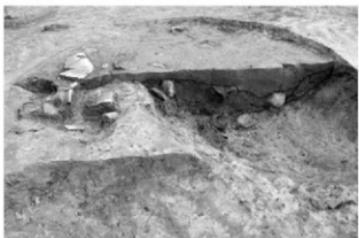
4.SI2・3 C 断面（北から）



5.SI2 條面1 條出（西から）



6.SI2 條面1 C 断面（南から）



7.SI2-SK1 D 断面（西から）



8.SI2-SK1 遺物出土状況（西から）



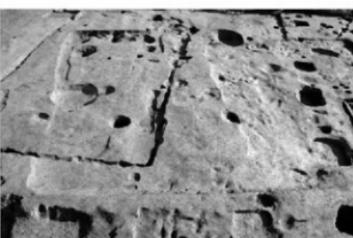
1.SB1-SK5 H 断面（北から）



2.SB1-SK6 I 断面（西から）



3.SB1-SK7 J 断面（西から）



4.SB1 完掘（西から）



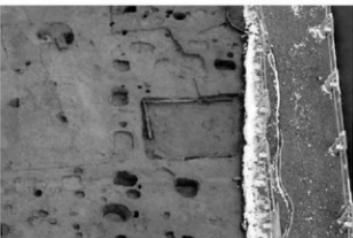
5.SB1-SK3 完掘（西から）



6.SB1・2・3 完掘（南西から）



7.SB1-SK5 D 断面（西から）

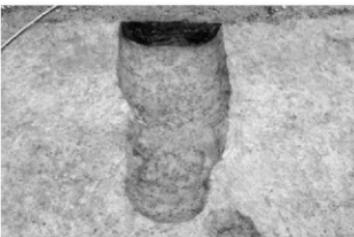


8.SB1 完掘（西から）

検出遺構写真



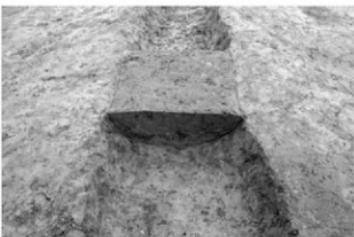
1.SD1 断面（北から）



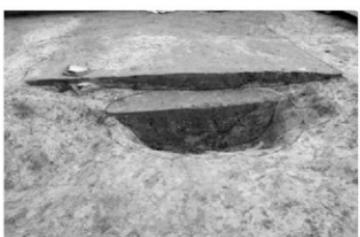
2.SD1 完掘（北から）



3.SD2・3 A 断面（東から）



4.SD3 C 断面（東から）



5.SD4・SK24 B 断面（西から）



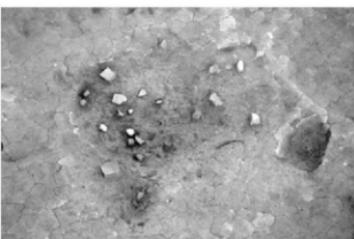
6.SD5 断面（北から）



7.SD1～5 完掘（西から）



1.SK7・P202-B 断面（東から）



2.SK7 遺物出土状況（西から）



3.SK10-A 断面（東から）



4.SK10-B 断面（南から）



5.SK10 燃骨出土状況（南西から）



6.SK10 被熱状況（東から）



7.SK11 墓石出土状況（東から）



8.SK25 遺物出土状況（北東から）

検出遺構写真



1.SM1 断面（東から）



2.SM2 断面（東から）



3.SM2 遺物出土状況（東から）



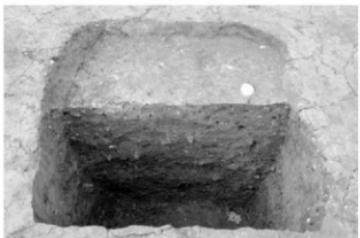
4.SM3 断面（東から）



5.SM3 遺物出土状況（東から）



6.SM3 完掘（東から）



7.SM4 断面（東から）



8.SM5 断面（東から）



1.SMS5 五鉢杵・色紙箱出土状況（東から）



2.SMS5 色紙箱・柄鍵出土状況（北から）



3.SMS5 柄鏡・煙管出土状況（南から）



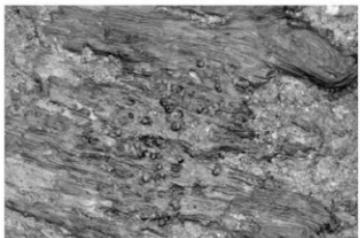
4.SMS5 完掘（東から）



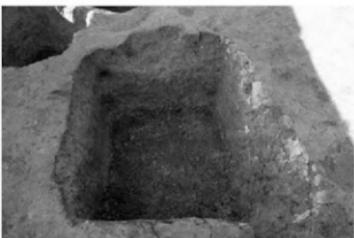
5.SM6 木榠部断面（東から）



6.SM7 断面（東から）



7.SM7 木製数珠玉出土状況（東から）



8.SM7 完掘（東から）

検出遺構写真



1.SM8 断面（西から）



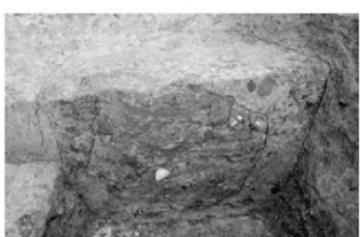
2.SM8 独骨片・粉殻・木片出土状況（西から）



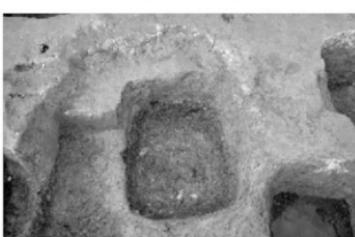
3.SM8 木棺検出（西から）



4.SM8 完整（西から）



5.SM9 断面（南から）



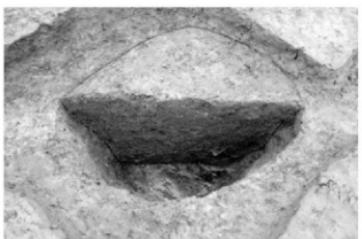
6.SM9 完整（南から）



7.SM10 木棺部断面（東から）



8.SM11 木棺部断面（南東から）



1.SM12 木棺部断面（南東から）



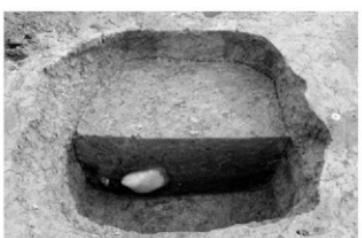
2.SM13 断面（東から）



3.SM14 木棺部断面（東から）



4.SM14 遺物出土状況（東から）



5.SM15 木棺部断面（北西から）



6.SM16 木棺部断面（東から）

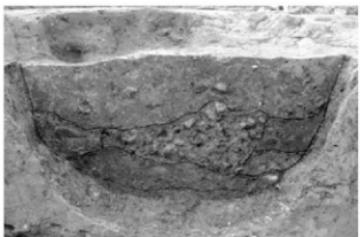


7.SM16 遺物出土状況（東から）



8.SM16 完壁（東から）

検出遺構写真



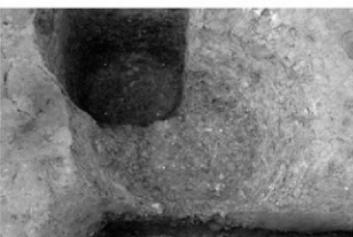
1.SM17 A 断面（東から）



2.SM17・18 切り合い B 断面（南東から）



3.SM17 遺物出土状況（東から）



4.SM17 完成（東から）



5.SM18 断面（東から）



6.SM18 遺物出土状況（西から）



7.SM18 完成（東から）



8.SM19 断面（北から）



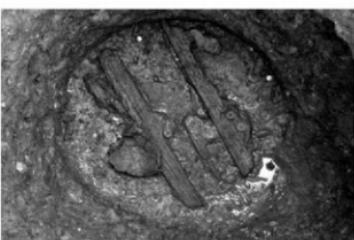
1 SM20 断面（北から）



2 SM21 断面（北から）



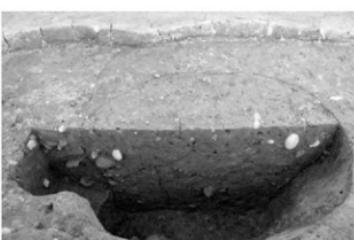
3 SM22 木棺部断面（北から）



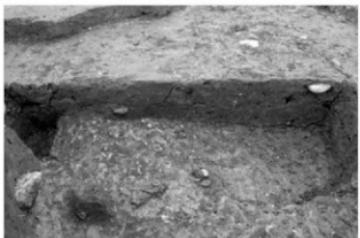
4 SM22 遺物出土状況（北から）



5 SM23 断面（南から）



6 SM24 断面（南から）



7 SM25 断面（北から）



8 SM25 犬型土製品・土鈴出土状況（北から）

検出遺構写真



1. SM26 断面（北から）



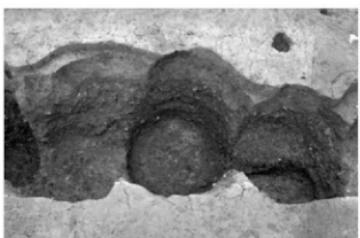
2. SM27 断面（南から）



3. SM28 断面（北から）



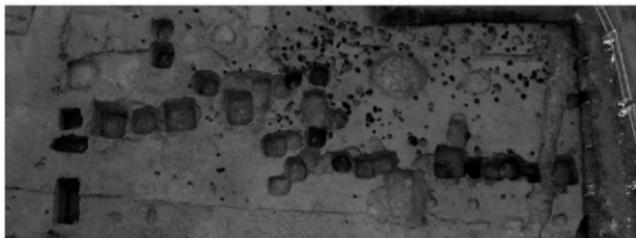
4. SM28 遺物出土状況（北から）



5. SM26～28 完掘（北から）



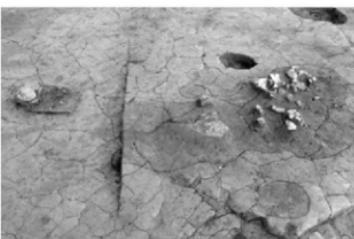
6. SM29 断面（東から）



7. 近世墓跡完掘全貌（北から）



1.SX1 断面（東から）



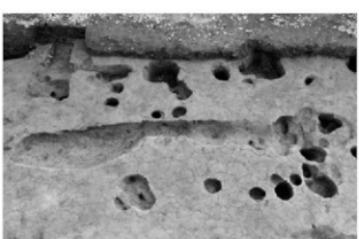
2.SX1 遺物出土状況（西から）



3.SX2 断面（西から）



4.SX2 遺物出土状況（北から）



5.SX2 完掘（北から）



6.石列検出（東から）

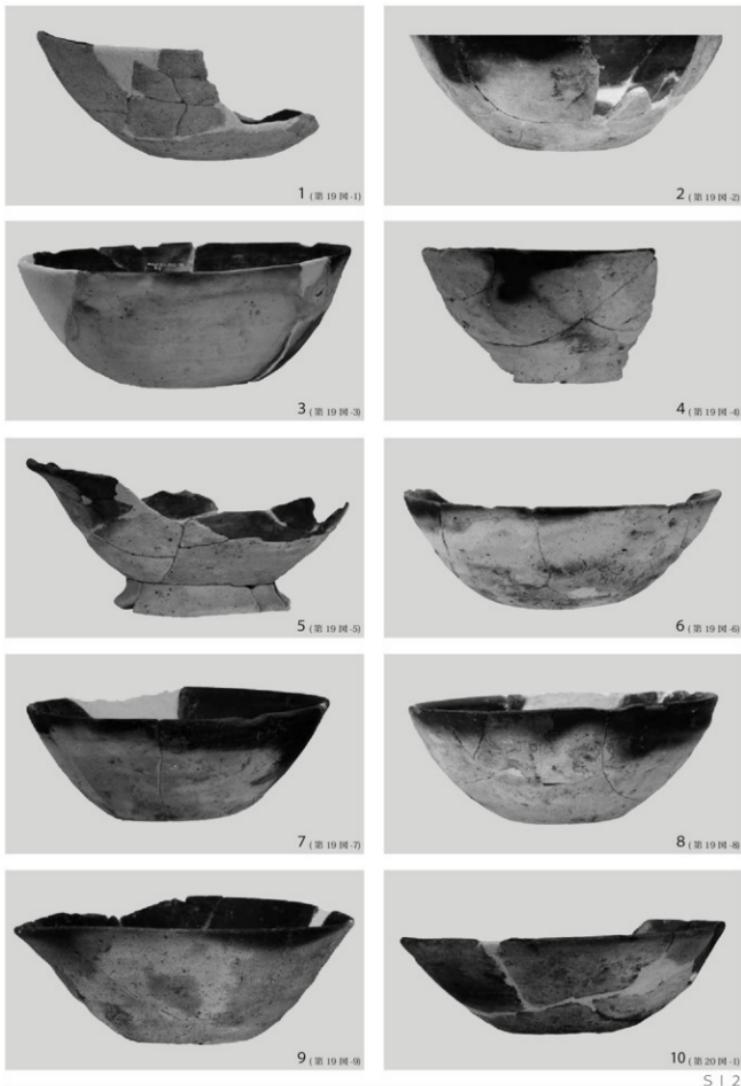


7.SA1・2 完掘（東から）

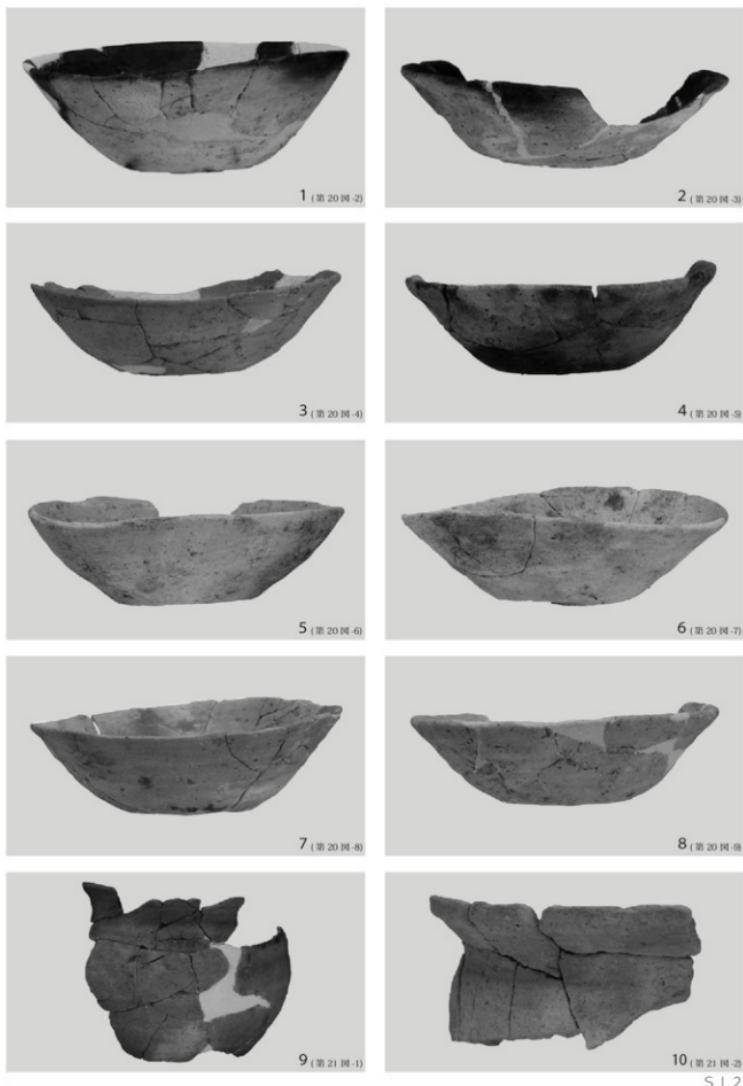


8.SA3 完掘（西から）

出土遺物写真

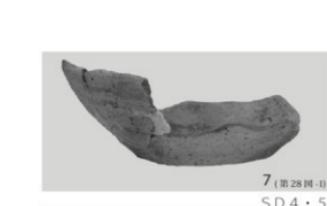
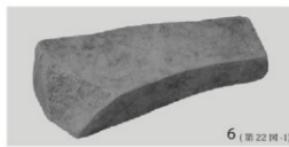
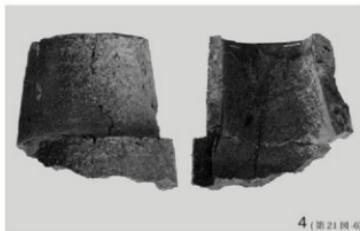
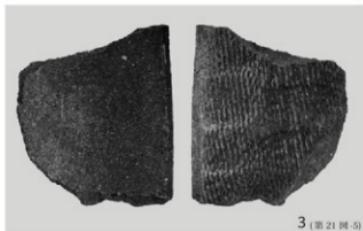
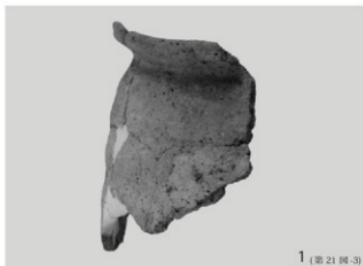


図版 15 出土遺物 (1)
104

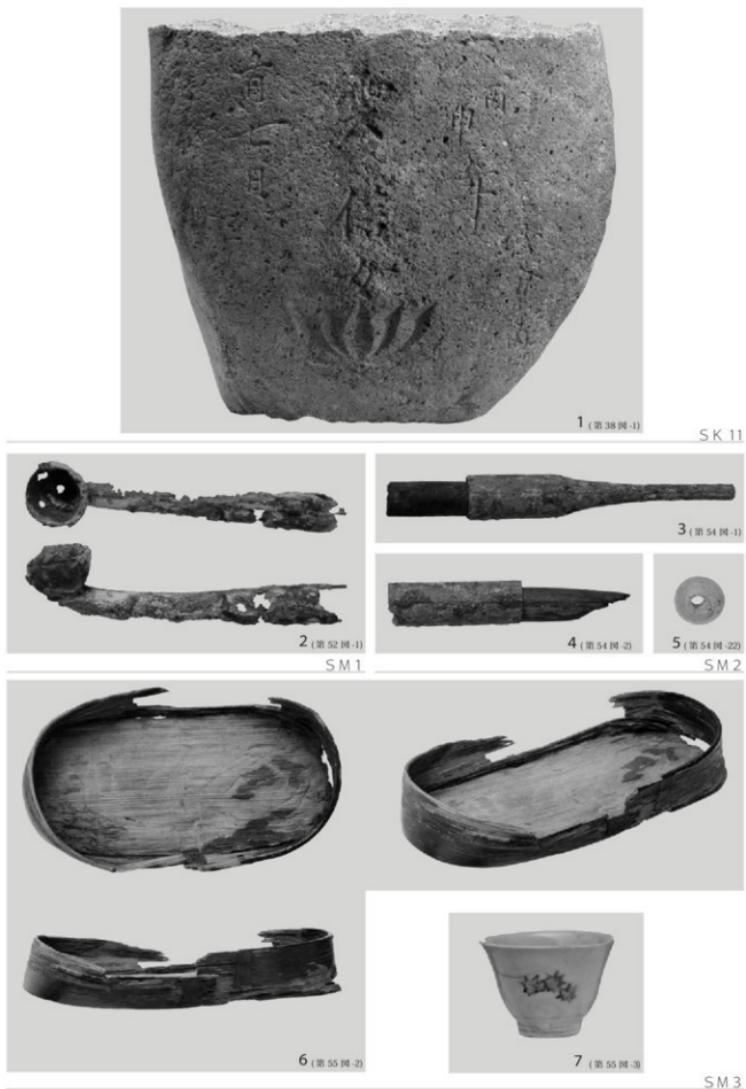


図版 16 出土遺物 (2)

出土遺物写真

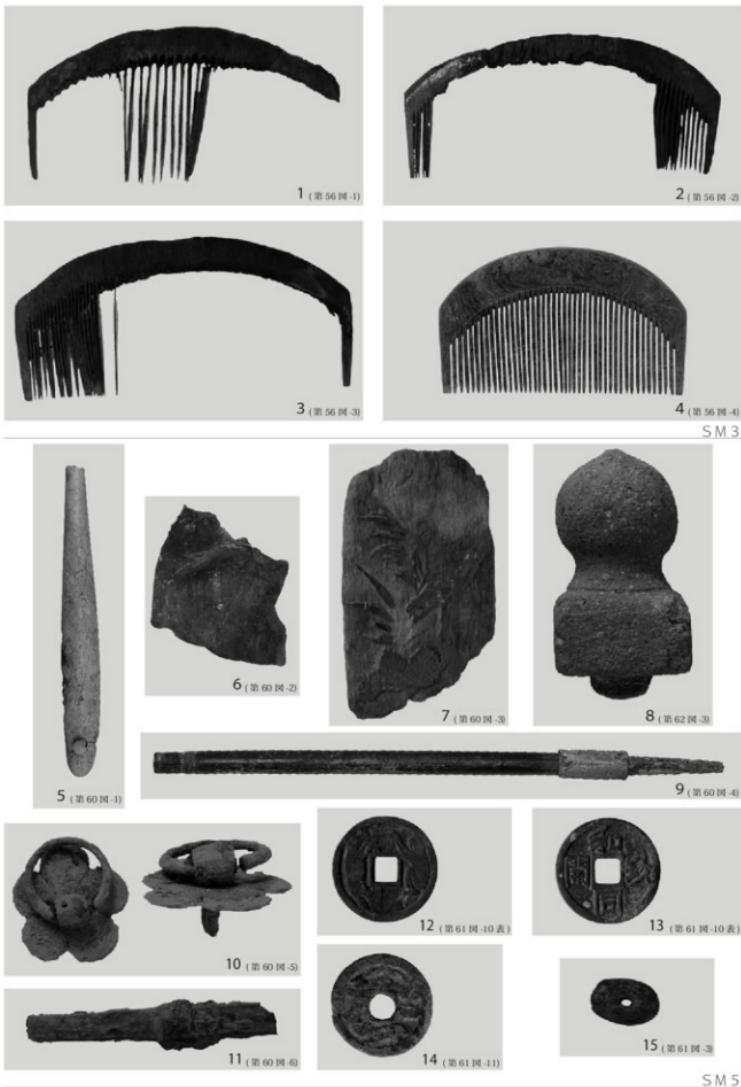


図版 17 出土遺物 (3)



図版 18 出土遺物 (4)

出土遺物写真

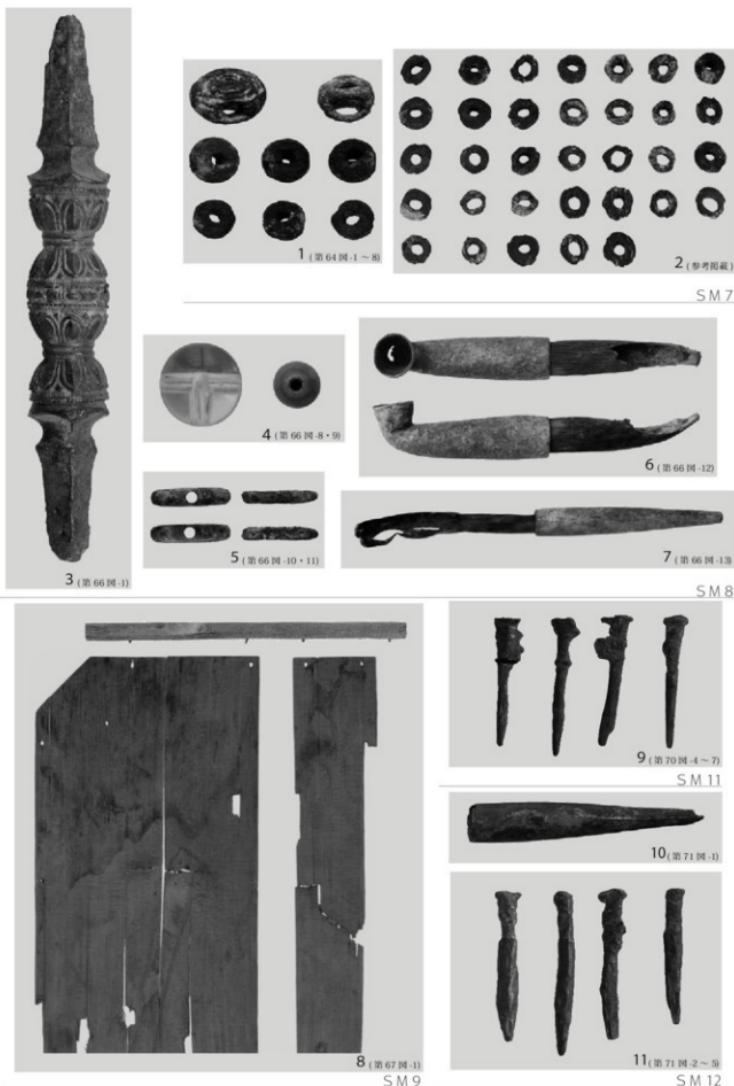


図版 19 出土遺物 (5)

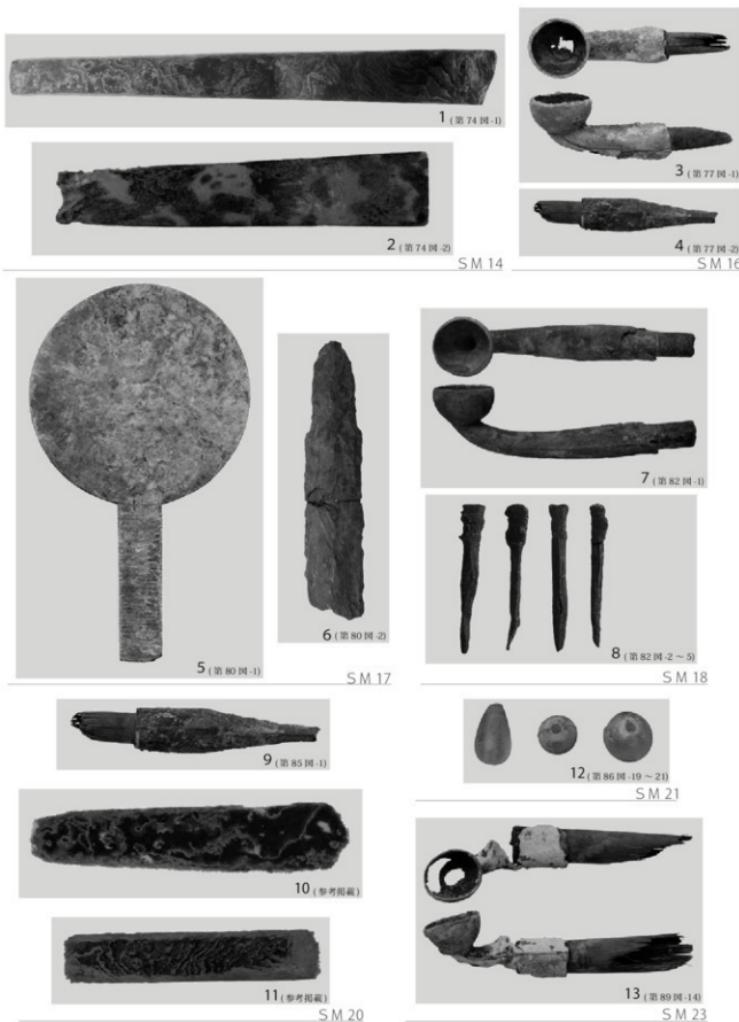


図版 20 出土遺物 (6)

出土遺物写真



図版 21 出土遺物 (7)



図版 22 出土遺物 (8)

出土遺物写真

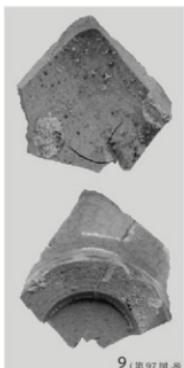


5 (第93図-5)

S M 25



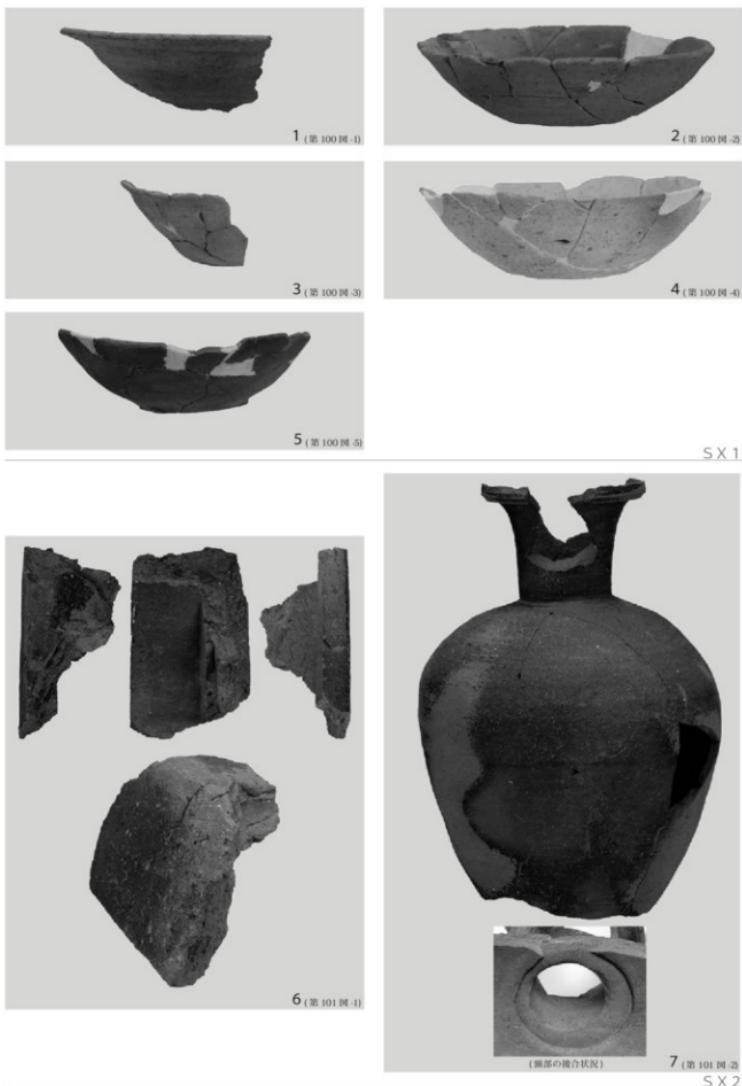
S M 28



9 (第97図-8)



10 (第97図-9)



図版 24 出土遺物 (10)

報告書抄録

報告書抄録

ふりがな	やくしどうひがしいせき							
書名	薬師堂東遺跡							
副書名	—仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書VII—							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番	第 387 集							
編著者名	渡部紀 菊地貴博 野伸伸 安達透夫							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒 980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町 1 番 1 号 TEL022 (214) 8839							
発行年月日	2011 年 3 月 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やくしどうひがしいせき 薬師堂東遺跡	みやぎけん 仙台市 わかばざはし くのした 若林区木ノ下 3 丁目・5 丁目	市町村 4100	遺跡番号 01567	38° 24' 98° 53'	140° 90° 53°	平成 19 年 5 月 7 日 ～ 平成 19 年 7 月 31 日 平成 21 年 8 月 18 日 ～ 平成 21 年 12 月 25 日	1999m ²	仙台市高速鉄道東西線建設事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
やくしどうひがしいせき 薬師堂東遺跡	集落・墓跡	奈良・ 平安時代 江戸時代	住居跡 掘立柱建物跡 溝跡 土坑 近世墓跡 柱列跡		土師器 須恵器 瓦 金属製品 木製品 石製品 陶磁器			
要約	<p>薬師堂東遺跡は、史跡陸奥国分寺跡と史跡陸奥國分尼寺跡の間に位置する遺跡である。</p> <p>古代の遺構としては、竪穴住居跡 3 棟、掘立柱建物跡 1 棟が検出された。竪穴住居跡は、9 世紀後半を中心とした時期と考えられる。</p> <p>近世の遺構としては、墓跡 29 基が検出された。副葬品として、銭貨、柄鏡などの他に、独鉛柱、五鉢柱、透明白色紙箱などがあり、江戸時代の国分寺に関係する人物の墓が含まれると考えられる。</p>							

仙台市文化財調査報告書 第387集

薬師堂東遺跡 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書VII

2011年3月

発行 仙台市教育委員会
宮城県仙台市青葉区二日町1番1号
文化財課022(214)8893~8894

印刷 今野印刷株式会社
宮城県仙台市若林区六丁の目西町2-10
022(288)6123